

分の内心と一致させなくてはならない。しかしこの事は、無産階級詩人の多くにとつて、極めて困難であつた。そこで一方では、この矛盾不一致を包みきれないで、内心の眞實即ち失望の心持ちをうたはずにみられなくなるか、それではなければ、強ひて依然として今までのままの調子を繰り返してゐなければならぬことになる。これが新經濟政策の實施に伴ふところの無産階級文學の危機と稱せられてゐるものである。しかしこの無産階級文學の危機こそは、それ以後のロシア文壇に於いて見られるところの不健全な状態をつくり出だす重要な原因とはなつたのである。無産階級詩人の多くが、この革命の新しい陣地の布かれた際に、依然革命初期からの抽象的な宇宙的な興奮の高處にとどまつて、新しい革命の時期の要求を理解し、新しい社會生活の方法に對應して、文學のうへにも新しい態度手法を立てなほさうとし得なかつた結果は、いはゆる革命の隨伴者乃至「革命の道づれ」と稱せられるところの一派を、文壇の中心へ推し出すやうな事になつたのである。いはゆる「革命の道づれ」の一派の詩人は、その根本の現實觀に於いて無産階級的でなく、小ブルジョワ的であつて、日本へ來て文學の超階級性を説いて行つたビリニャクなどもその中の一人である。しかしながらこの一派は、現實の生活を具體的に描寫する能力技術に於いては、はるかに宇宙的興奮の無産階級詩人たちにすぐれてゐるのである。無産階級的立ち場の現實觀を把持しない「革命の道づれ」が、この危機に於いて文壇の中心に出て來たといふことについては、この危機を救うて、無産階級詩人たちをして革命の陣地へ移らしめるための適當な指導と忠告とを與へなかつたといふ點から、一も二もなく「革命の道づれ」の一派を保護し推賞したといふ點から、フロンスキーその他の批評家などが文壇の左翼からの攻撃の的となつてゐるのである。しかし、このいはゆる危機に於いて、かやうな情勢を示すやうになつたのは、

必ずしもそれだけの簡單な原因によるのみは考へられない。初期の無産階級文學にあらはれた個々の詩人が、前に述べたやうに失望と疲勞との境に落ちて行つたといふ事實はあるにもせよ、革命とともに成長して來た無産階級文學そのものの道筋は、自然の進行をしてゐたと見られぬではない。新經濟政策の實施せられた現實は、革命の感激を冷却せしめるに足るものを十分にもつてゐた。それが已むを得ない戰術であるにもせよ、宇宙的革命などを歌つてはゐられない革命過程の困難な現實の前に、直面せしめられたのは事實である。革命の過程は、このいはゆる危機によつて、抽象的な宇宙的なロマンティックな興奮を通り抜けふるひ落として、一層現實に切實な傾向へとすすんで行かねばならなかつたのである。つまり無産階級文學が、その將來に於いて、一層現實に切實になるためには、この「革命の道づれ」の出現は、避くべからざるものでもあれば、そのために必要な要素——リヤリズムの傾向を、將來の無産階級文學のために提供するものもあつたと言ひ得るのである。

## 五

前からも述べて來たやうに、千九百十七年から二十年までを革命後の無産階級文學の第一期とすると、千九百二十一年は無産階級文學のための危機として第二期を劃し、千九百二十二年からは即ちその第三期に入るものと見られる。十月革命以後、この第三期に至るまでの數年の間に、無産階級文學の力、少くとも、

その將來の力となるべきものがいろいろの方面にその萌芽を示して來た。ロシア共產黨の中央機關新聞を中心として各地の労働者の間に設けられたいはゆるラブコール（労働者通信員の意）の運動の如きもその一つであらう。ラブコールは各地の労働者でその工場の生活を中心として通信を寄稿するものを言ふのであるが、それが共產黨の立場からの一つの目付け役のやうなものであるところから、一方では一種のスパイだといふやうにも見られ、ラブコールの通信で非違を指摘せられたりした側からは、いろいろの壓迫をそのラブコールに加へるやうなこともあり、そのために殺人事件さへ起つたこともあるくらゐである。しかしとにかく、今まで文筆を取るやうなことのあまりなかつた労働者が、自分に近い周囲の生活について、眞に筆にしなければならぬとする事實について書くのであるから、そのうちには一種の奪ふべからざる力があらはれてゐるものも少くない。黨でも政府でもこのラブコールの使命はなかなか重要と見てゐて、殊に労働者の間から生れて來る將來の文學の下地がここに在ることを認めてゐる。従つて、それはまだ文學を生み出だすまでにはなつてゐないのであるが、それでも無産階級文學の陣營からは、この一群もまた新しい力として考へられてゐるのである。そのラブコールはとにかく、あたらしい無産階級文學の團體としては、『モロダヤ・グワルヂイヤ』（若い衛兵軍）、『ラポーチヤ・ウエスナ』（労働者の春）などが成り立ち、千九百二十二年の十二月七日には、自から無産階級文學の最前衛を以て任ずるところの『オクチャ・ブリー』（十月）の一派が組織せられるに至つた。これ等の文學團體を構成する要素は、その年齢から言つてもいづれも大抵その當時に於いて二十歳前後の青年であつて、三十歳に達してゐたものは極めて少かつたやうに見受けられる。無産階級文學の第一期を支配した『ク्रीズニツァ』の一派が、革命の抽象的宇宙的興奮を熱叫したものであるとし、第

二期の危機がその興奮と新經濟政策の現實との衝突から生じたものであるとすると、この第三期は、やうやくその危機を脱して、新しい現實の世界へ踏み出したものだと言へる。革命を如實に見せよ、抽象的な革命の頌歌や賦によつてでなく、現實の描寫によつて、この偉大な時代の姿を示せ、十月革命を肉と血とを備へた具體的なものとして示せ、一般的な「労働者」でなく、花文字で始まつてゐる「労働者」でなく、具體的な何の某といふ労働者の姿を示せ、生きてゐる革命人の姿を示せ——これが「十月」一派の標語であつた。この一派の青年詩人ベズィミャンスキーが、『ク्रीズニツァ』の詩人たちに「と題する詩で、『天體を泥の塊のやうに投げ捨てるのもよからう、電氣の詩（ゲラーシモフを暗に指す）で宇宙を讀へるのもよからう。しかしどこかの郡の林業事務主任に、未來の光りが潜んでゐることを觀たらよからう。赤衛軍が眼にとまらないなどは滑稽だ。十月革命の嵐の電光が見えないなどは滑稽だ。革命の名の下にいろはを習つてゐる兵營の赤衛兵でも讀めて歌つたらよからう。犬の詩を何百書くのも御隨意だが、生きた人間のことを歌つた詩を、たつた一つでも見せてほしい」といふやうな意味を歌つてゐるのは、單にこの「十月」一派の宣言詩と見るべきばかりでなく、ひろくこの時期に於ける無産階級文學の精神を表白したものであると見てよいのである。而してこの精神は、火星の運河のほとりに立てる世界共產の宮殿などを冥想することによつて、世界的宇宙的革命の興奮を示すといふやうなことではなく、「一つ一つの些事の裏に世界革命を見出だすすべをわきまへてゐるものこそ、その人のみ吾等の時代よりも小ならず、その人のみ吾等と往く道を同じうするもの」とする精神なのであつた。新經濟政策の實施が、革命の興奮と現實との矛盾を明示して、無産階級にとつて一つの危機を形づくつたとすれば、それだけに、その重要な轉機となつた新經濟政策といふ革命の新陣營

は、つまらない些細なことのやうに見える凡ての事實(たとへば靴とか織物とかいふやうな製造工業の品物の値段が馬鹿に高くて、農業の生産品が馬鹿に安くなつてしまひ、その間の値のひらきが大きいといふことなど)の中に、世界革命の重要緊密な意義が含まれてゐるのだといふことを了解しなくてはならなかつたのである。これ等の些事のうちに、眞に世界革命とつながるところの、無産階級革命の悲痛も情熱も忍苦も自制も、悉く深くこもつてゐるのであるといふことを了解しなければならなかつたのである。社會生活に於けるこの轉回は、無産階級文學にとつても自づから新しい問題を提示するやうになつた。革命の嵐の時期に於いては、内外に革命の敵が逼り、事實銃剣を執つて戦はねばならなかつたやうな時に於いては、文學はおのづから力を讚美せざるを得なかつた。詩は何よりも戦ひの行進曲であらねばならなかつた。しかしして今は、周囲の資本主義的國家に取り囲まれて、内を養ひ固めて行かうといふ時となつた今では、その現實の生活のあらゆる些事が、いかに大革命と直接間接の關係を持つてゐるか、いかにその些事の裏に多くの革命的悲痛と苦悶とがつつまれてゐるか、——これ等の消息を語らなければならなかつたのである。

革命を具體的に表現するための第一の題材となつたのは、やつと通り過ぎて来たばかりの、まだ記憶に新しい内亂時代の生活である。これを題材としたものに、リベディンスキの「一週間」があり、セラフィモキッチの「鐵の流れ」がある。この二篇は、無産階級文學の中、小説の方面での重要な作品として推稱せられてゐるものである。セラフィモキッチは革命以前から久しく筆を執つてゐた老作家であるが、リベディンスキは、この一篇によつて、はじめて文壇に出た青年作家である。それ等については、ファデーエフの「流れに逆らつて」、グラトコフの「火の馬」、シューピンの諸短篇など、いづれも無産階級の立ち場から、

市民戦を中心にした革命の現實を描き示すところの小説である。無産階級文學の初期の作品が、殆どすべて詩歌であり、少くともそれを中心としたものであつたのに、この時期にいたつては漸く小説の方面にすぐれた作品の出て来るやうになつたといふ事實も、主観的な興奮から客観的な觀察への轉回を示すものである。ピリニャクの諸作にも、この市民戦時代の断片的事實を取り扱つたものがあるが、それ等はその立ち場の點から、無産階級文學に屬するものといふことは出来ない。詩歌の方面でも、ベズイミヤンスキの「コムソモリヤ」やアレクサンドロフスキなどの市民戦を題材とした叙事詩、ジャロフ、ドロニンなどの抒情詩が出でて、新經濟政策の實施によつて一時意氣沮喪した形のあつた多くの無産階級詩人も再び陣容を立て直した觀がある。ゲラシモフやキリロフは、新經濟政策の打撃で革命に失望した側の代表的な詩人であるが、オブラドーキッチの如きは再び「まどろまぬ哨兵、燃えかがやく燈明臺」として、革命を警護するものとなつた。同じ「クーズニツツァ」の詩人ボレターエフの如きも、最初に「鐵の如き不易の義務」の冷靜な意識を感じる革命の戦士であつたのだが、一時はやはり個人主義的孤立の世界に立ちこもらうとして、更に新らしく失望の境から出て来たものである。實際無産階級文學の危機といはれた頃には、革命に失望して、自殺するものもあつた。詩人ニコライ・クズネツォフの如きもその一人であつた。ボレターエフは、「自分はコーリヤ・クズネツォフのやうに首をつることは出来ない。……ここに、この岸に、火は燃え、薔薇はかをつてゐるのを知つてゐるからである。……自分は強い葡萄酒を愛する如くに人生を愛する。去年の落葉の匂ひを愛する如くに人生を愛する。麻布もわが喉を締めず、銃の發射も血を以て煙らすことはない。……ランブよ消え失せよ、十月の日は、われ等の七年の記念祝日が、曙けようとしてゐる」と言つて、いはゆる

危機を乗り越えたものよろこびを歌つてゐる。

具體的な革命の過程の事實のうちに、生きてゐる人間の個々の生活のうちに、革命の眞の意味を、そのよろこびを、その悲痛な苦悶を見出ださうとする傾向は、この指標を新たに掲げてあらはれて來たものと、この指標に従つてその道を立て直して來たものと、その二つをあはせて、いはゆる第三期の無産階級文學を形づくるに至つた、前からあげて來た小説家詩人のほかに、詩人としてはサンニコフ、小説家としてはリヤンニコなども忘れてはならない。小説の方面に多くのすぐれた作家が出て來たこともこの時期の特色である。

## 六

危機を乗り越えた時代の無産階級文學が、主として軍事共產主義時代、市民戦争時代の生活を題材としたと言へるなら、無産階級文學がその題材として取り扱ふべき範囲は、決してそれに限られてはゐなかつたのである。たとへば、市民戦争時代に於ける戦線に立つ労働者などの生活は多少描かれたにしても、その日常生活、工場に於ける乃至家庭に於ける労働者の生活を描いたものは、まだあまり多くは出てゐなかつた。この方面の作品が出はじめたのは、最近二三年の前からのことである。若い労働者ブラトシキンの書いた「新生活」などは、その結構その他藝術上の幾多の缺陷に拘らず、労働者の生活を主題として、その新舊生活の争闘や婦人の解放のための闘ひなどを取り入れてゐる點で、ともかくも一つの先驅者的な地位を與へ

られてよいものだと言はれてゐる。そのほかニキエフ、ロフとかチエトウエルニコフとかのその方面の作品もあるやうだが、就中この種のものとして近年のサキエイト文壇で推賞せられたのは、グラトコフの「セメント」であつた。この作は工場に於ける労働者の生活を主題とした新興無産階級文學の代表的なものの一つとしてあげられる。しかしながら、この方面を主題とした作品は、まだまだ甚だしい。ロシヤ無産階級文學は、將來この方面に於いて生面を開くであらう。労働者の生活と並んで、もしくはそれに次いで無産階級文學が見のがすことの出来ないのは、村落の生活である。無産階級前衛の立ち場から見た現代ロシヤの村落農民の生活である。この方面に於いても、いままでに出たものは甚だしい。小説の方面で望みを囑せられてゐた農民出身のネウエーロフには、幾多の佳作があるが、惜しいことに途中で歿した。ネウエーロフ記念の農民文學者の會といふものも出来てゐて、その中にはヤロライその他の小説家もゐるが、まだこれと言ふ作品は出てゐない。現代のロシヤの農村では、新舊思想の衝突が頗る烈しく、昔からのムジークと新社會の空氣に感染してゐる青年共産黨員の若者との間には、何かにつけて争闘があり、政府の農民懐柔政策の影響などもあつて、極めてややこしい關係を形づくつてゐるものと見られる。農民文學者の間では、勿論無産階級の立ち場から農村生活を観るといふことに一致してゐるにしても、實際は無産階級の思想觀念と相反する感情などがはひつて來やすい。農村の暗黒面と新生活の萌芽と、それ等の葛藤乃至争闘を描く事が、たしかにこれからのロシヤ無産階級文學の一つの仕事であるであらう。そのほか、無産階級革命後の社會に於ける知識階級、新經濟政策實施後にはあらはれて來たいはゆるネップマン（新經濟政策成り金）、僧侶、小市民などの生活も、これを無産階級の立ち場から觀察すれば、たしかに興味ある題材であるに相違ない。更にまた、

革命史上の事蹟を題材としてこれを無産階級の立ち場から敘述した一種の歴史小説に對する要求も提出せられてゐる。これ等の方面ではいづれもまだこれといふほどのものは出てゐない。而して、これ等と相並んで無産階級文學が、自己の階級の必要と興味とに生きるかぎり、いはゆる宣傳的な文學の製作を否定すべきでないといふ主張要求も、サキエート文壇の最左翼の批評家たちによつて持ち出されてゐる。たとへば航空事業のための宣傳が行はれたときに、無産階級詩人の大部分はこれに共鳴して、そのための詩作を發表してその事業を宣傳することにとつとめたのであるが、それ等の詩歌は必ずしも詩としてそれ等の詩人の平生の作よりも劣るものではなかつたと言つて、宣傳と文學との一致が單に革命のために必要であるばかりでなく、十分可能であることを證明したものであるとさへ言はれてゐる。この考へかたに對しては勿論反對の立ち場を取るものも少くなく、左右兩翼の間にさまざまの分派もあつて、論争は今日に至るもなかなか盡きない状態に在る。

無産階級文學に關する論争は、いろいろの方面の問題に互つて行はれて來たのであるが、それ等の中で實際上切實な問題として考へられてゐるのは、形式と内容との關係の問題である。従つてまた文學上前時代の遺産の繼承の問題である。新しい生活内容が新しい形式に盛られなければならないのはもちろんとして、その新しい形式は何から作り出されるかの問題である。何もないところから新しい形式を作り出すことの出来ないのは勿論である。そこには何等かの下地がなくてはならない。材料がなくてはならない。その下地となり材料となるものは、前々からの時代の、違つた階級の詩文人の手によつて作られた作品にほかならない。而してそれを詳しく言へば、それ等の作品の形式は、それぞれの時代のさまざまの條件に従つて、おの

違つたものであるとともに、それぞれ前々の時代からの影響を、多かれ少かれ受け入れてゐるものに相違ない。無産階級文學は、その新しい形式を作るにあつて、これ等の前時代の作品からなるものをも受け取らないといふわけには行かないのである。それ等は多かれ少かれ、無産階級文學にとつて必要であると言はねばならぬ。

およそ一つの階級なり社會的集團なりが、新たに勢力を得ようとして起つて來る場合には、その若い新興の階級なり社會的集團なりの間から生れて來るところの文學は、一般に、普通に言ふやうな意味で形式よりも内容が勝つといふ傾きになることは已むを得ない結果である。このことはロシア文學の過去について見ても分る。十八世紀の前半期から始まつたところの貴族文學は、十九世紀の初めプーシキンに至つて完成の域に達し、プーシキン以後は貴族文學から知識階級の文學への遷り行きを示すと言はれてゐるが、その貴族文學も、その初期に於いてはポーランド文學の形式の模倣に過ぎなかつた。けれどもそれが貴族文學の出立点となつて發達して行つたのは事實である。無産階級文學の場合に於いてもほぼ同じやうなことが考へられる。無産階級文學は、まだやつとその出立点を踏み出したばかりのところである。今日の程度に於ける無産階級文學に、就中その形式の上に、多くの前時代の模倣があり、その東縛影響から脱してゐないであらうことは、寧ろ當り前のことでもあり、已むを得ないことでもある。詩歌の方面で、小説の方面で、無産階級文學が獨得の形式風格を備へて來るのは、これから後のことでなければならぬ。無産階級文學が前時代の文學から受け取るべきものは、前時代の階級なり社會的集團なりがまだ若くて、健康で、登り坂に向はうとするやうな時期に於いて持つてゐた處の形式であるべきであらう。この形式の問題は、第一に文學の種目

の問題にも觸れて来る。たとへばロシア十八世紀の貴族文學の種目が専ら頌歌といふ形の抒情詩や諷刺詩であつたといふ風に、無産階級文學の種目は何であるかといふ問題である。かりに文學上の種目を世間並みに敘事詩類、抒情詩類、戯曲類の三つに分けるとすると、無産階級文學はこれ等の種目とどういふ關係に立つかといふことが問題になつて来る。前から述べて来た事實について見ると、革命の初期即ち軍事共產主義時代は、詩人の主觀的な興奮をのみ主として歌つた時期であつて、その時代の無産階級文學の中心の種目は抒情詩であつた。それに次いで、具體的に生きた人間の生活を表現することを標榜するやうになつてからは、無産階級文學には小説の作品が多くあらはれるやうになつて来た。即ち敘事詩類の方向へと遷つて来たのである。詩の方面で物語を含んでゐる言葉通りの敘事詩、及び小説などは、いはゆる危機以後に出て来たものである。

サキエート・ロシアに於ける批評家のうちマルクス派の立ち場を取るものほかに、ともかくも有力な一つの傾向を代表する一派は、いはゆる形式派である。この派の批評家の説くところのうちに、いはゆる文學種目の崩壊といふ一項目がある。現代文學の種目が崩壊して、今までのやうな一つの中心ある統一を保つことが出来なくなつて来たといふのである。およそもし小説といふ一つの種目が、文藝復興期のブルジョワジの勃興とともに發達したものであつて、最初はばらばらの短篇であつたものが一つに繋ぎあはされ、それが段々一つに統一せられて長篇小説となるに至つた(ヘボッカチオの「十日物語」からセルヴンテスの「ドン・キホーテ」などを経て近代の長篇への發達)と言ひ得るなら、今やブルジョワジの崩壊の氣運とともに、その小説の形式もまたばらばらに崩れようとする兆候を示して來てゐるのではないか。即ち形式派の批評家

の言ふやうに、文學上の種目(その一つである小説)の形が崩れて、結構布置の統一が失はれ、ばらばらのものとならうとする兆候が、かのピリニャクの小説の如きものとなつて現はれてゐると言へるであらう。セルヴンテスの「ドン・キホーテ」はばらばらながら求心的であつたが、ピリニャクの作品は同じくばらばらでも遠心的である。無産階級文學は、その新しい形式や種目をつくり出だすためには、かやうな崩壊期に在るところの前時代の文學から學ぶべきではなくして、たとひ、それは年代的には遠くとも、新しく興らうとした時期に於ける前代の文學の特徴の中から取つて來べきであるといふのが、この問題に對する定説と考へられてゐる。たとへば同じ無産階級文學のうちでも、しかも同一の作者の手に成つた作品でありながら、リベディンスキーの「一週間」と、同じ作者の「明日」とを比べて見ると、前者が作品として一層すぐれてゐるといふ理由は、やはり主として前者の構造が求心的統一的であつて、後者が遠心的、断片的である結果であることへ考へられてゐる。この考へ方からすると、たとへば小説の方面では、無産階級の文學の形式は寧ろ古典的な文學形式の精神を取り入れようとするものだとやつてよいのである。この事實は、詩の方面に於いても見受けられる、頽廢的崩壊の傾向を有する詩人が、たとへばイマジニストの一派の如きが、事物の形象をのみ重んじ、言葉の思想的方面は哲學の仕事であり、音聲的方面は音楽者の仕事であつて、詩人の仕事とすべきはただその形象の方面のみである、詩歌は思想なく音楽なき「形象の目錄」であつてもよい、それでもその詩は藝術的であり得る、いかに思想的に眞實で深くても、音楽にすぐれてゐても、形象に乏しいものは詩であり得ないと主張する如きもその一つである。未來派の一派の詩人が、詩の音楽的方面をのみ重んじて、その思想とか意味とかは全くかへりみず、全く無意味な囁語としか聞えないやうな音の綴りあはせを

以て詩とする如きもその一つである。これ等はいづれも詩を構成するさまざまの要素を統一して一つの中心にあつめる力を失つたものである。而してたしかにブルジョワジーの崩壊期に生ずる遠心力的傾向のあらはれであると思はれる。無産階級文學は、散文の方面でも詩の方面でも、これと全く相反する傾向のものでなくてはならない。無産階級文學は新しい藝術上の統一でなくてはならない。思想も感情も、形象も音楽も、あらゆる藝術上の要素が緊密に統一せられたものでなくてはならない。直ぐ前の崩壊期の文學が、形式的要素の、しかも形象とか音響とかいふやうな一部分だけを特に文學の（上の例で見られるやうに詩歌の）唯一の中心的要素であるかのやうに考へてゐたのに反して、無産階級文學は、事實に於いては前にも言つたやうに、寧ろ形式よりも内容が勝つものであるにしても、その志すところは、原則として、それ等両面の集中的統一にあらねばなるまい。無産階級派の若い詩人たちに古典的なブーシェキンに就いて學ばうとするものも多いのも、この意味から考へて尤もな話である。

附記。以上は千九百二十五年の夏頃までの事實によつたものである。革命後に新しく出たサキエイト・ロシヤの詩人小説家として、日本に傳へられてゐる人々の名前は少くないやうであるが、それ等の人々についてこの講話のうちに少しも言ひおぼなかつたのがあるとするれば、それはそれ等の人々が、正しい意味では無産階級派の文學以外に屬すべきものだからである。無産階級文學については、ロシヤの文壇でも、今日に至るまでいろいろの議論がつかない。それ等の議論にもおのづから發達があるのだが、そのうちの主要な題目については、大正十五年一月の『中央公論』に『無産階級文學評論』といふ標題で書き、それを『無産階級文學の諸問題』といふ標題にあらためて、大正十五年十一月新潮社刊行の、

『文學評論』の中へ収めて置いた。この講話の含む一部分（殊に初めの方）の材料は、その論文の中から採つて來た。同一の事實を同じ程度の詳しさで同一人の筆者が書く場合、それは已むを得ない事である。讀者がこの點を諒として、前記の論文をも参照して下さらば好都合である。

\*この講話の百九十二頁にある「ハム」といふのは、聖書の傳説にあるノアの洪水で知られてゐるノアの、三人の息子のうちの一人の名であるが、ここでは無智な卑しい粗野な人間といふやうな意味で用ひてある。即ちこの詩の中でいふところの「勞働の無数の物凄い群」を指す。

第二編



## トルストイ記念の一夜

アスターボフの驛長の家の一室で、トルストイが八十二年の長い一生を終へてから六年になる。ロシア暦の十一月七日はその當日である。去年の冬はトルストイ教徒の戦争中止運動ともいふべき事件の裁判中であつて、トルストイ教徒のおもな人々の中にも、その事に坐してゐた人があつたためか、大學の學生の間に記念の集りがあつた位で、モスクワのトルストイ協會では何の催しもなかつた。モスクワではテートル・コルシャで「アンナ・カレニナ」を上演し、も一つ他の小さな劇場で「闇の力」か何かを上演した。自分は「アンナ・カレニナ」だけしか見なかつたが、ほんの筋を通すといふだけで、ばらばらな纏まらない印象しかその芝居からは受け取らなかつた。雑誌にはトルストイの肖像が出た。男女の大學生がヤースナヤ・ポリャーナの墓へお参りをした。モスクワではまづそんな事だけであつた。

その頃から春へかけて、このトルストイ博物館へ行つて見ても、觀に来てゐる人はいつも大抵二三人か四五人で、見張をしてゐる爺さんたちはいかにも退屈さうであるし、事務所のお婆さんは顔からして寂しい

感じのする人で、人は好くて親切ではあつたが無愛想であつた。玄關にゐて外套や帽子を預る太つたイワンといふ爺さんだけが、善良なひがら眼を光らして、子供のやうな丸々した手で外套を脱がせたり着せたりしながら、いつも苦のなさうな落ちついた顔をしてゐた。今から思へば、ビリュコフがスキツルへ往つてしまつてから後は、この博物館の管理者もなくなつてゐたわけである。

それが今年の八月二十八日、トルストイの誕生記念日になつて、陳列の記念品も増し、一々詳しい説明書をも添へ、その上トルストイの最後の秘書であつたブルガーコフ君が、日曜日毎に自ら更に詳細な説明をするといふことが新聞に出た。ブルガーコフ君も前記の裁判には最初の宣言書の筆者として列つてゐたのである。この八月二十八日は丁度日曜日であつた。自分は平田領事夫妻や山本鼎君たちと一緒に往つてみた。いつも寂しかつたひろくもない博物館は、一杯の人で、小柄な、どこか若い年寄のやうな感じのする世話好きさうなブルガーコフ君の説明だけは聞えるが、肝腎の陳列品は取巻く群衆に遮られてとても見られないので、一通り勝手に見て歸つて来た。その日は切符やエハガキなどを賣るいつもの寂しい顔のお婆さんはゐなくて、若い愛想のよい婦人がゐた。イワン爺さんも元氣な顔をして、善良なひがら眼をいつもより光らしてゐるやうに思つた。

それから少し経つて桑田博士たちとまた行つた。その時は三十人許りも觀に来てゐた。ブルガーコフ君は直ぐ出て来て、おもなところだけ特に説明してくれた。その中にはトルストイの幼年時代の習字帖、珍らしい寫眞、ヤースナヤ・ポリャーナの家の直ぐ前にある「貧者の樹」、アスターボラの永眠の室をそっくりそのまま模した室、トルストイの臨終の寢床、毛布、枕、家出の折に着てゐた外套、カバン、さういふさまざま

まのものがあつた。その後も二三度日本から来た知り人たちをここへ案内した。いつも觀に来てゐる人は二十人位はあつた。ブルガーコフ君の事務室ではいつもタイプライターをたたく音が聞え、若い人たちがそこで笑つたり話したりしてゐるやうになつた。寂しさうな顔のお婆さんはその後一向姿を見せなくなつて、イワン爺さんはうれしさうに益々善良なひがら眼を光らすやうになつた。

十月初めには、もうトルストイ永眠記念日の催しに就いての詳しい記事が新聞に出た。記念の催しは十一月の五日と七日との二日に分れて、五日のは専ら子供のために、七日のは一般の人々のためにといふ事になり、プログラムもほぼ發表せられた。

## 二

モスクワのトルストイ博物館の第二室——その中央の室の、入つて左り手の陳列函には、壁に沿うて一杯にトルストイの筆蹟が列べてある。彼の有名な讀みにくい原稿や校正刷や手紙の中に、小さなブック・ノート一枚へ極めてぞんざいに書いた彼の筆蹟がある。それが特にエハガキになつてゐる。特にエハガキになつてゐればこそ、どうやら判じ讀みをする氣にもなる位である。その文句には「七月十四日、小兒に就いて人に對するの道を學べ。小兒は未だだけれず、小兒にとりては凡ての人皆同じ。」とある。

トルストイ記念のため、特に子供のために一夜の催しがあるといふことは、今年が初めてで、それはトル

ストイの長女でスホーチン家へ嫁したタチヤーナ・リラヴナの主催である。

十月一杯不思議なほどからりとした秋ばれの天気が續いて、いつもはじめ雨がちだといふこの月も、日本の秋のやうに爽かで暖かかったが、十一月に入ると一日の晩から急に寒くなつて、二日から町は白くなり、愈々本當の冬が来た。自分もこの日から綿入れの外套を取り出して着た。戸外を歩いて、冴えた冷たい空気を吸ふ楽しみを感じる季節がやつて来た。楽しい懐かしい親しみのあるモスクワの冬がやつて来た。静かな静かな清らかな美しいモスクワの冬がやつて来た。

十一月の五日の夜も、この静かな清らかな冬の夜であつた。切符には七時からとあり、ブルガークフ君のくれた辻ビラには「正八時」とある。こんな事はさう珍らしくないので、八時少し前にルビヤンスキー・プロイェーゾドの工藝博物館へ行くと、戸の内は一杯の群集である。そこらに立つてゐる人たちは、入つて来る人をたれかれなしにつかまへては、餘分の切符をお持ちではありませんかと訊ねてゐる。

自分も二三度つかまへられて、やつと群集の間を抜けて上る。この會場ではよく講演などがあるが、こんな盛んなことは初めて見た。プログラムを買つて自分の席に着く。自分の兩側には海老茶色の制服を着た女學校の生徒が十人ばかり坐つて盛んにおしやべりをしてゐる。今日はさすがに子供が多い。場内はもう一杯で何となく明るく陽氣である。八時半になつてやつと電鈴が鳴る。最初はトルストイの友人のゴルブノフ・ボサードフが「偉大なる勤勞の一日」といふ題で、トルストイのヤースナヤ・ポリヤーナに於ける平生の生活を話した。彼の一日の生活が、肉體上にも精神上にも如何に逞しい勤勞の生活であつたか、如何に彼が家庭の人々のために、ヤースナヤ・ポリヤーナの農民のために、また廣く世界の人々のために心を勞すると

ころが多かつたかといふことを簡単に分りやすく話した。このトルストイの親しい友人であつた白髪の老人が、質素な風采で感情をこめて話したところは、世間に知れ渡つてゐることではあるが、しかし何となく心を惹いた。「レフ・ニコラーエキッチは、自分たちの力で理想の光をこの世に持ち来たすことが出来ないでも、後に来る光明ある世界は、彼の愛する子供たちの力で造られるといふことを堅く信じて居りました。」と言つた時には、あのお爺さんの顔が感情に燃えるやうに見えた。「レフ・ニコラーエキッチは殊に子供を愛しました。彼の愛孫ターニャのために書いた祈禱をここで皆さんに読んでお聞かせしましょう。これは即ちターニャのために彼の書いたものであつて、また凡ての子供たち即ち皆さんのために書いたものでありますから。」かう言つてその話を、この祈禱の文句で結んだ。

「神様、あなたが皆の人が互に愛するやうにと思つておいでになることは知つてゐます。そして私も皆を愛したいと思ひます。誰にも腹を立てないで、誰とも喧嘩をしないで、自分のことよりも餘計に人のことを考へ、自分に欲しいものを人に上げるやうにしたいと思ひます。善い人間でありたいと思ひます。さうしたいと思つては忘れ忘れて、腹を立てたり、喧嘩をしたりします。自分のことは思ひますけれど、人のことは忘れ忘れます。神さま、あなたのおすきなことがよく分つて、いつもいつも誰とも善くして、自分の好きなよい人とだけでなく、皆と、この世の中の皆の人たちと、どんな人とも善くして行けますやうに、どうか私をお助け下さいまし。」

子供たちも、大人も熱心に拍手した。お爺さんは三度も呼び出されて、深く感動した様子で幾度も胸に手を當てては無邪氣な聴衆の拍手を謝した。トルストイの一族の人は大分来てゐたやうであつた。その中には

トルストイの愛してゐた孫娘のターニャも来てゐると見えて、自分のそばの女學生たちは、どれがターニャでせうと言つて見まはしてゐた。

三

次ぎにはトルストイの童話「大きな雌熊」の朗讀があつた。それは病んでゐる母に孝行な少女の物語りである。その次ぎには三人のヤースナヤ・ポリャーナの百姓女が、わざわざこの晩のために上京して、自分の村の民謡を歌つた。この晩の主催者であるタチヤーナ・リフヅナは、純粹のロシア農婦の盛装をした三人の百姓女と一緒に壇上に立つて、彼等を紹介し、歌の意味を手短かに説明した。そして、亡父が如何に民衆藝術を尊んだか、如何にこれ等の農民の歌を聴く事を好んだかといふことをも付け加へた。このトルストイの愛女ターニャも、もう五十に届く年で、大分白髪も目に立つ。トルストイの若い頃の、あの逞しい、どこか嚴ついやうな顔つきが、このスホーチナ夫人の面影にありありと見られる。がつしりした、背の高い、元氣な婦人で、百姓女の歌ふ單調な急がしい歌に合せて、自分も一緒に歌ひ、歌の中の花嫁が花嫁に挨拶するところなどでは、花嫁のつもりでお辭儀をしたりして、歌ひ手の調手を助けた。さういふ氣の軽い氣取らない調子が、この場合殊に自然な安易な感じを與へた。歌ひ手の相手をする役が足りなくなつたので、更に夫人はその直ぐ前の席にゐた近親の婦人を呼び出して一緒に歌ひながら調子を助けたりした。

歌のいくさり毎に聴衆は盛んに拍手した。百姓女たちは、少しきまりの悪さうな風で、初めはその拍手に對して挨拶をすることさへ知らなかつたが、タチヤーナ・リフヅナに教へられて、夫人と一緒に今度はまた何度も何度もお辭儀をした。それがまた愛嬌になつて聴衆は更に拍手した。三つ四つ歌ふうちに百姓女たちもすつかり場なれて、上機嫌で歌ひながら踊り出した。その踊りは極めて單調で素朴で、丁度自分の子供の時分にあつたタタキ人形（小さな土人形の力士の腰から下が、硬い椶櫚の毛か何かで廻しになつてゐて、それを板の間に置いて板を叩くとその力士がトントンと動く、）そのタタキ人形の動きぶりを思ひ出させるやうな踊りぶりである。この歌と踊りとで、千人近くの聴衆の心持が、何となく安易に、打ちとけた親しみのあるものになつたやうに思はれた。大きな家族の一夕の無邪氣な集まり、何となく自分にはさういふ感じがした。場内の空氣が自分にさう感ぜしめた。

十分のアントラクトの後で、前に童話を朗讀した婦人が、タチヤーナ・リフヅナの書いた「ヤースナヤ・ポリャーナに於けるターニャ・トルスタヤの幼き頃」といふ未刊の思ひ出の一節を朗讀した。家庭では父の感化が母の感化よりも遙かに大きかつたこと、父は滅多に自分の室から出ては來なかつたが、それでも父の言ふことは皆よく守つたこと、父の考へから自分たちの服装なども極めて質素であつたこと、しかし、あるクリスマスに一枚の新しい衣裳が出來てから、母やイギリス人の家庭教師の考へでだんだん餘所行き衣裳の殖えて行つたこと、父はいつもブルーズを着てゐて、モスクワへ行くときだけ「ヨーロッパ風の着物」を着たこと、父が自分の室で勉強をしてゐる間は誰も他の者を入れなかつたこと、しかし自分だけは特別に來てもよいといふ父の許しがあつたけれど、自分は父のしてゐる事が大事なことであると思つてゐたので、邪

魔することを恐れて行かなかつたこと、しかし夕方になつて皆の休息する頃には、父は人並以上に快活になつて、よく自分たちの遊び相手になり、自分たちの心性の深まり強まるやうにいろいろの工夫をして遊んでくれたこと、クリスマススの時に父がカザック兵の假装をして踊つたこと、父はまたお伽噺を話すことが上手で、顔つきや手真似や聲いろでいろいろおもしろい話を聞かしてくれたこと、殊に自分たちの幼かつた頃にも、また自分の子等（即ちトルストイの孫たち）にも、父がよく話してきかされたのは「胡瓜の話」であつて、自分たちはこれを何度聞いたか分らぬ位で、しまひにはすつかり覚えてしまつたこと、父と母との愛情の深く濃やかなことが子供心にもうれしくて、「自分の寢床で嬉し泣きに泣いたことのあることなど。——「胡瓜の話」といふのは極めて簡単な物語で、あるとき男の兒が村の路を歩いてゐたら胡瓜が落ちてゐた。それを拾うてカブリと喰べて、少し行くと、また一つ落ちてゐた。今度もまたカブリと喰べて、少し行くと、また一つ落ちてゐた。——その胡瓜がだんだん大きくなつて行く、それを七つまでカブリと喰べてしまつたといふ話である。

この朗讀の後では、前の方の座席に坐つてゐたタチヤーナ・リヲヅナも「作者！作者！」といふ聴衆の催促にせまられて、ニコニコして壇上に出てお辭儀をした。

#### 四

トルストイの肖像、邸宅、ヤースナヤ・ポリャーナの村の景色、その他いろいろの幻燈の説明はブルガーコフ君がした。最初に出た青年時代から晩年までの肖像を集めたものの上の方には「トルストイ伯、レフ・トルストイ、レフ・ニコラーエキッチ」と三通りに名前が書いてある。最初はただの伯爵時代、次ぎは文學者時代、次ぎは萬人の教師となつた時代、この三つの時代によつて呼び方も變つたのであるとブルガーコフ君は説明した。トルストイの平生は嚴つい顔であつたが、微笑したときの顔は眞に人を懐かさせるものがあつたと言つて、微笑してゐる寫眞をも見せた。邸内にある二つの池のうち、「下の池」といふのは、トルストイの母の愛した池で、その岸からは向うにヤースナヤ・ポリャーナの往還が見え、彼の母はよくそこへ來て休息した。その「下の池」も出た。また冬は凍つた池で氷滑りをする、ここに居られるタチヤーナ・リヲヅナも實は中々お好きな方ですと言つて、笑ひながらブルガーコフ君は説明した。邸の直ぐ前の楡の大木は所謂「貧者の樹」で、トルストイにいろいろの助けを求めて來る「貧しきもの」たちと、その木蔭のベンチでトルストイは會つた。私もここで初めてレフ・ニコラーエキッチに逢ひましたとブルガーコフ君は言つた。トルストイの愛女ターニャ（即ちこの日の會の主催者）の娘さんのターニャとトルストイが向ひあつて寫した寫眞（そのターニャのためにトルストイは前の祈禱を書いたのである）、トルストイの夏水浴をしたワロンカの小川、浴場の板圍ひ、メチニコフと並んで寫した寫眞、農民の間に説教するトルストイ、瘋癲病院を見舞うたトルストイ、ヤースナヤ・ポリャーナのある祭の日、百姓たちの市場で、親を見失つた小さな女の子をいたはつてゐるトルストイ（その寫眞がこの日のプログラム表紙に刷り出してあつた）、モスクワのステイションに着いたトルストイ、その寫眞ではステイションは一杯の群集で、柱に登つたり何かし

て、皆トルストイを見てゐる。「トルストイを見るだけでも満足した人々」とブルガークーフ君は言つた。トルストイの人氣はこの通りでありましたとも言つた。

ブルガークーフ君は雀のやうな可愛らしい眼を光らして、少し早口に、子供たちにお話をするやうな調子で説明して行つた。ブルガークーフ君も子供たちの拍手で二三度呼び出された。

更に十分のアントラクトの後、第三部では活動寫眞があつた。ヤースナヤ・ボリャーナの農民生活の有様、トルストイ夫妻のステイションへ行く途中、ステイションでの様子などが、極めて断片的に寫された。夏のこと、トルストイは白いブルーズを着て、例の如く寫眞や繪で自分たちの見なれてゐる通り、左の手を革帯の下へ挟み、右手には杖を持つて、無造作に人々と話しながらステイションの構内を歩いて行く。握手をする。——ただそれだけの動作が見えるだけである。しかし、この活動寫眞を見て、自分は何となく心持ちを掻き亂されるやうな氣がした。現に寫眞ではあるにしても、生きて動いてゐるトルストイを眼の前に見るといふ心持ちと、その一方ではこの活動寫眞にとるとかたらぬとかいふことが、世間でトルストイ夫人を非難する理由の一つにもなつてゐることなどを思ひ出して、妙な落ちつかない氣持ちになつた。——現にこの間トルストイ夫人に宛てた徳富健次郎氏の手紙を譯してくれと言つて持つて來たある大學生の如きも、あの手紙の中で夫人に對する非難（その中にも活動寫眞のことはあつた）に就いて随分よく調子を合せてゐたではないか。最近の「神學新報」でブルジュスキ氏の書いた文章も、要するに夫人非難の聲と見るべきではないか。さう言へばこの秋の初めに山本鼎君や黒田君たちがヤースナヤ・ボリャーナへ行つた時に、夫人は初見の黒田君に、晩年のトルストイとの交情に就いて泣いて話されたといふことである。そしてトルス

トイの信じてゐた友人テュルトコフ氏をひどく悪く言はれたさうである。どうか日本の人たちに、私の明しを立ててほしいといふやうな意味をも話されたさうである。——しかし、今日讀まれたターニャの思ひ出には、両親の愛情の濃やかさにうれし泣きに泣いたとあつた。さういふ時代もあつた。そして時は過ぎて行つた。ブルガークーフ君の言つたやうに、トルストイは伯トルストイからレフ・ニコラエキッチになつた。しかし夫人はもとのままの伯爵夫人なのであらうか。この活動寫眞の説明の折にも、ブルガークーフ君は、ソフィヤ・アンドリュヅナと言つて、また直ぐ伯爵夫人といふ言葉を添へて言ひ直した。何だかそんなことまで耳に残る。しかし、それはそれとして、春にでもなつたら、自分もヤースナヤ・ボリャーナへ行つてみよう。夫人にもお目にかかり、醫者のマコキツキー氏にもいろいろの話を聞かう。

## 五

そんなことを思ふうちに活動寫眞はすんで、また百姓女の唄が始まつた。もう大分時間も遅くなつたので、プログラムの唄は大分省かれた。聴衆は盛んに拍手した、百姓女たちはもうすつかり上機嫌になつてしまつて、大浮かれで歌つたり踊つたりした。唄のあとで、聴衆の拍手に合わせて彼等も自分で盛に拍手した。それを見て聴衆は更に面白がつて拍手した。これがプログラムの最後なので、聴衆は座席を離れて壇の前へ下りて行つた。百姓女たちはまた出て來て、そこに立つてゐる人々と握手した。さらさらした大きな暖かい手と

自分も握手した。そろそろと出て行く人ごみの中で、白い水兵服を着た十許りのトルストイの愛孫ターニ、  
が、誰かに引き合はされて、圓く肥えた赤い頬に微笑を浮べて、娘らしいつつしまやかなお辭儀を——右の  
足を軽くうしろへ引いて——してゐた。

五日の夜の子供のための一夜は、子供のためにばかりでなく、大人のためにもおもしろい一夜であつた。  
トルストイを記念するために、自分たちのために特にかういふ一夜の催しをして貰ふことの出来るこの國の  
子供たちは仕合せであると思つた。そして、これがトルストイであるが故に、子供のための一夜とい  
ふものが尙生きて来る。トゥルゲーニエフでも、ドストイェーフスキーでもいけない。トルストイであつて  
初めて子供の爲めの一夜が自然なふさはしいものになる。

七日はトルストイ永眠の當日で、この日は一般公衆のために、モスクワのトルストイ協會とオストロフス  
キー記念の文學演劇音楽協會との主催で、それにロシヤ文學愛好者協會も贊助して講演と朗讀と音楽との一  
夜が催された。開會の辭として、ペトログラードのトルストイ博物館協會の會長で、トルストイの友人であ  
つたスタホーキッチ氏が、短い、しかし熱烈な演説をした。その中で、今度ブルガークコフ君によつて編纂せ  
られたヤースナヤ・ポリャーナに於けるトルストイの文庫の詳細な目録が、トルストイ研究の上に重大な價  
値を有することを説いた。それにはトルストイの讀書の内容、其の年代の詳細な記述があり、随つてそれが  
どういふ影響をトルストイに與へたかといふことを知る上に最も重要なものであるといふことであつた。こ  
の書物はやがて出版されるであらう。スタホーキッチ氏は、その演説の終りに、この大戦は人道の爲めに大  
なる幸福を持ち來たすものであることを確信する。トルストイの世界主義、平和主義の實現は、必ずこの大

戦の後に近づくであらう。トルストイは夙にキリゲリム二世に對して否定的の意見を持つてゐた。キリゲリ  
ムの野心の失敗は、即ちトルストイの理想の實現であると言つた。内容よりもその強い力のある調子が聴衆  
を動かした。その次ぎには「ヤースナヤ・ポリャーナに於けるターニヤ・トルスタヤの幼き頃」の朗讀があ  
つた。これは五日の晩のと同じで、今夜は半分だけであつた。それから藝術座の女優グゾーフスカヤがトル  
ストイの「幼年時代及び少年時代」の一節、「幸福なる幸福なる、再び歸らざる幼年の時！」といふ、甘い、  
懐かしい母のおもひでの條を朗讀した。第二部はロシヤ文學愛好者協會の會長グルジンスキー氏の「トルス  
トイと六十年代」といふ簡単な講演で始まつた。例の如くこの人の講演は情味もなく批評の力も弱く、乾燥  
な考證的のものであつて、トルストイの教育事業に就いて一通りの事實を述べたに過ぎなかつた。グルジ  
ンスキー氏はやはり文學研究上の資料を編纂する方の人である。その後では帝室劇場の俳優たちのトルスト  
イの脚本「光りは闇にも耀く」の第三幕、同じく脚本「文明の結果」の一節、短篇「教父セールギイ」の一  
節などの朗讀があり、最後にゴリデンエイゼル氏がトルストイの愛したショパンのソナータを演奏し、更に  
哀みの曲を奏して、この記念の一夜は終つた。聴衆はこの最後の曲の演奏中起立して敬意を表した。  
この日も會場は一杯で、切符がなくて還つた人たちは五日の晩よりも多かつたやうであつた。しかしトル  
ストイを記念する會としては、五日の晩の方が遙かに内容もあり興味も多かつた。自分は來年もまたこの子  
供のための一夜を催して貰ひたいと思つてゐる。

附記、六日は月曜日で、トルストイ博物館は、例によれば閉ぢる日であるが、特に開いた。七日の夜は  
テアートル・コルシヤで「闇の力」を上演した。

## トルストイ傳

「レフ・ニコラエキッチ・トルストイはロシア名門の出である。父系はトルストイ伯爵家で、可也の舊家であり、母系はそれよりも更に舊い侯爵ブルコンスキー家であつた。トルストイがその大作「戦争と平和」の中で描いてゐるローストフ伯爵家の人々は、即ちトルストイ伯爵家であり、ブルコンスキー侯爵家の人々は、即ちブルコンスキー侯爵家の人々であるといふ。彼は千八百二十八年八月二十八日（ロシア舊曆による。普通の曆によれば九月十日）中央ロシアのトゥーラ縣ヤースナヤ・ポリャーナの莊園地の邸内に生れ、早くして既にその両親を亡つた。彼は生みの母を殆ど記憶してゐない。母は彼の妹、マリーヤ・ニコラエヴナ（シャマルディンスキー修道院に尼僧生活をしてゐる人）を生んで、その産のために死んだ。トルストイがやつと一歳半に達した頃（千八百三十年）のことである。しかし、近親の人々の物語によつて、彼は自分の生みの母を面影に描き、なつかしい深い愛慕の情を寄せてゐた。彼はその面影の母を神聖な女性の如くにさへ思ひあがめ、何ごとか苦しいことのあるときには、その面影の母に祈りをこめたといへはれる。トルスト

イが面影に描いた母の姿は、何ほどか「戦争と平和」に於けるブルコンスキー家のマリーヤに現はれてゐるともいふ。父のことは、賢い、上品な、善良な、また公正な人としてよく覚えてゐた。しかしその父も、トルストイがやつと九歳になつた頃（千八百三十七年）に歿したので、その記憶は勿論本人の幼年の頃のものに止まる。ロシアの貴族の家庭では殊に、幼年の頃の教育は婦人たちの手によつて行はれるので、トルストイが父から受けた影響といふものは僅かであつたらうと思はれる。

それでは、この若い、激しい性情を有つてゐるみなし兒のトルストイを愛撫したのは誰であつたか。彼の一生を貫いて充ち溢れてゐた愛と眞と信仰との強い根を植ゑつけたのは誰であつたか。それこそは、トルストイの「叔母」まことは遠縁の人に過ぎないタチヤーナ・アリクサンドロヴナ・イェルゴリスカヤであつた。母の死後から、また勿論父の死後にも、トルストイはこの人の手に残されて、養育せられ、而して殆どその一生の大部分をこの「叔母」とともに暮して来たのである。この「叔母」の存命中トルストイがその側を離れてゐたのは、叔母のユシユコワの住むカザンで大學生生活を送つた四五年の間と、四五年の軍務時代と、その他の僅少な時期とに過ぎなかつた。トルストイ自からその思ひ出を記して、「タチヤーナ・アリクサンドロヴナの影響は、まだ幼少の時分に、愛の精神的のよろこびを私に教へたところに在る。かの女は、それを私に言葉では教へないで、かの女自身の身を以て、私を愛に感染せしめた。愛するといふ事がどんなに善いことであるかといふことを、私は親もし感じました。そして愛の幸福を會得した。この事が第一である。第二には、あわてない、静かな、ひとりの生活のたのしさを、かの女は私に教へた。」と言つてゐる。トルストイが、その長い八十餘年の一生を通じて、眞のため善のために戦つて来た、その根本の



力を與へたものは——彼の若い鋭敏な魂を哺み育てた精神力の泉は、まことにそこに在つたのであらう。

トルストイの幼時の家庭には、両親や叔母たちの他に、三人の兄と、一人の妹とがゐた。兄たちはそれぞれ特色を有つてゐたが、中でもトルストイが殊に愛慕してゐたのは長兄ニコライであつた。ニコライは哲學者でもあり藝術家でもあり、ユーモアに富んだ、非常に善良なやさしい氣立ての人で、皆から愛せられてゐた。トールゲーニエフもまたニコライを非常に好いてゐたが、そのニコライに就いて、彼が有名な文學者にならなかつたのは、ただ彼がそのために必要な弱點を有つてゐなかつたためである、即ち多少の名譽心と、外形を氣にして整へる執着とがなかつたためである。それにニコライは自分自身に少しも價値を認めてゐなかつた、と言つた。トルストイが殊によくこの長兄に就いて覺えてゐたのは、この兄が教へた一つの遊戯であつた。それはこの兄弟たちの間では「ムラエイ（ロシア語で蟻の意）の兄弟」と呼ばれてゐた遊戯である。もとはニコライが何かで讀むか聽くかして知つた、迫害を受けた十五世紀のキリスト教徒の一派である「モラギヤの兄弟」を間違つてかういふやうになつたのであらう。それは、皆で椅子の下に坐つて、その周りを箱などで取り囲み、風呂敷のやうな布を上から掛けて、その暗いところに押しあつて坐つてゐるといふ遊戯であつた。また、ニコライは、凡ての人々が何等の不幸も知らず、決して争ふことなく怒ることなく、常にかはりなく幸福であるためには、どうしたらよいかといふことの秘密を弟たちに明かしてやらうと約束した。ニコライの言ふことによると、その秘密は、緑の杖に記されて、森の中の崖の際に埋められてあるといふことであつた。「風呂敷をかけた二つの椅子の間でのみならず、世界のすべての人間が天空の下で愛を以て倚りつどふといふムラエイ（蟻）の兄弟の理想は、今も尙私にはそのままに残つてゐる。そしてその時の私が、

人間の一切の惡を滅ぼして大いなる幸福を與ふべき秘密の記されてある緑の杖の存在を信じてゐたやうに、今も尙、かくの如き眞理があつて、それは萬人に開かれ、眞理の約束するところのものを萬人に與へるであらうといふことを、私は信じてゐる」とトルストイは記してゐる。

ニコライは肺病のため三十七歳でフランスの南の土地で歿した。この長兄の臨終にゐ合はせたトルストイに、その死が與へた刺激の甚大であつたことは言ふまでもない。

次兄はセルゲイで、この人は随分青年時代の放縱な生活にも耽り、そのために、随分苦しみもしたのであるが、心は善い人であつた。この人は今から十數年前に歿した。第三の兄はドミートリーで、この人は宗教心の厚い點で、また貴族社會の華美な放縱な生活を全く厭うた點で、殊に二兄と違つてゐた。後ある人の誘惑で、今までの禁慾的な清淨な生活とは打つて變つて非常な放縱な生活に陥つたが、ある賣笑婦との最初の眞面目な關係から再び目ざめて、遂にその女を妻として、間もなく歿した。トルストイが二十八歳の頃のことである。この兄の面影は、「アンナ・カレーニナ」の中で、レーキンの兄弟ニコライの性格に描かれてゐるといふ。

トルストイの妹マリーヤは、その若い頃は音樂の才に秀でて、愛嬌のある、詩的な性情に富んだ娘であつたといふ。トールゲーニエフは、その多くの手紙の中で、屢々このマリーヤ・ニコラエヴナのことを記し、非常に親愛な友情を懷いてゐたやうである。彼の女は一族のうちの伯爵トルストイ某氏に嫁したが、家庭生活の不幸から、子供たちをそれぞれ片づけてのち、自分は修道院にかくれ、シヤマルディンスキー尼僧院の尼となつた。

でセン・ジエロームといふ名前を描いてある。勿論これ等の作は、そのままトルストイの自傳とは見られな  
いが、これ等二三實在の人物から材料を得たところもあつたわけである。

トルストイがカザンの大學へ入學したのは、千八百四十四年、彼が十六歳の頃で、そこで彼はあまり勉強  
はしなかつた。彼の激しい、一徹な性質では、官立大學の嚴重な規程に適合することが困難であつた。彼に  
は、課程通り少しづつ規則正しく學ぶことが非常に苦しかつた。何か自分の興味を惹く題目があると、彼は  
萬事を抛擲してその一事に全力を集注した。讀んだり、論文を書いたり、教授に質したりした。そして自餘  
の課目は捨てて省みなかつた。そのため度々不合格點を與へられた。彼にはこの束縛が非常な苦痛であつた。  
結局大學を卒へずして退くやうな事になつた。その最初の年は、彼は東方語學科の講義を聞き、それから  
法科に轉じ、遂に兄たちが大學を卒へてカザンを去るに及んで、彼も亦大學を退いて、ヤースナヤ・ポリヤ  
ーナへ還つた。それは勿論何等かの手段によつて、自家の農奴たちを救済しようといふ考へを懐いてであつ  
た。それは千八百四十七年であつた。しかしながら、農奴を農奴たる位地に止めて置いて救済し助力するこ  
とは、勿論不可能事であつた。トルストイはやがて自分の立ち場に虚偽のあることを感じて、最初の計畫を  
止めた。その當時、農奴の解放に就いて考へるやうな人はまだ少かつたのである。

この間の消息を描いたものが「地主の朝」である。農奴救済の失敗から、彼は再び勉學を思ひ立ち、カン  
ディダート（候補者の意、國家試験を通過したものに許與せられる稱號）の試験を受けるために、ベティエ  
ルブルグへ出て、熱心勉強の結果、二科目までは試験を通過したが、やがてその方の興味もさめて來た。  
彼は一時軍隊の方へ行かうとも考へたが、それも間もなく氣が變つて、旅行をする決心をした。しかしこの

ドイツのある批評家が、トルストイはその兄たちの凡ての特性を一身に有してゐたと言つたのは當つてゐ  
るやうに思はれる。即ち長兄ニコライの文學的才能と哲學的傾向と、仲兄セルゲイの激情と善良と、叔兄ド  
ミートリーの宗教心と道義心と、それに妹マリーヤの音楽を愛する傾きをも加へれば加へられよう。とにか  
くトルストイの普通でない風變りな性行は、早く少年の時代から現はれてゐた。彼はあるときは空を飛ばう  
とした。二階から飛び降りた。また自分の容貌の醜いのを非常に悲觀した。さうかと思ふと理想に描く幸福  
の世界の冥想に耽つて我れを忘れた。

父の死後、トルストイ家の兒童の教育は、一時父の妹アリエクサインドラ・イリーニチュナ・オステン・  
サーケン伯爵夫人が引き受けた。しかし夫人はそれから四年して（千八百四十一年）歿したので、兒等の後  
見役は今一人の叔母ベラゲーヤ・イリーニチュナ・ユシニコワ夫人に移つた。この叔母は子供等をすべて  
その良人の住地カザンへ伴ひ、そこで四人の兄弟等はだんだんにカザン大學へ入學した。大學に入學するま  
ではすべて叔母の家で、フランス人やドイツ人の家庭教師たちから教へられた。その中の一人のドイツ人、  
フョードル・イワーノキッチ・レツセルは、トルストイの「幼年の頃」の中でカルル・イワーノキッチ・マ  
ウエルといふ名前を描いてあり、今一人のフランス人、プロスベール・セン・トーマは、「少年の頃」の中

當時のトルストイは、しきりにカルタの勝負に耽つてゐたので、巨額の負けから一切の計畫を中止し、徒勞と徒費との悔と恥とを懐いて、再びヤースナヤ・ポリャーナへ歸つて來た。この千八百四十年代の終りこそは、トルストイにとつて危険な恐るべき時期であつた。彼は放蕩自恣の生活と悔恨自責の生活とに自からを傷け害うて、幾度か自殺の決心をさへした。この自棄の苦しみの境涯から何とかして免れようためにはかりに、彼は丁度、妹の良人のシベリヤへ出發するところを追ひかけて、何一つ物を持たないで、帽子さへも被らないうで、その馬車へ跳び乗り、全く遠く行つてしまはうとしたことさへあつた。しかし勿論強ひて立ち戻らされた。

丁度その頃、カフカズの地方で砲兵士官の勤務に就いてゐた長兄ニコライが、休暇を得てヤースナヤ・ポリャーナへ歸つて來た。兄の休暇の終るとともに、トルストイは兄とともにカフカズ地方へ向つて立つた。それは千八百五十一年の春四月であつた。何ごとも世間並みにすることを好まないニコライは、眞直に馬車の便をかりて南の方へ行かうとはしないで、先づツルガを下つてカザンに往き、そこで大きな帆船を買ひ求めて、それに馬車をも載せ、ツルガを下つてその河下の港アーストラハンまで往つた。そこから再び馬車でスタログラードフスカヤの屯營地即ちニコライの任地へ赴いた。勿論その頃はまだ汽車の便はなかつたのである。トルストイは最初そこで、長兄のもとで、一個の客として暮してゐたが、やがてチェチュエーニヤ人たち（『カザック兵』解題参照）を襲ふ際に、義勇兵としてその一隊に加はつた。そのうち遂に勤められて、軍隊に入ることに決し、試験を受けて下士官となり、火箭砲兵隊に屬することになつた。

カフカズに於ける生活は、彼にとつて、青春と、詩と、自然の美と、そして純朴な生活との樂しき思ひ出

カザック

を残した。殊に、ここは彼にとつて藝術の誕生の最初の地であつた。處女作『幼年の頃』はここで書かれた。そして當時名聲をしいてゐた詩人ニエクラソフの主筆する雑誌『現代人』によつて、千八百五十二年の九月、初めて世に問はれた。ここで彼は、初めて自己の天分の何處にあるかを自から知ることが出來た。彼は千八百五十二年の春の日記に、『自分の中に何かがある、それが自分をして、自分は凡ての人間のやうな人間であるために生れてゐるのではないことを信ぜしめる』と書いてゐる。しかしながら、このカフカズの生活は、彼にとつてまた可なり危険なものでもあつた。山地に住む蠻族との戦ひのために、或るときは捕虜にならうとした事さへあつた。『カフカズの捕虜』などは、この間の經驗に成れるものである。また『侵入』『伐林』、『分隊での邂逅』、更に彼の作品中すぐれたもの一つである『カザック兵』などは、すべてこのカフカズ生活の生んだ作である。

『カザック兵』に於けるオリエーニンが、その頃の作者自身の面影を少からず有することは、別に解題にも述べて置いた。トルストイはこの作に於いても見られる如く、カフカズの自然の中に生活して、人工的な文明人の生活をつくづく厭はしく感ずるにつけ、またいかに自然な土着の人々の間に交らうとしても、やはり土地の人々とは、生ひ立ちから習慣からすべてを異にする文明人の、到底容れられないのを感じ、單調な淺薄な軍隊生活が日に日に厭はしく、せめて休暇を得てなりとも、暫くでもヤースナヤ・ポリャーナへ歸りたいと思ひ始めた。そこへ千八百五十三年の十月に入つて、トルコとロシアとの戦争が初まつた。トルストイはドゥナイの戦線へ出征を志願して、カフカズ出立以前士官の試験に合格して士官となり、先づヤースナヤ・ポリャーナへかへり、一週間をそこに過して、新任地ドゥナイの軍に赴いた。それは千八百五十

四年の三月のことであつた。やがてド・ナイ軍の退却となり、セヴストーボリの包圍となり、彼はそこへ移されることとなつて、その年の十一月上旬セヴストーボリへ到着した。彼は豫備隊に加はつてゐたので、初めは退屈であつたが、間もなく最も危険な第四壘に移され、八日目毎に四日間の任務に就いた。この危険に身をさらして、彼の内心の生活は著しく成長し、著しく澄み来たりつつあつたと見える。彼は、自からその實現のために一生を捧げ得ると感ぜられる、偉大な思想に到達したことを日記に記し、その思想は、新宗教の基礎となるものであり、その宗教は、キリストの宗教ではあるが、人類の發達に隨伴するところのものであつて、一切の祕密や迷信的要素を擯無した、實際的の宗教であり、徒らに未來の幸福を約束することをせずして、現在の地上に幸福を興へる宗教であると言つてゐる。また、この思想の實現は、この目的のために目覚して力めるところの幾代かの人々のみがこれをよくする。一代の人々は實現し得ずとも、世代相承けていつかは狂熱か理性かがこれを實現する。宗教によつて人々を結合せしめるために、自覺的に力めること、これが自分を牽きつける思想の基礎であるとの意をも述べてゐる。この日記以後二十五年にして、彼は「懺悔」を書いた。「懺悔」に含まれる思想の萌芽は、早く既にセヴストーボリの砲壘の間に芽ぐんでゐたのである。

戦争の悲哀、残忍、慘害、これ等はすべて鮮明な繪畫となつて、トルストイの「セヴストーボリ」の物語に描かれてゐる。すべて千八百五十五年から六年へかけて「現代人」誌上に出た。

## 三

セヴストーボリの陥落とともに、トルストイは急使として報告の任務を帯び、ベティエブルグへ上つた。それは千八百五十五年の九月であつた。トルストイにとつて、この上京は、更に生涯の新時期を劃するものであつた。彼はそこで多くの當代の有名な文學者、就中「現代人」を中心とする文學者たちと初めて親しく交はるにいたつた。彼はその一派の人々から同人として受け取られた。しかも、作品こそは依然として「現代人」に掲げたが、彼には到底その一派の同人として相融和する事が出来なかつた。彼は何處となく仲間離れのした別の人であり、また極めて無遠慮に自説を固持し主張した。そして自然にその群から離れるやうになつた。彼の真正直な眞率な性質は、當時のベティエブルグの文學者たちの虚偽に堪へ得なかつたのである。彼はその「懺悔」の中で、當時の文學者たちが、自惚ればかり強くて品性の下劣な人間だといふことを容赦なく書いてゐる。

トルストイはベティエブルグの文學社會にも甚だしく不満を懷いて、千八百五十六年十一月軍務を退き、その翌年の二月はじめて外國への旅に上つた。もとよりその旅行には、これといふ確な目的があつたわけではなく、とにかく當時の自己の生活からすべて離れ去るためであつたものと見られる。彼がV、V、A、女と後に不成立に終つたところの婚約を結んだのは、その出立の前年の夏であつた。彼は先づパリに赴き、

そこではからずも死刑を目撃した。この経験が彼に強い刺激を與へたことは言ふまでもない。彼は後日その「懺悔」の中で、胴體と首とが別々に箱の中へ落ちる音を聞いたときには、現在の進歩を合理的なりとするいかなる理論も、到底この事を是認することは出来ないといふことを、理性によつてではなく、總身で會得したと言つてゐる。

彼は文明の中心地に來たつて、今までに見ざりし知らざりし暴力の行使と、罪惡とが、文明と進歩との名によつて行はれつつあるのを見て、文明といひ進歩と稱するものに對する幻影の消滅するを感じた。パリからスキツルに移つて、その夏七月リュツェルンを訪ひ、その旅館シュウエイツェルホーフに宿泊した。客の多くはイギリス人であつた。しかも彼等が貧しい音楽者に凌辱を加へるのを見て、彼はわざとその音楽者を招き、食卓に就かしめて、外人客の間に大騒ぎを惹き起した。この事件を記したのが「リュツェルン」の一篇である。旅行は約半年に亘つた。彼はベティエルブルグを経て再びヤースナヤ・ポリャーナへ歸つた。それは夏の八月であつた。

彼が文學方面の人々と疎遠になつたことは、やがて彼に對する文壇の批評の上に反映を示して來た。千八百五十年の終りに公けにせられた彼の作品は、殆ど顧みられないで、黙殺せられた。彼の作に就いて、「現代批評の看過せるロシア文學界の現象に就いて」といふやうな標題の批評が、やや公正な批評家によつて書かれたほどであつた。トルストイ自からもこの事に就いて、最初は自分も氣にしてゐたが、今ではもう氣になくなつた、自分には書くべきことがあり、書く力がある、世評は何とあらうとも、ただ本心にかなふやうに、全力を注いで書けばよい、さうすれば、世間が祭壇に唾しようとも意とするに足らぬといふ意味を、

Schweizerhof Ringeln

千八百五十七年十月の日記に記してゐる。かやうにして彼は、全く文壇の批評に頓着せず、書くべきものを書き、言ふべきことを言つた。

千八百五十九年の一月には、「三つの死」が公けにせられた。二月には、モスクワ大學内のロシア文學愛好者協會で、會員としての最初の演説を試み、藝術に就いて論じた。四月には「家庭の幸福」が出た。而して、その冬には、かねて千八百四十九年に一時手を着けたヤースナヤ・ポリャーナ小學校を再興した。兒童を教へることは彼の楽しみであつた。しかし彼は、この事業を、十分な準備と覺悟とによつて、現代の教育的研究のあらゆる最善の結果に基いて行はうと欲した。彼はその方面の研究に着手した。教育者と接觸し、模範的小學校を參觀した。しかも尙それだけでは満足せず、ひろく西ヨーロッパに於ける學校教育の實狀の調査研究を思ひ立ち、第二の外國旅行を計畫した。長兄ニコライは病を養ふため醫者の勧めによつて既に外國にゐた。トルストイは一つはその病兄を見舞ふために、千八百六十年の七月、妹マリーヤとその息等とを伴うて先づベルリンに赴き、病兄とともに南方フランスに往つた。そこで、その九月に、ニコライはトルストイの手に抱かれて永眠した。この長兄の死が彼の心に重大な刺激を與へたことは、彼の「懺悔」の中に、この長兄の死に就いて記すところを見ても明らかである。即ち謂ふところの進歩に就いての迷信が人生のために不完全なものであることは、ニコライの死を見ても明らかである、ニコライは賢い、善良な、眞面目な人間であつた、若くして病み、一年以上も苦しんで、苦しみ死に死んだ。何故に生き、何故に死ぬるかといふことはニコライには分らなかつた、いかなる理論も、その餘りに来る苦しみ死に際しては、何等の答へを自分にもニコライにも與へることが出来なかつたとトルストイは言つてゐる。生死の問題はトルストイが

一生を通じてそのために悩み苦しんだ問題であつた。ニコライの死後、彼は更に旅行を繼續して、學校を視察し教育者と會談することにとめた。彼はドイツ、フランス、イギリスの諸學校を訪ひ、その實際の様子を觀、さまざまの教育上の新説を聴いた。しかもいかなる教育者の所説も、いかなる模範的な學校の實狀も、西ヨーロッパに於いて行はれてゐるところの制度方法が、ロシアにとつても亦最上のものとして受け取られるといふことを、彼に信ぜしめることは出来なかつた。彼の經驗と觀察と研究調査との結果は、彼をして、ロシアに於ける國民普通教育の事に就いては、ロシアは全く自己獨得の道を行くべきことを確信せしめるに至つた。千八百六十一年の春彼はロシアに歸つて、更に新しき勇氣を以て教育の事に從事した。

彼はまた平和裁判の仲裁人としてもその義務を盡した。彼はもとより農奴解放の味方として、専ら民衆のために盡さうとした。千八百六十一年の二月十九日に農奴制度は廢止せられたが、地主等は尙且つ何とかして自家の特權を維持することに全力を注いだ。トルストイはこの地主と農民との間に立つて、その紛争を解決する平和裁判の仲裁人として、能ふかぎり明らかに農民に有利な判断を與へたのである。その結果は、保守的な地主、貴族たちの間から彼に對する激しい敵意を招くこととなり、あらゆる方法を以て彼の活動を妨げ、彼に就いて密告し、また彼を侮辱するに至つた。トルストイは到底自分一個の力の及ばざるを見て、この方面の義務を辭退し、やがて専ら學校教育に力を集注することに決心した。彼は助手とともに自から教鞭を執るばかりでなく、新たに教育上の雜誌「ヤースナヤ・ポリャーナ」を發刊した。それは千八百六十二年の二月である。この誌上に、彼は教育上の重大な諸問題に關する論文の他、自家の學校並びに彼の指導の下に教育に従事せる近隣の學校教師の事業報告などを掲げた。

① 彼の教育上の考への要點は教育の自由といふところに在る。彼の考へによれば、知識傳達の方法は經驗に基かねばならぬ、而してその方法は、それによつて農民の兒童が速かにまた最も容易に、彼等に必要なる實人生の知識を攝取するところの最良の方法として認め得らるべきものでなくてはならぬ。随つてトルストイは強制教育を排斥する、土地の實情に基かない技巧的な、西ヨーロッパからの借りものの教育制度や方法を排斥する、また學者や官吏などの立案した一切の教育課程を排斥する、それ等の教育課程に於いては、民衆自から何を學ばんと欲し何を有益なりとするかに就いて、少しも民衆に就いて直接質すところなくして、民衆のために何を知るべきかを獨斷的に決定してゐるのである。教育によつて民衆を益し民衆に奉仕せんとせば、それは無條件の自由、——知識に就いても信仰に就いても何等の束縛を加へないことによつてのみ、それが可能でもあればまた有益ともなる。トルストイはかくの如き考へによつて、自家の學校を指導し、また彼の考へに贊同する教育者たちを指導したのであつた。勿論この教育方面の主張と事業とは、一方には在來の教育の側から、また他の一方には民衆の無知を便利とする暗黒の力の側から、新しい迫害を受けた。教育者、學者、文學者たちは、少數の例外を除いて、この「閑事業」を冷眼視した。暗黒の力は、社會の安寧秩序を亂すものとしてさまざまの密告をなした。即ち民衆の開明を忌む一部の人々の謬妄である。

これ等さまざまの迫害、反對は、トルストイを可なり疲れしめ、彼は甚だしく健康を害した。やや肺患の懸念さへあつて、千八百六十二年の晩春から夏にかけて、彼は馬乳の名所サマラ縣の田舎へ赴いて療養に従つた。その間その筋の暗黒の力は絶えず活動を止めず、彼の不在中、ヤースナヤ・ポリャーナの邸には憲兵が來て家宅搜索を行つたが、徒らに留守の叔母や妹たちを驚き恐れしめたばかりで、何一つ發見するを得ず、

更にまた再度の家宅捜索を行ふ旨を言ひ置いて、トルストイの指導の下にある近隣の小學校を悉く捜索してまはつた。トルストイはサマラ縣からの歸途、モスクワでこの事を耳にし、非常に侮辱を感じ憤つた。彼の怒りは、宮廷の女官であつた伯爵夫人アリェクサンドラ・トルスタヤに送つた當時の手紙に明らかに現はれてゐる。彼はその書中この事件に關して皇帝に懇へんことを求めてゐる。しかもこの家宅捜索の結果、彼が心血を注いだ小學校の内部の秩序も、學校に對する村民の態度も、已に悉く破壊せられて、また再び回復する能はざるに至つた。

#### 四

トルストイの自己に對する要求、自己批評の心は、彼の内心に安きを與へなかつた。彼の教育上の獻身的事業も、彼自からの内心には、尙且つ多くの不満の感を與へた。殊に、人生の問題に就いて、何等の中心統一を得ないことは、彼の心を最も苦しませたところであつた。更にまた、彼が久しく求めてゐた家庭生活の幸福の未だ得られないことも、あはせて彼の不安と焦燥との原因を成した。

彼が少年時代からの知りあひであつた特醫ベルスの家庭には、三人の娘がゐた。トルストイはその仲のソフィヤを深く愛した。ソフィヤもまた彼を深く愛した。結婚の申し込みがなされた。ソフィヤの父ベルスの承諾を得ることはあまり容易ではなかつたが、とにかくその承諾を得、取り急いで婚儀が行はれ、幸

福な二人は新居を作るべくヤースナヤ・ボリャーナへ歸つた。そこでは「叔母」のタチヤーナ・アリェクサインドラヤ、トルストイの兄セルゲイなどが二人を歡び迎へた。それは千八百六十二年の九月であつた。

結婚は彼の生活に一時機を劃した。家庭生活の幸福は、彼の激しやうい苦しみがちな性情に、少くとも一時の平安をもたらした。彼はさまざまの内心の苦しみを暫くは忘れて、善良な家庭の夫として、莊園の主人として、地主として、農民のためにも能ふ限りつくした。彼自からの謂はゆる、結婚から精神的再生の轉機に至る十八年間の「世間的な生活」が始まつた。世間的道德の上からは、何等の非難せらるべき罪をも犯さない平安な家庭生活ではあつたが、トルストイ自からの批評するところによれば、ただ偏へに自分の家庭のこと、財産のこと、文學上の成功名譽を得ることなどに専心して、全くエゴイスティックな興味にのみ生活してゐた時期が始まつた。とにかくこの「世間的な生活」が、——激しやうい苦しみがちな性情の平安を得た生活が、彼に與へたところのものは、何よりも先づ藝術の創作であつた。結婚後間もなく、彼はその最大な作品「戦争と平和」を書き始めた。彼がこの作の準備のために、この作の完成のために費した精力は巨大な異常なものであつた。彼がこの作で現はさうとした歴史観は、一切の歴史上の大事業が、すべて目に見えぬ捕捉しがたき力によつて支配せられるといふことであつた。信するものはそれを攝理といひ、信ぜざるものはそれを歴史上の法則といふ。一切の權勢も、その權勢を支配すると信する人々も、すべてこの捕捉しがたき力の盲目的な機械に過ぎない。人が己れを勢ある人間と思へば思ふほど、その人は、眞理の永久の法則の前には無價値となる、それは丁度ナポレオンのやうなものである。人がこの永久の法則の心に深く透徹すればするほど、そしてその法則の前に従順であり、民衆の、即ちやがて神の聲に聽くことをつとめればつ

とめる程、その人は偉大になる。それは丁度ロシア軍の總帥クートゥーソフのやうなものである。このトルストイの考へかたに對しては、もとよりさまさまの批評があつたが、しかしその藝術上の偉大な力は、何人もこれを認めざるを得なかつた。これこそはまことに近代の偉大なる敘事詩であつた。千八百六十年代は、殆どすべてこの大作の準備、執筆、刊行のために費された。この作の完成はさすがにトルストイをして深い疲勞を感じしめた。再び生死の問題が彼を襲うた。彼がショーペンハウエルの思想に深く動かされるに至つたのも、この頃のことである。

これよりさき、千八百六十三年の六月には長男セルゲイが生れ、その翌年の九月には、長女タチヤナが生れた。その同じ年には初めて彼の全集が出版せられた。千八百六十六年の五月には次男イリヤ（父に關する思ひ出を書いた人）が生れ、その翌年の夏には二女マリーヤが生れた。千八百六十九年の五月には、三男レフ（先年日本へ来たことのある人）が生れ、十一月に至つて「戦争と平和」が完結したのであつた。千八百七十年代のトルストイは、再び教育方面に心を轉じた。五人の兒等の成長に伴つて、その教育のことが差し迫つて問題となつて來たからでもある。何を教ふべきか、いかに教ふべきかの問題が、再び彼の前に迫つて來た。彼は前年の經驗に基いて、千八百七十一年、自から初歩の讀本の編纂に着手し、翌年の末に近くこれを完成した。千八百七十一年から、再び農民の子弟のために學校を興し、彼の全家をあげて（夫人も年長の子等も）その授業を受け持つた。彼の考案に成る初歩讀本の効果は著しく、全くの文盲の兒童が二箇月ばかりもすると自由に樂に讀めるやうになつた。彼はこの成績に勵まされて、自家の考案になる教授法をモスクワの小學校で試みる事を求め、その承諾を得て舊來の方法との比較的實驗を行つたが、その結果では

長女  
セルゲイ  
イリヤ  
マリーヤ  
レフ

Schopenhauer

いづれとも判断がつかかねたので、彼は千八百七十四年一月の「祖國雜纂」誌上に「國民教育」と題する論文を掲げ、年來の主張である教育の自由を唱へ、教育が國民の要求の上に立脚すべきことを説き、ドイツ流の輸入教育法を難じた。世論はまた二つに分れて、トルストイを非難するものも少からずあつた。しかし當時の批評家として權威ありしハイローフスキーの如きも亦トルストイの説に賛成して、「祖國雜纂」誌上に論じた。この間もトルストイはヤースナヤ・ポリャーナに於ける教育事業を繼續し、近くの學校の教師たちを集めて、自家の創案に成る教授法を教へ、それ等の學校に於いて、それぞれ生徒に對して試みしめたのであつた。

この教育事業と相並んで、彼はまた「アンナ・カレニナ」に着手した。この作の家庭生活の描寫に、レキンの面影に、多くの自傳的要素のあることはいふまでもない。また七十年代の間には、新しく求めたサマラ縣の所領地へ屢々赴いた。千八百七十三年の夏、トルストイはそこに住んで、その地方の農民の貧困の狀を具さに見た。その年は殊に早魃のため收穫がなく、サマラ地方には恐るべき饑饉が迫つた。已に前年來の收穫不足のため餘裕のなかつた農民の困窮は甚だしかつた。トルストイは親しくその地方の村々の經濟狀態に就いて正確な統計材料を集め、これを基礎として饑饉救済の必要をひろくロシアの社會に懇ふるの文を作り、これを「モスクワ報知」に公開狀として掲げた。この公開狀は忽ち天下の反響を得、先づ最も早くトルストイの懇へに應じたもの一人はシヤ皇后であつた。皇后の巨額の下賜金を初めとして、忽ちの間に總額百萬ルーブル以上の資金が集まり、それによつてサマラ地方の住民を救ふことが出來た。この間、トルストイの一身一家の上では、千八百七十二年五月に四男ピョートルが生れ、その翌年の十一月に夭折したこ

批評家  
ハイローフスキー



と、千八百七十四年の六月、「叔母」のタチャーナが歿し、その翌年十一月女兒が生誕後間もなく死んだこと、その十二月にはカザンで世話を受けた叔母のベラゲーヤ・ユシニコワが歿したことなどを記すことが出来る。

## 五

比較的静かな「世間的な生活」の時期も漸く終りに近く、トルストイは再び内心の苦しみを感じ始めた。死の觀念が再び彼を脅かし、必然の絶滅の思想が、われは何故に生き、わが生涯は何のためにあるかの問を以て、再び彼を苦しめた。七十年代の終りは、彼の一生に於ける最大の危機であつた。この生死の問題こそは、彼が物ごとくついて以来、いつも彼の心の底に潜んで離れないものであつた。彼が十八歳の頃から書き初めた日記の中に、その最初のページから彼はこの問題に觸れてゐた。カフカズの山地でも、セプストーポリの砲煙の中でも、彼は死の問題を考へ、新宗教の創立を思つた。長兄の臨終、死刑の目撃、その折々にこれ等の根本問題は鋭く彼の心を刺した。絶滅か不滅か、この問題がいつも彼の心の底を離れなかつた。結婚の幸福、文壇の名声、富、社會的の活動、これ等は一時彼の心を「世間的な生活」へ惹くに足るものではあつたが、しかもそれはいつまでも續かなかつた。彼は再びまた年來の、生來の問題に立ち還つて來た。彼は生死の問題の苦しみに堪へかねて、先づこれの解決を書物に求めた。學者に求めた。凡ては進歩し發展する

といふのが、その答へであつた。しかし彼にとつてそれは答へではあり得なかつた。彼は更に神と人間との仲介者、教會に就いてその答へを求めた。信ぜよ、天の祕密はひらかれんといふのがその答であつた。しかもそれ等の人々の無知は、教へを求めぬ彼自身よりも遙かに甚だしかつた。彼は苦しみつづけた。殆ど絶望に陥つて自殺を思ふことも屢々であつた。彼はその「懺悔」の中で、この當時の苦しみを説き、その苦しい惱ましい心持ちを、「神を求める心」と呼んでゐる。彼はこの求める苦しみの間にあつて、あるときは全く絶望に近く、あるときはまた量るべからざるよろこびの心底に涌くを覚え、それが神の否定と肯定との間に断えず動搖してゐる心持ちであることを思つた。まことにもし、神を見出だし得るかすかなる望みさへなかつたなら、彼は夙に自殺してゐたであらう。彼が神を感じ、神を求めるときこそ、はじめて彼はまことに生きてゐたのである。「われ尙何をか求むる、即ち神のみ。神こそは、それなくして生くる能はざるところのものである。神を知ることと生きることは——一つである。神は生命である」と彼自から「懺悔」に記してゐる。かくの如くにして彼は神を見出だし、自からを救ふことが出來た。神の信仰を得て、彼はその身邊にこの信仰の表現を求めた。彼はそれを民衆の信仰に見た。全民衆が神に於いて一つになるといふことは、トルストイにとつては、よろこばしくも願はしき年來の願ひであつた。僻村謙遜な民衆の心はやがてキリスト教の精神であつた。しかしながら、彼が嘗てカフカズの地方でカザツクたちの間に住み、その素朴な自然な生活を心から愛してゐながら、どうしても彼等と同化することが出來なかつたやうに、今もまた、民衆に對して深き宗教的愛を懷いてゐるにかかはらず、神を信する民衆を深く愛してゐるにかかはらず、彼はやはりどうしてもその民衆と渾融同化することが出來なかつた。そこには鋭い理性の力が根強く執念く働いて

わて、彼をして、民衆のすべて——迷信的要素をも本質的に有してゐる民衆の全部と、どうしても融和させなかつたのである。彼は更に神學に往つた。しかも神學は、民衆の迷信的要素よりも更に甚だしく、彼の理性の受容しがたきものであつた。彼が神學の研究の結果は、誠實にして大膽なる「正教教義神學の批評」となつて現はれた。

彼は遂にキリスト教の源泉たる四福音書に往つた。彼はそのロシア譯を通讀して、福音書の教への本旨と反するやうな箇所を少からず發見した。彼はその註釋書に就いて見て、なほ更に驚いた。それ等の註釋書の説くところによれば、キリストは殺人を禁じたけれど、時には殺人を許すといふことになつてゐる。精神と眞理とに於いて神への服従を説きながら、それとは全く交渉なき空虚なる外形的服従が求められてゐる。同胞の愛を説きながら迫害壓迫が許されてゐる。而してこれ等の一切の矛盾が、いづれも同じ四福音書の本文によつて證據立てられぬ。トルストイは四福音書のロシア譯及び教會スラヴ語の譯本が原文の眞を傳へてゐないことを思つて、新たにギリシヤ原文の研究を始め、ドイツ、フランス、その他の信憑すべき譯本を比較し、自由神學派の解釋を参照し、ここに自から四福音書の全然新しきロシア譯を成した。そはいかなる單純な讀者にも了解せられる現代のロシア語によつたものであつた。この新譯によつて全く統一ある、首尾一貫せる四福音書が成つた。すなはち「四福音書の結合及び翻譯」がそれである。彼はまた友人の請ひに任せて、その新譯から別に「簡易四福音書」を編んだ。この事業成つて彼は初めて自から安んずることが出来たのである。

簡易四福音書

六

1881

千八百八十一年三月一日、皇帝アリエクサーンドル二世が弑せられた。犯人は死刑の宣告を受けた。トルストイは新皇帝に書を上つて、その父の弑虐者に哀れみを垂れんことを求め、そこにロシアの救ひがあることを説いた。しかしながら、内相ポビエドノスツエフは、その内容に不同意であるの故を以て、その上書を皇帝に傳達することを拒んだ。その上書の内容は、とにかく噂によつて皇帝の耳に傳へられたが、皇帝は何等答ふところがなく、犯人は刑を受けた。

トルストイの信仰生活の一轉機に就いては、彼は千八百八十三年の初めから、「わが信仰は何にありや」を書いて、自家の人生觀宗教觀を明らかにした。しかもこの一篇も、またかの千八百七十九年に書いた「懺悔」も、容易に出版することを得ず、且つ出版後直ちに沒收せられた。千八百八十二年の秋、トルストイの一家はモスクワの町に邸宅を求め、冬季はモスクワで暮すやうになつた。都會生活の貧困、上流の頹廢生活は、更にトルストイの心を刺激した。千八百八十二年のモスクワの戸口調査を機として、彼はモスクワの貧民生活に親しく接し、これを救ふの道に出でんことを社會に懇へた。彼自からこの調査に加はり、自から選んで最も甚だしき貧民窟を受け持つた。モスクワの市民は、もとより金錢の寄附などこそはしたが、一般にこの事に就いては、冷淡な態度を示した。而してこの計畫の不成功は、深く彼をして社會缺陷の根據に就い

て考へしめ、その結果として書かれたものが「かくて吾等何を爲すべき」であつた。この文章に於いて、彼は富者の生活の悪徳を描き、その虚偽虚飾の生活が一般民衆の心に與へる害毒を説き、社會的害毒のために存する虚偽の學問、虚偽の藝術を難じ、人々に勤勞と、悔恨とをすすめ、婦人の子女教育の任務の重大を説いてゐる。彼は自から都會を去つてヤースナヤ・ポリャーナに歸り、さまざまの勞役に自から従つた。また喫煙、飲酒、狩獵、肉食を斷ち、全く外界の上流社會との交際を絶つていたつた。彼の例にならふものも少からずあつた。即ちトルストイを中心として、同志の人々、その教へに従ふものが漸く集つて一つの社會教化運動を始むるの機運に達した。世界の思想乃至文學をひろく一般に傳達する目的をもつて千八百八十五年に起されたのが「仲介者」といふ出版協會であつた。トルストイ自から先づ筆をとつて聖賢の傳記、民間の傳説などを、極めて分りやすく書いた。さまざまの文學者美術家がこの舉を助けた。廉價な小冊子が幾百萬となく出版せられた。一般民衆の教化の上に多大の効果を及ぼしたことは勿論である。而してこの出版協會は今も尙その事業を繼續してゐるのである。千八百八十七年に至つて、彼は自己の人生觀をその「人生論」に述べた。その他、彼の宗教上の諸論文は、多くロシアで禁止せられ、或は筆寫せられ或はさらにそれを寫眞にとつて、ひそかに志ある人々の間に流布されてゐた。これ等の禁止がすべて宗務省その他の笑ふべき偏見に基いたものであつたことは言ふまでもない。而しその説くところの基礎的思想は、自己を没しての愛であつた。正教會の僧侶が彼を反キリストであるとしたのもこの頃のことであつた。千八百八十年代の終りから千八百九十年代の初めにかけて、彼は多くの論文の外に、「クロイツェル・ソナタ」、「闇の力」なども書いた。これ等の二作もまた禁止せられたものの中にあつた。この間トルストイは禁酒運動にも與かり、

「飲酒反對同盟」を組織した。禁酒に關する論文も書かれた。彼が一切の版權を棄て、一切の財産を家族たちの間に分配したのは、千八百九十一年の九月であつた。これより前、千八百七十九年には五男ミハイールが生れ、千八百八十四年には末女アリヌクサーンドラが生れ、千八百八十八年には六男イワンが生れてゐた。彼の家庭も可なりの多人數となつてゐたのである。

千九百九十一年の頃は、ロシアは甚だしき不作と、それに伴ふ饑饉とに襲はれつつあつた。トルストイは、ひとり文章を以て社會に懇へるばかりでなく、その年の秋九月、自から家族のあるものを伴つて、最も慘狀を極めたリャザンスカヤ縣ダンコーフスキー郡に赴き、自己の支配の下にあつた僅少の資金を以て、村々に食堂を開き、無料で穀類を分與した。トルストイ夫人もまたこのために力を盡した。金錢物品の寄附も夥しく集つた。饑饉地方には各種の私設の救濟團體が組織せられた。さすがの政府もこの有様を默視するわけに行かなくなつた。赤十字社も活動を始めた。國外では、西ヨーロッパ及びアメリカに於いてロシア饑饉救濟會が組織せられ、麥粉や資金が夥しく寄附せられた。かくの如くにしてこの饑饉の不幸も著しく防止せられた。この救濟事業の中心は實にトルストイであつた。

しかし、この社會的活動の一方で、彼は筆を執つて彼の最も重大な論文の一つに屬する「神の王國は汝等の中にあり」を書いた。この論文は、一面キリスト教の新しい解釋であり、個人的生活と社會的生活との關係に就いての彼の見解の披瀝であるとともに、また他面、十年以前に書いた「わが信仰は何にありや」に對する世評にこたへたものと見られる。これ等の主なる論文のほかに、さまざまの序文、短い論文なども少からず書かれたが、千八百九十五年に於いて、カフカズ地方のド・ホボールの運動に對して與へたトルストイ

の助力は特に記すに足るものである。元來このド・ホポール教徒と稱せられるものは、ロシアに發生した著しく合理的傾向を有する分離派の一宗派であつて、十八世紀の中葉エカテリノスラフスカヤ縣に住んでゐたコリユースニコフによつて創められ、漸次ロシア各地に擴がつて、ロシアの國教であるギリシヤ正教と警察との激烈な迫害を受けて來たものである。この宗派の教へに従へば、神は人間の魂に在つて、神自からの言葉で人間に教へる、普通に謂ふところの原罪は存在しない、キリストの歴史は精神的に解釋すべきものであつて、懺悔はただ神に向つてのみ爲されねばならぬ、齋は惡しき思想や行動を忌むの意であつて、神への勤めは私室に於いて爲すべきである。人間の外的區別、兵役、宣誓などはこれを認めない——といふのである。彼等は勤勞を愛し徳行を積むことを以て世に知られてゐる。この教徒の運動が突發するに至つたのは、一面宗教上の信仰の勃發とも見られるが、またその内部に於いて、地方的政治的の事情に激發せしめられたところがあつたのである。彼等カフカズ地方に於けるド・ホポール教徒は、その信仰に基いて武器を燒き、兵役の義務を拒絶した。この點に於いてトルストイの教へと相似るものが少からずあつた。随つて世間一般にこれをトルストイ教徒の運動と呼ぶにいたつた。政府はもとより彼等を追放し、投獄し、懲治隊に編入し、更に國外へ追うた。かくの如き彼等の窮狀を救うたのはトルストイであつた。彼はこの教徒のために世間に懇へ、八千の追はれたるド・ホポール教徒をして、無事に英領キャナダに移住せしめたのである。しかしトルストイは既に千八百八十三年以來自から金錢を用ひることを止めてゐたので、ド・ホポールを救ふための資金も手元にはなかつた。彼は新たに書いた「復活」の稿料を以てこれに充てた。この作は既に久しく着手されてゐたのであるが、差し當りの必要から、急いで稿をへて出版することにしたのである。

千八百九十五年の二月には、六男イワンが夭折した。マリーヤもタチヤーナも相次いで嫁した。千八百九十七年から八年へかけては「藝術とは何ぞや」が書かれた。千九百一年二月二十日（モードの傳には二十二日とあるが、ここにはビリュコフの略傳及び詳傳の記すところに従ふ）附けの宗務省令によつて、トルストイは教會から破門せられた。即ち宗教に關して偽りを説くことと、更に悔悛の狀なきことにより、彼を教會の保護より除き、その死に際して教會の儀式によつて埋葬せられるの權利を褫奪するといふのであつた。彼はこれに對してその三月直ちに抗議を發表した。その文には、力と純一と誠實とがあつて、彼のこの種の文章の中でも、生彩の豊かなものである。ロシアの社會はひろく一齊に深き同情を彼に寄せた。

## 七

千九百年の夏以來、彼は健康を失してゐた。その翌年の夏もまた重き病を得て、八月南方クリミヤに赴いた。この重患は更にトルストイに對する世間の同情を高めたのである。彼自身もまたこの病によつて、更に一層精神生活上の醇化を達成したかの趣きがある。一種の崇高な透徹、安靜、柔和の色が著しく加はつた。病後に書かれた多くの論文、たとへば皇帝に與ふるもの、宗教家に與ふるもの、勞働者に與ふるもの、政治家乃至軍人に與ふるものなど、いづれも將さに死なんとする人の言の如き感じを與へる。

千九百四年には日露戦争が開かれた。トルストイは直ちに筆を執つてこの戦争に對する抗議を公けにした。

「反省せよ！」と題するものがそれである。この一方に於いて彼は一般民衆のために「賢人の思想」を編纂した。更に宗教哲學道德文學のあらゆる方面から材料をあつめて、自から選擇せる章句を一年の日々に分ち、かくして編纂したものが「讀書の園」である。この書のために、みづから幾多の短い物語を新しく書いた。千九百五年に入つて、ロシアの國情は驟然たるものがあつた。勞働者及び一部の農民の間には、革命運動が起りつつあつた。トルストイはもとよりその平生の主張に従つて、この國民の覺醒運動を、生活の外形の變化に向はしめずして、その根本の動力たる内面の道德的基礎の革新に趣かしめようとしてつとめた。「世紀の終り」その他の論文はすべてこの意に基くものであつた。殊に最も中心の問題であつた土地問題に關しては、彼は明らかに土地の所有に反對した。死刑に關しては彼は「黙する能はず」と題する一文を千九百八年に書いた。この前後の彼の著書は屢々警察の沒收するところとなつたのである。又彼の論文を掲載したニージュニー・ノヴゴロドその他各地の多くの新聞は、巨額の罰金を科せられた。セヴストーポリの新聞の主筆は、そのために捕縛せられた。トルストイの秘書グーセフは捕縛の上追放せられた。トルストイの抗議もこれ等を如何ともすることが出来なかつたのである。

千九百八年の八月二十八日は、トルストイの生誕八十年の記念日であつた。ロシアの社會は、トルストイの辭退に拘らず、かねてこの日を祝する計畫を立てつつあつた。しかもそれに先だつて、ある種の新聞には、彼の如き異教徒の記念日を祝する必要はないといふやうな論文さへ現はれ始めた。また、人生の指導者としてのトルストイを表彰することを禁ずる旨の布令が各地に送られた。ただ、文學者としての彼に就いて言ふことだけが許されてあつた。ある地方では、この布令によつて、寧ろ全くトルストイのことは言はない方が

よいといふやうに解釋せられ、實際その當日に於いても、公然とは何一つトルストイに就いて言はれなかつた。しかも、それに拘らず萬人の心の底の深い感情を抑へることは出来なかつた。この日の凡てのロシアの新聞や多くの外國の新聞は、トルストイのために獻げられ、彼に關する論文、追憶、彼の肖像繪畫を以て充たされた。ヤースナヤ・ポリャーナへは電報や書面や記念品や祝ひの客が夥しく集つた。電報だけでも殆ど二千通に上つた。ロシアでも外國でも、トルストイのために記念の夕が催された。ペティエルブルグには、トルストイの記念日のための委員會が組織せられ、更にそれがトルストイ記念博物館協會となるに至つた。この協會の主催で、千九百九年の春、トルストイに關する一切の事物の展覽會が催された。彼の原稿、書翰、肖像、胸像、挿畫、繪ハガキ、またそのボンチ繪までも集められた。彼の著作は、その處女作から最近のものに至るまで、あらゆる國語のものが集められた。今現にあるベトログラード及びモスクワのトルストイ博物館は、この展覽會を基礎として發達したものである。

トルストイの永い一生は、内面生活と外面生活との闘ひであつたともいへる。殊に彼に最も近い周囲の境遇と人間とが、恐らく晩年に至るに従つて、ますます彼の内面生活と遠くかけ離れて行つたのであつたらう。この最も近い周囲の束縛から脱することは、彼の久しき願ひであつた。彼は己れの健康の漸く衰へ、生の終りの遠からぬ未來にあることを感じて、この境遇から離脱するの願ひを更に強めた。千九百十年十月二十八日の拂曉、まだうす暗い中を、友人であり家の醫師であるドゥシャン・ペトロキッチ・マコーキツキとともに、トルストイは漂浪の旅に上つた。告別のため妹のマーリヤを訪ねた後、更に南の方へと旅立つた。彼はそこからボルガリヤに赴き、晩年を孤獨と精進とのうちに送らうとしたのである。彼自からの日記及び

マコーキツキーの言によると、トルストイは家を出てはじめて自由のよろこびを感じた。しかし南へと志す汽車の中で風邪にかかり、トゥーラ縣の境に近いアスターボラの小驛に下車し、その十一月七日、その驛長の家の一室で静かに永眠したのである。

彼の埋葬は、故人の平生の志に従つて、一切の儀式虚飾を排した極めて素朴なものであつた。これを送るものは夥しき農民と、青年と、彼の友人及び彼を尊敬する人々であつた。彼の柩は、彼の長兄ニコライが少年の頃、萬人を善良にし幸福にする道を記した緑の杖が埋めてあると話してきかせた、その森のその場所に埋められた。眞理の前になにもを恐れざる、逞しく偉大なる人間トルストイは、かくの如くにして不滅に歸した。

## トルストイと革命

トルストイの革命に対する態度は、彼が千九百五年乃至六年の頃に發表した種々の論文によつて知られる。その中でも比較的簡單明瞭に、トルストイの革命に対する考を知る事を得る論文は、千九百六年に公にした『ロシアの人々に與ふ、政府、革命家及び國民に。』と題する論文と、千九百五年に出した『世紀の終り』と題する論文である。『ロシアの人々に與ふる書』に於いて、トルストイは述べて曰く——「革命的活動にはさまざまあるけれども、その根柢、その歸結は、要するに殺人、刑罰、武裝せる内亂であつて、その執るところの手段を擇ばないところに於いては、あらゆる革命を通じて皆一つである。革命によつて人々は悪化し、動物化する、しかして結局絶望的になる。革命家のとる手段はさまざま異なるけれど、結局は國民からその食を奪ひ、その國民の生活を重くする。そして、その革命家のいはゆる改革は不自然な、技巧的な生活を意味して、國民の幸福のために齎すと稱するところのものが、すべて國民にとつては風馬牛なことである。國民は革命家とは全く別の問題を持つてゐる。國民は自己の行くべき道を革命家よりも一層深く見てゐる。

國民は自己の使命の自覺を表現するにあつて、決して新聞の論説などによらない。幾億萬の民衆の全生活を以てする。革命家は曰く「我等は生活を公正に改造せんことを欲する」と。しかしながら、革命家は公正ならざる生活の状態に於いてのみ僅かに存在することができないのではないか。一旦、公正なる生活の秩序がたてられれば、すなはち言ひ換へれば、他人の勤勞によつて徒食する徒が、その徒食を安全に懶惰に寄生蟲的に續けてゆくことができないやうな生活の秩序が立てられてくれば、地主とか、商人とか、醫者とか、教授とか、辯護士とか、教師とか、工場で働く人とか、工場の持主とか、技師とか、大砲や煙草や鏡や天鵝絨や——さういふものの製造人や、その他民衆の勤勞に衣食する特種の人々とともに、悉く飢餓のために餓死するであらう。革命家にとつては實際生活の公正なる改造が必要でないばかりでなく、革命家にとつては人がすべて平等に勤勞をもつて、すべての人々に有益なやうに働かなければならないと云ふやうな生活の秩序ほど、危険なものはないのである。

革命家は自己を救くことをやめて、自己がロシア國民の間に有するところの位置、並びに自己の爲すところのことに對して直視しなければならぬ。その時初めて、革命家と政府との戦ひは、要するに、健康なる肉體に宿れる二箇の寄生蟲の争ひであることがわかるであらう。國民にとつては、相争ふ二つながらひとし有害であるといふことが、明らかにわかるであらう。それだから、革命家は正直に自己の利害に就いて語るがいい。國民のためなどといふ加減の嘘を言はない方がいい。國民はそつとその儘にうつちやつて置てもらひたい。革命家は自己の戦ひが國民のためではなくて、自己のためであるといふことを正直に認めるがよい。國民のためなどと云ふ美名のもとに、自己を救いてはならない。革命といふ暴力を用ひる戦ひのうち

には、何等萬民のために有益にして善良なるものがないばかりでなく、この戦ひは、眞に愚なる、有害なる、しかし殊に肝腎の點は無道德なることであるといふことである。

革命家の活動は、革命家の言ふところによれば、民衆の生活の一般の状態を一そうよく改善することを以て目的とするといはれる。けれども一般民衆の生活状態が一層よくなるためには人々自身が一層よくなるなければならない。このことは器に盛られた水が沸くためには、そのうちに含まれたすべての水の滴が沸かねばならないと同様に自然の眞理である。人々が一層よくなるためには、人々がいよいよ益々自己に、自己の内部の生活に注意を向けなければならぬ。外部的の、社會的の活動、殊にも社會的の争闘は、常に人間の注意を内部の生活から引き離す。それゆゑに従つて常に、必ず人間を墮落せしめて、社會道德の水準を低める。この事實は到るところに起つたことである、また現在（すなはち日露戦争時代のロシアに於ける革命を意味する）ロシアに於いて明らかに見られるところである。社會道德の水準の低下は如何いふ結果を齎すかといふと、社會の最も没道德的な分子が、いよいよますます社會の上層表面に出しやばつて来て、没道德的な社會の輿論がうち立てられ、その輿論は盗み、姦姪、甚だしきに至つては殺人をさへ許し且つ是認するに至るのである。かやうにして、世界の道德はますます低下し、時代の英雄はすべて最も没道德的な人間であるといふことになる。すなはち例をあげて言へば、ダントン、マラー、ナポレオン、クレラン、ビスマルクの輩である。かやうの次第なれば、社會的争闘に與かるといふことは、單にこれらの争闘に與かる人々が、一般に語るがごとき高尚な、有益な、善良なことでないばかりでなく、これに反して最も愚なる、最も有害なる、最も没道德的なことである。

この點に就いては最も青年の反省を要する。青年は武装して立つことや、その他の愚かしき残忍なる様々に就いて考へることなく、自己の魂の尊き特色に就いて考へなければならぬ。自己の善良にして眞實なる生活に就いて考へなければならぬ。自己の善良にして眞實なるためには、先づ何よりも自己を欺かないことが必要である。自己の取るに足らない欲情、すなはち虚榮心、名譽心、嫉妬心、自己の私利私慾を充たさんとする欲望に身を委せて、もつて國民のために盡すなどと考へることなく、先づ自己を省察し、自己の缺點を自ら矯正し、しかして自己を一層よくすることに努めなければならぬ。若し人々が社會的生活に就いて考へたいと思ふならば、先づ何よりも、國民の前に、自己が罪あるものであることを思はなければならぬ。しかして、能ふかぎり國民の勤勞を少く消費することを努めなければならぬ。國民を助けることが出来ないまでも、せめて國民を驚かし、苦しめ、多くの人々が爲すところの恐ろしき罪惡を犯さないやうにするがよい。すなはち、欺いたり、激昂させたり、盗みや一揆内亂を勧めたりして、結局非常な苦しみと、前よりも甚だしい束縛とに陥らせないやうにしなければならぬ。要するに、國民の眞の解放、國民の眞の向上を妨げないやうにしなければならぬ。

現在のロシアは、最も複雑にして、最も困難なる状態にある。現在のロシアが要するところのものは、新聞の論説でもなければ、集會の演説でもなく、またピストルを持つて街上を横行することもなく、公明に、嚴肅なる態度をもつて、自己に、自己の生活に對するといふことである。自己の生活こそは我々の左右し得る唯一のものである。自己の生活のみよく自己が支配することが出来る。また自己の生活の改善のみが、ただひとりよく萬人の生活を改善することが出来るのである。」

以上はトルストイの「ロシアの人々に與ふ」と題する論文のうちの革命及び革命家に對するトルストイの思想の概略である。上に現はれたるトルストイの思想に就いては、様々の説明をも加へる必要があり、また様々の批評をも入れる事が出来るのはいふまでもない。しかしながら、ここではそれらの點に就いて一々評論することを試みない。ただここで、赤き一筋の絲の如くにトルストイの思想の根柢基幹をなしてゐるものは、特に上述の概要の後半に於いて明らかに見られる個々の人間の内部の生活、魂の生活の改善が何事よりも最も重大であるといふ事である。個々の人の内部の生活の改善の實現されない限り、一切の外部的改革は、有害でこそあつても、何等利益を一般民衆の生活に齎すものではないといふ考である。個々の人の内心の生活の改善こそ、あらゆる團體の人間生活の改善を、眞に有益に有功に可能ならしめるといふ考である。この見地から見ると、トルストイが革命を否定するに至つた事は當然の歸結である。勿論、上に略説したところに就いて見ただけでも、トルストイが革命を非難し、否定する理由がその他にもある事は知られるのであるけれども、併しながら、個々の人の内心生活の改善を最も重大視する點から革命を非難し、否定してゐるのは誤りなき事實である。この思想を更に明白に表明してゐるのは、即ち千九百五年に公にした「世紀の終り」といふ論文である。この論文は十數節に分れてゐる五十頁ばかりのものであつて、確か大分以前に日本でも翻譯せられて、民友社から何かの論文とともに出版せられたことがあるといふことを、最近に至つて聞いた。この論文の第三節の「ロシアに於ける革命運動の本體」と題する一節は、最も明らかにトルストイの革命に對する考を現はしてゐる。彼の考によれば、革命の目的は或る種の暴力からの解放にあらねばならぬ。従つて一般民衆の暴力からの解放のために行はれる目的の實現の手段が、暴力以外のものではあらねばならぬ。



といふ事は言ふまでなく明白なことである。在來の革命は、平等を實現するために暴力を用ひた。しかしながら、平等を得んとする人々が、その自己が得んとする平等が暴力に依つて獲得せられると考へる事は甚だしき迷妄であると言はねばならない。暴力はそれ自らに於いて最も激しき不平等の表現である。その不平等の表現である暴力を用ひて、平等を得んとすることは迷妄でなくて何であらう。過去に於ける革命の目的は斯くの如く平等といふことであつたが、さて現在の革命の重要な目的を組織するところの自由は、如何なる場合に於いても、到底暴力をもつて達成することは不可能である。しかるに現在ロシアに於いて、革命を行ふ人々はこの點に於いて反省を有してゐない。

歴史は繰り返されるものではない。暴力をもつてする革命は、既にその時代を過ぎたと言はねばならない。暴力をもつてする革命が人々に與へ得るところのものは、悉く既に與へられ盡した。しかしてまたそれとともに、暴力をもつてする革命が何と與へ得ないかといふことも明らかに示した。自由とは魂の自由を意味する。人間が自己の神性を意識し、他の生存を愛するため障礙となるところのものから人間の魂を自由にして解放するといふことである。魂の結合は、すなはち眞の人間の結合はかくのごとき解放によつて初めて行はれる。神の法、愛の法によつて生活するもののみ自由である。自己との戦ひに打ち勝つことによつて、人は初めて魂の束縛から解放せられる。自由は、人間が他の人間から與へられたり、受けたりすることの出來ないものである。内心の信による自由、内心の信による結合、これらはすべて外的、強制的のものではない。この意味に於ける自由、解放には何よりも人間の個々の内心の變化が第一である。人間内心の變化から外的の變化は自ら導き出される。

トルストイの思想は、メレジュコフスキイの言葉によれば、飽くまでも求心的である。非我から我へ徹底しようとする思想である。トルストイは普通の意味から言へば反革命家である。しかしながら、内心の革命を主張する意味に於いては永久の革命家である。

トルストイも或る意味では、確に一切の常識的價値を破壊し蹂躪する花園に於ける象の如く見える。今のロシアに於けるポリシエキキもまた花園に於ける巨象の如くに、一切のものを蹂躪破壊してとどまるところを知らないかの如くに見える。「在來」への反抗、破壊、蹂躪の態度に於いて、思ひ切つた、殆ど向う見ずな處はいづれも共通の點を持つてゐる如くに見える。いづれも、どこかロシア的な氣風を持つてゐるやうに見える。けれども、トルストイは心的であり、ポリシエキキは物的である、といふ點に兩者の著しい區別が見られる。

これらの點に就いては、なほ詳しく觀察し批評したならば面白からうと考へるが詳細な研究は他の機會に譲ることとする。

## トルストイ教徒事件

豫め断つて置くが、この一文で私はただありのままの事實を紹介するに止める。それも今私の手許にある材料は極めて乏しくなつてゐるので、そのあるだけの材料を私の多少の記憶によつて補ひながら、この一つの事件の大體の内容とそれに對するその當時の世評の二三を紹介するに過ぎない。私自身の批評を試みるために必要な、トルストイ自身の思想の内容に就いての研究にさへ、ここでは到達しないで置く。それをするには差しあたり時間が足りない。

トルストイ教徒事件といふのは、千八百五十五年の秋十一月、私がモスクワへ行つたばかりの頃に、丁度その公判が開かれてゐて、モスクワの新聞には簡單ながらそれに關する記事がよく出てゐた。事は戦争中のこととに屬する。従つて、戦争もやみロシアの革命も滿三年になるといふ今日では、この事件も何となく影がうすく、生きた興味を有たないやうに見える。しかし、ロシアのロマノフ家時代にこの事件が法廷の問題となつたのは、それが戦争であつたからといふ點に根據を有してゐたので、その證據は、その裁判の結果を見て

も知られる。即ち多くの被告は、「戦時に於いて、印刷物によつて戦争中止論煽動の準備をなした」といふ處で告發せられたので、「國法に従はざる事を煽動した」ためではなかつたのである。従つて大部分の被告は、彼等に對する壓迫が、一層烈しい反動を激成するであらうといふ懸念からも（實際もうその時分はロシアの社會の内面には可なり収まりのつきにくい不安が濃厚になつてゐたので）、意外にも大抵無罪を申し渡された。事件が起つて抱引せられて後、裁判の決定するまでの約一年の在監が、つまり官憲から言へば自然に一種の處刑ともなつてゐたわけであらう。（これはその當時のモスクワの主な新聞の批評の記憶による。）ただ多くの被告の中で刑の宣告を受けたのは、三人だけであつた。即ちその中のセルゲイ・ポポフは「軍務に在る兵士をして兵役の義務を破らしめるために煽動的の公開演説を試みた」といふ處で、また、「戦争中止の機を弘めた」といふ處で、而してその中のプリネル及びベズバロフもまた「戦争中止の機を弘めた」といふ處で、何れも有罪となつたのであるが、その刑期は、未決監にゐた期間を含んで最長二年半位であつたやうに記憶する。千九百十七年の三月革命とともに、この種の罪人は放免せられたが、その頃最長期の刑に服してゐたポポフがもうほんの僅かで満期になるところであつたといふやうに記憶してゐる。その事件に關する新聞の切抜が見當らないが、大體その邊の記憶に誤りはないと思ふ。

右の如くこの事件が、當時に於いてそれ程の問題となつたのは、主としてそれが戦時であつたからである。この事件に就いてその當時のある雑誌で、

刻下の世界の大戦は人類の一大試験者であつて、ロシア及びロシア國民に對してもまた總檢閲を行つた。ロシア生活の一切の方面に對し、ロシア思想の一切の傾向に對して總檢閲を行つた。「實世間の拒否」と

いふ思想が、即ち實世間的眞理の無視といふ意味で、國家的、國民的、要するに社會的政治的の利害の無視といふ意味で、「實世界の拒否」といふ思想が、いかにトルストイ教徒にとつて典型的的特色的なものであらうとも、しかもこの、社會性、公民性乃至一切の實行性からは甚だ遠い、この偏理思想の一流派さへ、戦争と關聯せる出來事の滔々たる洪水の中へ引き込まれずにはゐられなかつたのである。(「文學と生活との報告」、千九百十五年——十六年、十七——十八號)

と言つてゐるのなども、筆者は何人であるか分らず、その論旨の是非は問はずともかくこのトルストイ教徒事件といふものに對するその當時のロシアの世間の觀察點が、主としてどこに在つたかといふことの一例證とはするに足りよう。

この事件がいかなる世評を受けたかを紹介する前に、この事件のあらましを記述して置かう。

スルターノフが當時のベトログラードの新聞「ビルジュウィヤ・ウエードモスチ」に掲げたこの事件の記述は、自からこの事件に關係してゐた被告の一人の直話によつてゐる。被告の一人とはワレンチン・フ・ドドロキッチ・ブルガーコフ君で、トルストイの秘書であつた人である。

ブルガーコフ君の言葉によると、——

凡てこの事件は唐突に發生したことで、何等豫め申し合せなどをしたのではなかつた。トルストイ教徒の中の或る者の如きは、この突發の事件に奇蹟的などころがあるとさへ言つてゐる。千九百十四年の十月開戦後間もない頃、宗教方面では名を知られてゐるイ・エム・トレグーポフがヤースナヤ・ポリャーナへやつて來た。(スルターノフの記述にはここで十月となつてゐるが、これは後に掲げる檄の日附によつて九月の間

違ひでなくてはならぬ。) 彼はブルガーコフと一緒に茶を飲んで話した。勿論話は戦争のことに及んだ。するとトレグーポフは突然ブルガーコフにかういふことを言つた。

——君と僕とはここで何をしてゐる、茶を飲んでゐる。しかし義務は、良心は……まア考へてみたまへ、ヒルコフは彼の義務觀念に従つて戦争に出かけた。そして既に戦死した、血を以て自分の義務に對する忠誠を證明した。しかし吾々は自分の義務を果してはゐない。

そこでトレグーポフは、戦争と共にキリストの教へが忘れられてゐることを詳しく論じた。彼はその前に彼の一派の宗教上の求道者によつて公表せられた「吾等の公開語」といふ檄を讀んできかせ、その内容の弱しいことを言つた。また彼は、目下凡てのトルストイ教徒と宗教上の求道者とを動かしてゐる心持ちを表白する必要があると言つた。そして、本當の「戦争に關する告白」を書くやうにとブルガーコフを説きすすめた。ブルガーコフはそれを斷つて、さういふ運動のやり方に賛成しないことを述べた。

トレグーポフはやがてしづかに立つて、神に祈禱を捧げるためにトルストイの墓場の方へ行つた。そこで彼は、墓の柩にもたれて、長い間立つてゐた。樹々の間には風が渡つて、「黄金の秋」の木の葉はそのあたりに散つた。あたりは静かであつた。空は落ちつかない秋の雲に閉ざされてゐる。

トレグーポフが墓場の方へ去つてしまふと、ブルガーコフは急に戦争に就いて自分の考へてゐることを書かずにはゐられないやうな気分になつた。そこで一心になつて思ふままを書いた。書いてしまふと、その下書きを持つてトレグーポフの行つたトルストイの墓の方へ出かけた。丁度トレグーポフは引きかへして來ようとするところであつた。二人はトルストイの墓の側で出逢つた。「君の祈つてゐる間に、僕は書いたよ」

と言つて、二人は樹の根に腰をおろし、ブルガーコフは書いたものを讀んできかせた。トレグーポフはこの意外の出来事に感動して、熱心に聽いてゐた。その本文は次の如くである——

反省せよ、兄弟なる人々よ！

恐ろしい事がなされつつある。幾千萬、幾百萬の人々は、自己の指導者どもに使喚せられて、獸の如く互に相襲ふ。その指導者どもの命を果たすために、殆ど全ヨーロッパの廣きに亘つて、人々は自己の相似形と神の相とを忘れて、自分等の如く同じく愛の能力と理性と善とを賦與せられてゐる自己の兄弟たちを刻み、斬り、射倒し、傷け且つ弑してゐる。

一切の教育ある社會は、凡てあらゆる思想上の流派とあらゆる政治上の黨派とを問はず、極右黨から極左黨に至るまで、社會主義者乃至無政府主義者をも包含して、凡ての流派の代表者によつて、かくの如く信すべからざる迷妄に達したのである。即ちその社會は、この戦慄すべき人類の殺戮を、「神聖なる」、「自由解放の」戦と呼んでゐる、而してそのために人々が自己の生命を賭すべきことを喚び求めてゐる……何のためであるか？——恰かも幻影の如き「解放」のためである。眞の自由とは、内心の自由の外ならぬといふことを忘れ、また殊に、それを現に罪深い血の海の氾濫の價によつて獲得しつつあるかに見える。せめてあの外部的の自由だけなりとも、戦争以前になりまた戦争がなくとも、政府がその壓迫してゐる民衆に對して與へるのを、何人も妨げはしなかつたのであるといふことを忘れてゐるのである。

人々は軍備撤廢を夢想してゐる。あたかも戦争によつてそれが將來せらるべきものの如くに考へてゐる。兄弟よ、それを信する勿れ！ 蓋し國民の軍備を撤廢する事は、現代の諸政府にとつては自己を亡ぼすこ

と同一義であるではないか。何故かと言ふに、これ等の諸政府は、わづかに國家的強壓のおかげで維持せられてゐるのであつて、自己の國民の自由なる信頼に頼つてゐるものではないからである。如何にして彼等が自己の唯一の支柱——兵士の銃剣を棄ててしまふことが出来ようぞ？！

人間が自己の内部を改造しない限り、また人間が、自己の近隣の者からそのパンを奪ひ、その所得を奪ひ、その勢力を奪うて、暴力によつて自己の實世間に於ける外部的状態を強固にしようとする動物的欲望を根絶しない限り、軍備撤廢はあり得ないし、戦争は止むことはないであらう。吾等の敵は——ドイツ人でなく、またドイツ人にとつての敵はロシア人でもなければフランス人でもない。吾等凡ての共通の敵は、たとひ吾等が如何なる國籍に屬するとも、所詮吾等自身のうちにある獸である。

己が虚偽の科學を以て、外的の文化を以て、またその機械的の文明を以て狂喜せる、測るべからざるほどに傲慢なる二十世紀の人々が、遽に自己の發達の眞の程度を暴露するに至つた現在に於いての如く、この眞理のかくも明かに確證せられた事は未だ嘗てなかつたのである。その發達の眞の程度は、アティル、ヤ成吉思汗の時代に於いて吾等の祖先が立つてゐた程度より高くはないことが分つたのである。

キリストの教への二千年が、人間にとつて殆ど無痕跡で過ぎて來たといふことを認めるのは、限りなくいたましい。しかし、現在、磔刑にせられたキリストの像を現はした十字架で十字を切つてやつて、殺人に赴く人々を濟神の至りにも祝福する、凡ての教會の教牧者によつて、キリスト教は根柢から變性せしめられ、その高さから引きおろされ、その大いなる、人の魂をやほらげる、生きた力を喪失せしめられてゐるのであるから、そんなこともその咎であると思はれる。

反省せよや兄弟なる人々、反省せよ神の子等！ 眼前の事象の妖夢の如き恐ろしさに悩み戦ける己が心の奥底から、君たちに向つて敢て言ふ、君たちが兄弟であることを想ひ起せよ！ 互に手をさしのべよ！ 神の地上には、平和な兄弟らしい生活のために、平和な愛ある發達のために、凡ての人々の居るべきところが見出だされるであらう。

吾等に——ロシア人にも、フランス人にも、ドイツ人にも、セルビヤ人にも、イギリス人にも、日本人にも、また心にキリストの像を蔵する凡ての人々に向つて言はれたる、キリストの神々しく神聖なる訓戒を想起せよ、「われ新らしき教へを興へん、人々互に相愛せよ。汝に近きものを愛し汝の敵を憎めと言はれたるは汝等聽けり。われは汝等に言ふ、汝等の敵を愛せよ、汝等を呪ふものを祝福せよ、汝等を憎むものに恵みを興へよ、また汝等を辱しめ、汝等を追ふもののために祈れよ」

吾等はこの公開書に署名するに際して、吾等の心と智とは戦争、殺人及び一切の暴力の味方ではなく、すべての人々に對する愛のキリストの教へに仕へ、「殺す勿れ」といふ神の教へに忠實なるところに存する永遠の正義眞理の味方であることを宣言する。

ヤースナヤ・ポリャーナ。千九百十四年九月二十八日

トレグーポフはこの全文を聴き終つて泣いた。二人は相擁して接吻した。

トレグーポフはこのことを以て天啓であるとし、トルストイ墓碑の祈禱のたまものであると言つた。ブルガーコフの言つてゐるやうに、トレグーポフには少しさういふ宗教家臭いところが平生からあつたのである。トレグーポフはこの檄を凡ての同志に知らせねばならぬと言つた。それはトルストイの墓碑で生れた、あ

たかもトルストイが永遠の安住の地からの聲の如くひろくこれを傳へねばならぬと言つた。

かやうにしてこの檄は作られた。そこには戦争に關する道德的評價はあるが實際上の行動に關する何等の示唆煽動の意は含まれてゐなかつた。ブルガーコフはやがてそれをタイプライターによつて十枚か十五枚ほど刷つた。そしてそれを封筒に入れ普通郵便として同志の人々に發送し、人々の署名を求めた。中にはヤースナヤ・ポリャーナで署名したものもあつた。それには最初にブルガーコフがあり、次ぎにトレグーポフがあり、六人目にトルストイの醫師マコーキツキーがあり、十三人目にセルゲイ・ポポフがあり、十四人目にベズバローフ、十五人目にブリネル、最後の三十八人目がチェハーリスキーになつてゐる。

それが何の目的で人々の署名を求めたか、何のために人々は署名したか、この問題に對する答へは、やがてまた、この檄によつてトルストイ教徒が何等か實際上の目的を成就しようとしたか否か、これによつて思想を異にする人々に對する抗議を起さしめようと企てたか否かといふ問題に對する答へであらねばならぬ。そもそもまたトルストイ教徒は、これによつて民衆一般を動かさうとしたか否か、問題は結局そこまで來なければならぬ。

これ等の問題に對して、トルストイ教徒の答へは全然否定である。彼等はこの檄を同志の間に配布することによつて、單にその當時に於ける最も重大な事象の一つ、即ち戦争に對する自分たちの、また自分たちの同志の人々の主觀的態度を明白にして置かうとしたものに過ぎないのであると言ふ。ブルガーコフ君が同志の署名を求めたのは、自由宗教の思想によつて結合するこれ等の凡ての人々の間に共通な信仰を、集合的に且つ公開的に告白しようとしたものに外ならないのであると言ふ。

即ちこれによつて、「實世間の惡」を拒否する自己の、また自己に親近な人々の良心を一層強固なものにしようとしたのに外ならないのであるといふ。

即ちこの檄は最初からひろく一般に配布したり實際上の煽動的な目的を以て作られたものではなかつた。少数の人々が親しく會つて座談の上で話したことを、一定の範圍の友人知人に封書して送つたものである。しかし、それには「自分もまた君と同じやうに、この恐ろしい試煉の面前に立つて固く信ずるものである」といふ意味を付け加へる必要があつたのである。即ち署名の必要はそこに在つたのであるといふ。

尤も、一時トルストイ教徒のある人々が、自分等の言葉を外部に向つて、世間の人々に向つて、全世界に向つて發することを欲した時であつた。彼等はスキツルのジュネヅ湖畔に子供等をつれて住んでゐるピリユコフの力で、それを印刷に附さうとした。ピリユコフは、あの大小二種のトルストイ傳の著者として知られてゐる人で、前のニージュニー・ノヅゴロドの副知事の兄弟に當つてゐる。即ちこの人によつて、凡てのロシアのトルストイ教徒の署名ある檄を、凡ての交戦國及び中立國の國語に翻譯して印刷しようと思つた事もあつた。かやうにしてこれを世界の各國に弘めようとしたことはあつた。しかしこの計畫は中止せられ、やはりトルストイの教へに關係のあるもの、もしくはヤースナヤ・ポリャーナに關係のあるものだけで、ただ自分たちの良心に懇へるといふことになつたのであつた。

トルストイ教徒の事件に關聯して、今一つ別の檄がある。それは「親愛なる兄弟姉妹よ」と題するもので、これに關係のあるものはトルストイ教徒の中でも最も興味のある代表的な人物である。

千九百十四年の十月二十四日、ツラ市の近郊ミハイロフカといふ村の鐵道工場の近くに勞働者の一群が

集つて、その外圍ひの上に紙で留めてある、タイプライター刷りの檄文やうのものを聲を立てて讀み上げてゐた。それにはこんなことが書いてあつた——

親愛なる兄弟及び姉妹よ！

吾等に共通なる靈は、神の靈は、吾等を目ざまして諸君に敢て言はしめる。自からを省みよ、熟考せよ、恐るべき罪深き生活から目ざめよ、暴壓と殺人とは許されてあり、或はそれが善事でさへあるかのごとく思ふ恐ろしい虚偽の信仰から目ざめよ。恐ろしき戦争の妖夢から目ざめよ。世界の凡ての人々は——兄弟であり姉妹であつて——凡てに生命を與ふるかの最高の力の現はれである。その力なくば何ものもないであらう。神の靈は凡ての人々に於いて一つである——戦争を拒絶せよ。互に相憫れんで殺すなかれ。諸君が敵と呼ぶところのものは、——かの神なる父の子等であり、諸君の神の兄弟である。吾等がまことの敵は吾等自身のうちにある、——それは罪惡であり、誘惑であり、迷信であり、暴壓と殺人とが神によつて許されてあるとする虚偽の信仰である。神なる精靈は——吾等の眞の父である。——身うちと他人とに分つ勿れ。凡ての人々は肉親であり、凡ての人々のうちに唯一の明るき喜びがある。神の靈は——愛である。自からを省みよ、親愛なる兄弟及び姉妹よ、恐るべき暴壓の掟を、戦争の掟を拒絶せよ、諸君の魂の眞の掟によつて、神の掟——即ち愛によつて信じ且つ生きよ。互に相愛せよ。すべての人々のうちに一つの魂がある。

諸君の兄弟、セルゲイ・ポポフ。ワシリー・ベズバロフ。レフ・プリネル。

ツラ市から十キロルスト（約二里半）なるフメレヲエ村にて。千九百十四年十月二十三日。

それを聞いて、「そんな奴は牢へたたき込んでしまへ！」などといふ聲も聞えた。丁度その時そこから靜に立ち離れて行つた若い一人の農夫がゐた。ラーブチといふ白樺の皮を編んで作つた靴を履き、粗い麻布の脛巻きを巻いてゐるところは、型の如き農夫で、髯は明るい色で、髪は長く、ダブダブの長い上シャツを着てゐた。その群集の中に、工場の監督のシリングといふ男もゐた。彼はその微文を読んでしまふと、「おい、みんなおれについて来い、こいつは大だぞ！」と云ふが早いか、その立ち去らうとしてゐた若い農夫に躍りかかつて、傍にゐた兵士たちの加勢で、その農夫を捕へた。年若い農夫は逃げようともせねば、抵抗もせず、落ち着いた様子でおとなしくシリングの手に捕へられ、そこから更に警察へつれて行かれた。その途中でその農夫は、自分がセルゲイ・ポポーフといふものであること、ツーラの町でも數箇所同じ微文を貼り附けたことを打ちあげた。實際その日の朝、ツーラの町のところどころの郵便や電信柱などに、十枚ばかりも同じ微文を貼りつけてあつた。凡てその内容は同一で、どれも皆タイプライターで書いてあつた。署名人も、その下にフメレエ村の住所まで書き添へてあるのも、すべて皆同じであつた。この微の筆者が公然自分の住所氏名を明記してゐる點などは全く從來の慣習を無視したものであり、陰謀的なやり方でないことを證明するに足るものであつた。そこでこの事件を何と見るかといふことが警察や憲兵隊の問題となつた。果たして反政府的革命的の事件であるか否かが問題となつた。その文面にはただ一定の自己の所信を述べてあるばかりで、何等煽動の意もなく、群集を實行に誘ふ意味もない、殊に住所氏名を明記してある點は、犯罪人が自分の名刺を即刻警察へ送つたやうなものである。一體この三人の署名者は何ものであらうか、一種の宗教狂か良心の勇者か、但しは單にぶらぶらしいといふ人間なのか、ただ物ずきな奇矯の青年に過ぎないのか、それ

とも自己の信念を確守する反國教徒か。これ等の疑問に對してモスクワの新聞「ルースコエ・スローフ」の記者はこの三人の身の上を説いてゐる。

落ち着いた様子で、かくれも逃げもせずこの微を貼つて廻つたのはセルゲイ・ポポーフである。この微の筆者も亦彼である。その微を彼の頼みによつてタイプライターで刷つてやつたのは、前に掲げた第一の微の筆者ブルガーコフである。

セルゲイ・ポポーフの外部生活は極端な單純生活に達してゐる。彼はもとベトログラードの相當資産ある商人の子で、彼の叔父はある地方の裁判所長であつた。彼はベトログラードのあるギムナーシヤの七年級の生徒であつた頃からトルストイの思想に感化せられ、今までの生活を悉く捨て、家を去つて全く家無き遍歴者となつた。彼はその遍歴中度々捕へられたりなどして、両親の家庭にさまざまの心配と苦勞とをかけたが、やがて家庭の方でも彼のことは諦めるやうになつた。遍歴が彼の人生觀の根柢となつた。彼はひろく全ロシアを遍歴した隠者のやうな修道僧のやうな生活をも送つた。カフカズにもゐた、クリミヤの荒原を放浪したこともあつた、ウラルの方へも行つた、またアルガ沿岸地方の反國教徒のところへも行つた。彼は一切の外的制度を認めず、ロシアでは國內旅行に於いても何人も所有すべき旅行券をさへ、彼はどうしても持たうとしない。そのために彼は度々捕へられてベトログラードの両親の許へ護送せられたりしたのである。またその地方地方の彼の同志の友人が彼のために保證して放免せられたやうなことも度々であつた。彼の内心生活は到底外部の周囲の事情と調和しない。普通の習慣や拘束でない彼獨得の道德律がある。警察などで彼を訊問するときにも、

—お前は何者か？と言ふと、彼の答へはかうである。

—神の子。

—何縣の者か？

—あなたは縣などといふことを言はれますが、そんなものは自分を欺いてゐる空中樓閣ちやありませんか。縣などといふものはありません。ただ、神の世界があるばかりです。そして神の世界は——神の家です。

—お前の名は何といふか？

—セリョージャ・ポポーフ、君の兄弟。

大抵こんなやうな風である。

彼の眞にキリスト教徒らしい親切さとやさしさとで、警官の心さへ和らげられ動かされるといふ。ある時も一人の巡査が彼を殴つたが、彼の言ふことを聴くともなく聴いてゐるうちに、つい殴る手をゆるめて、この善良な遍歴者の手に少しばかりの錢を恵んでやつた。しかしポポーフは元來金錢を否定し、決してそれを身につけないので、その錢は巡査に返した。彼は監獄や拘留所へ入れられたことも度々であるが、いつでも直ぐ出してくれた。ツイーラの町では彼のことなら誰でも知つてゐた。彼がこの事件でツイーラの監獄にゐた間に、彼は今までより更に人々に知られ且つ愛せられるやうにさへなつた。彼はいつも帽子も何も被らないで農夫のやうな様子をしてゐる。彼の眼はやや灰色がかつた空色で、澄んだ、深みのある、善良な眼である。彼は最初ツイーラの町の近傍の村々を歩いてゐたが、やがて或るトルストイ教徒の農家に近く、フメレエ村

の近くに自分で穴を掘つて、穴居を始めた。そして一切の地上の文明の要素を生活から取り除けようとした。自分の着てゐるダブダブのシャツも自分で麻糸で編んだ。それが嬉しくてたまらないで、彼は人に向つて、「いいだらう、これなら百姓さへ羨ましがらないからな」などと言つた。彼は百姓たちのところへ農事の手傳ひに頼まれて行く。また彼は井戸掘りが上手で、神の水を農民に與へる善事として特に喜んでそれをやつた。畑作りに雇はれて行つた時は小屋に住んで麥藁の上で寝た。努力の代としてはパンとか馬鈴薯とか薪とかを貰つて錢は取らない。百姓たちは彼を愛して、非常にやさしくいたはる。そして「あの人を怒らすのは罪だ」といふ。ポポーフの働きを百姓たちは有り難がつて、深くその點で彼を尊敬してゐる。ポポーフは菜食主義者で、卵も牛乳も取らない。ただ野菜ばかり食つてゐる。動物に對する愛は彼の人生觀の特殊の信條になつてゐる。畑を耕すにも馬は使はない、それは罪なことだと言つて悉く自分で耕す。彼はまた蜂蜜をも食はない。それを取るときによく蜂を殺すことがあるからである。しかし何よりも理想は遍歴である。神の世界を歩いてそこに住む凡てのものとともに喜ぶことである。彼はよく「神は凡ての中にある、神は人間の魂に在る」といふ。彼が片時も手放さない書物は、トルストイが晩年特に民衆のために編纂した「人生の路」といふ小冊子である。

彼はやさしい親切なところとともに、自分の信念を護るための強固な意志と剛毅な精神とを有してゐる。監獄で彼はその長官の前にも起立することを拒んだ。ある時監獄の長官が何かの命令を彼に與へて、「自分はこここの長官だ」と言つた。すると彼は、

—神の外に私には長官などはない、君と私とはともに神の子である。と言つた。彼は誰にでも親愛の意



を現はす二人稱のトッィといふ言葉を用ひる。またあるときその同じ長官に向つて、監房に坐つたままと言つた、

——ねえ君、お役をやめたまへ、罪の深いよくないことだ。私たちをみんな出しておくれ。生きた人間をここに留めて置くなんてよくないことだ。見たまへ、世界はどんなに美しく自由だらう……

ある時獄司の命令に従はないことがあつて、ポポーフを暗い地下室にやることになつた。彼はそれを拒んだ。皆で彼を抱き上げて連れて行つた。連れて行かれながら彼はいつものやさしい聲で、

——君等の役目をやめるといいのに、——だつて君等は人に暴壓を加へてゐるぢやないか！と言つた。

このセリョージャ・ポポーフ(セリョージャはセルガイを愛撫して呼ぶ名)はトルストイ教徒の中でも格別目立つ人である。彼は深い感情を持つてゐる、しかしやや少し變なところのある人間だと思はれてゐる。彼が自分の書いた微文を町中へ貼つたりしたことは、トルストイ教徒のうちでも殆ど何人も是認しなかつたといふ。

今一人の署名人のレフ・ブリネルは、その頃いつもポポーフと一緒にゐて、穴居をもとにしてゐた。ブリネルは猶太人で、猶太教の固い信仰のある家庭に成長した青年であるが、その頃から三年程前にヤースナヤ・ポリャーナへ来て、ポポーフと仲よしになり、そのまま彼と一緒に暮すやうになつたのである。瘠せて、いかにも猶太型らしい顔をしてゐて、眼鏡をかけてゐる。典型的に猶太人のゲットーに生れ育つた兒だといふ感じのするところを持つてゐる。偏癩らしい、弱々しい、狂熱的な理想家で、どこか幼稚で滑稽なところがある。彼はかつてチュルニーゴフスカヤ縣の猶太人部落の猶太人學校で學んで、古代猶太語を立派に知つ

てゐる。彼はトルストイ教徒と相知るに及んで、一切の猶太の教へを捨て、家庭を出でて、トルストイの教へに従つて苦しい農民の勤勞に身を投じた。瘦せ凹んだ胸で苦しく息づきながら彼はポポーフと共にこのツィラの地方の農民のために土地を耕したり井戸を掘つたりして倦まず働いて、パンと馬鈴薯とを貰ふ。農民たちは彼のことを「レフ兄き」と呼び、何だか遠慮あるやうなやさしさと、親しげな興味とを以て彼に對してゐる、勿論彼が平生一般に嫌はれてゐる猶太人であることを農民は知つてゐる。

署名者のうちの一人は、ワシーリー・ペスバローフといふ農夫である。彼がこの機に署名したのは偶然のことからで、ポポーフに逢ひにツィラの町へ出て来て、その機を讀んで、結構だといふので署名したのである。それから平生深く愛してゐるセルガイと一緒にそれを貼りつけに出かけて行つた。彼は前に役場の書記をしたこともあるが、自分の良心の命ずるままにその職を捨てて専ら土地を耕すことに従事した。彼は哲學や文學の方面に就いて廣い知識を持つてをり、非常によく本を讀んでもの分つてゐる男である。彼は眞面目な、心の据つた、聰明な、寡黙な農夫で、年はその頃三十六歳であつた。彼は一時は詩人ドロリュイボフに私淑し沈黙を以て自己の信條の最も重要なものと考へた位である。しかし彼がトルストイ教徒と交り、殊に、魂の聲を以て歌ふことを必要とし、世界の讚美は神の家を讚美することであるとするとするポポーフと親しくなつてからは大分變つた。

「ルースコエ・スローフ」の記者がトルストイ教徒の一人に向つて、何故署名をすることを必要であるかと考へたかと尋ねたのに對して、その人は驚いたやうな顔をして、

——吾々は正直でありたいと思つたのです、吾々の考へてゐることを人にも告げたいと思つたのです。…

：虚偽の名稱の下に團體や黨派が隠れてゐるのを見のがすことが出来るものでせうか。吾々には黨派もなく、組合もなく、組織もない、しかし吾々の信念の告白は何人の名前かで現はれねばならない。吾々は正直でありたいので、偽ることは出来ないのです。と言つた。記者は、附け加へて、この事件——極めて簡單なこの事件の全體を通じて、赤い糸のやうに一貫してゐる心持ちはこれであらうと言つてゐる。

この事件は、言ふまでもなく、それがトルストイ教徒と名乗る人々によつて惹き起されたものであつたが故に、トルストイの名及び彼の思想と結びつけて、ひろく社會の注意を集めるに至つた。随つてこの事件に對する世評は、自のづから一面これに直接關係した人々の人物性行の批評ともなつたのであるが、主としてトルストイ自身の思想に對する批評となつた。而してその批評の主要なるものが、殆ど悉くトルストイの思想及びその一派の教徒の思想傾向に對する非難であつたといふ事實は、それが戦時であつたからといふやうな表面の事情などには拘泥することなしに、ロシア思想界の事象として、頗る暗示に富んでゐると思はれる。この文章ではその點にまでは互らさず、それ等の思想的背景の濃厚な事象に就いての研究は、すべてこれを他の折に譲つて、ただ一二の主要なる批評の要旨を紹介して置くことにしよう。

私の手許にある材料のうちから、この事件に關してトルストイの思想を非難した主要なるものを取り出して見ると、一つはモスクワの新聞「ウートロ・ロッシイ」に掲げられたニコライ・ウストリヤロフの批評であり、今一つはベトログラードの新聞「ビルジュウイヤ・ウエードモスチ」に掲げられたニコライ・ベルデイヤエフの批評である。この二つの批評は、その筆者が何れも思想問題の批評家として名を知られた人であるばかりでなく、その假借なき批評そのものの中に幾多の問題を含んでゐる點で、可なり興味のあるものと見られる。

と見られる。

ウストリヤロフの言ふところによると、——惡の中に横はつてゐる世間に於いて、天上の高き眞理の光に包まれた人を見ることがある。この眞理の前に彼等は一切を忘れて全生命を捧げる。完き善の中に生きようとして一切の妥協を許さない。制限をゆるさない。これ等の人は或はすぐれた現世の裝飾であらうが、時にはそれがあまりに極端に趨り、あまりに鋭く現世に反抗することとなる。しかも彼等は現世を去れるものではない。彼等はずまり地上の現世の眞と掟との前に罪を犯すことになる。彼等は生命の秩序と究極の理想の絶對的純正との二つを自己のうちに共存せしめることが出来ない。トルストイの晩年はかくの如くであつた。彼が得た信仰の中に生きた晩年はかくの如くであつた。彼には疑ふべからざる神の眞理が現はれ、その光明は彼の全身に透徹し、彼は地上の生活の相對的眞理を理解し評價する可能を失つた。それはただ偽とのみ見えた。彼はそれを絶對善の名によつて偽となした。彼は死しても彼の教へは残つた。トルストイ教徒も國家の問題に接觸した。この世界の大仕掛の惡がその魂の悩みを刺激した。彼等は沈黙してゐられなかつた。彼等は全世界に向つてキリストを想ひ起せよとさげざるを得なかつた。この魂の叫びは、彼等自ら言へる如く蚊の鳴く聲に過ぎなかつたであらうが、とにかく興奮せる彼等の良心を和めた。彼等は一切の地上の誘惑を抑へて、天上の眞、キリストの命に身を託さうとした。「己れの如く己れに近きものを愛せよ、己れを憎むものを愛し、己れを呪ふものを祝福せよ。」しかし、天上の眞理を遽かに強ひて地上に實現しようとすることは、自然な道德的客觀的な生きた具體現に於いて眞理そのものを破壊することとなることがある。凡そ天上の人々は偉大なる勇者であつて聖者である、常に自己の時代の前に出で、自己の生活を以て地上の

掟を破る。彼等は時代の外に在り、民衆の外にある。時の相対的な掟、國家の掟などがこれ等の人々に對抗する時、人間の世には眞理が己れ自からと戦ふ思想界の大戦を出現する。勿論、眞理の究極の啓示に感激し、自からその啓示に従つて生活することの出来る力を身に帯びてゐるものは、斯の如きは即ち道徳上の天才乃至聖者と稱せらるべきである。しかも尙現世を征服するものは彼等でない。彼等の神聖さは、その莊嚴偉大を以てしてその異常の美を以てして、尙狭しとせねばならぬ。彼等は美的に且つ道徳的に人を魅する、しかし彼等は實際的に人を誘導することは出来ない。彼等は相対的の眞理を感ずることをしない。彼等の悲劇は、天上の完成を、地上の未完成の環境へ悉く將來しようとするところに在る。絶對の眞理に對する憧憬と、この眞理は唯天上に在りとする意識とを、自からの内に併せ有する具象的にして包全的な理想主義が、世界を征服する――

ベルディヤーエフの批評は、トルストイ教徒が法廷に立つて自己を辯護することが既に國家生活への關與であつて、トルストイ思想を裏切るものであるといふ點から出立してゐる。即ち彼の言ふところによると、トルストイは國家といかなる妥協をもするを欲せずとしたがしかも事實國家を認めざるを得ざる立ち場に在る。彼等が馬鈴薯を植ゑたり、自分のために貯へたり、鐵道旅行をしたりランプを點けたり書物を読んだりするとき、歩々の些末事悉く經濟や文明や國家などといふものの力が自分の生活の上に逼つてゐることを知らしめる。かくの如くにして國家乃至文明生活の圈内に落ち、責任の保證の中に引き入れられる。最も單純な生活の基礎も組織的國家的乃至社會的機關を豫想する。彼等も亦部分的斷片的ながら國家の權威を受用してゐる。彼等にはただ國家的意識國家の必要及び價値の意識を否定する力があるばかりである。しかも實際

には認容して意識で拒否するのは意識が弱いことを意味する。トルストイ教徒は國家に對する責任を負ふまいとし、自己を引き離して、國家の守護と奉仕とを必要としないが如き風をする。これは自己を欺くものであり、思想の弱く意識の無力なるに由來する。また彼等は、國家が單に外的なものでなくして、生活の内面的事實であること、國家が各人の中に在り、各人皆それを作れることを理解しようとしなす。國家の必要は吾等の内なる惡と關聯してゐるのである。――トルストイ教徒の國家に對する外的關係は、また惡に對する外的關係と關聯してゐる。トルストイ教徒は暴壓力のみ第一の惡とする。殊にそれを生理的物質的なものとしてのみ考へる。そこから卑小な術學的なわざとらしい道徳主義が生れる。暴力を用ひないといふので戰爭に参加しない、裁判に關係しない、肉食飲酒喫煙などもすべしといふことになる。しかも惡の性質は内的精神的で、外的物質的ではない。善はまた内的に見ねばならぬ。善の花は無抵抗に見るべからず、愛に見るべきである。否定消極に見るべからず、肯定積極に見るべきである。生理的暴壓を加へずして、惡魔であることが出来る。自然の秩序の中に生活するには必要な生理的暴壓を加へて、しかも聖者であることが出来る。トルストイ教徒は無抵抗主義者には佛教的傾向がある。その慈愛はキリスト教的でなくして佛教的であり、何か非人間的な、生活生存に敵對するものを含んでゐる。この點が殊にこの事件の主要人物セルゲイ・ボボーフに於いて感ぜられる。

ベルディヤーエフは更に續けて言ふ――トルストイの道は現世からの出離であつて、現世を變更し改造するために現世に來るものではない。トルストイ教徒は無抵抗の世界と抵抗の世界との間に何等の結合の道を認めない。明暗が截然と別になつてゐる。彼等のみひとり光明の國に生き、知識に生き、神の掟に生きる。

抵抗主義者は、凡ての非トルストイ主義者は、暗黒の國に生き、無識に生き、現世の掟に生きる。しかもまことは人各々の神の生活の掟を知り之を實現して行くことが出来るのである。トルストイ教徒は、惡の非合理的な祕密を感じないが故に、何人にとつても自家の主張を行ふことが極めて容易であると思つてゐる。彼等は神の國への展開の徑路、光明の國への歩みといふものを認めない。彼等にはその複雑な道程の困難がなく、ただ突然眞理を獲得して各人の新生活が始まるとする。眞實であるためには眞實を知らねば足る、而してこれを知るは容易であるとする。即ち純然たる合理主義が狂愚の極に達したものである。セルゲイ・ポポフの如き人は、謂はゆる「俗世間の人ではなく」、凡ての人を兄弟と呼ぶ。まことに狂愚な合理主義者ともいふべきである。聖者こそは、この世界に於けるすべてのものが、如何に暗い不合理な惡の元素によつて困難複雑なものとせられてゐるかを知つてゐる。ポポフはこれを知らず、また知らうともしない。彼にとつては全世界は透明で、世界の一切のものは容易に理性の法則に服従せしめられるやうに見えるのである。彼にとつて凡ての事がいかにも單純で容易であり、彼がこのコスモス（宇宙）を見ず、全宇宙の過程が彼にとつて誤解に過ぎないと見えるのは、所詮上に述べたところに由来するのではないか。……トルストイ思想の罪は、何よりも先づ抽象的徳主義的な、もしくは抽象的合理主義的な狭い意識の罪である。トルストイ教徒は、複雑多象にして相對的な領域のうちに現世的歴史的過程の流轉するものをば否定する、而して一直線的に、相對的な自然の秩序に絕對的なものを適應せしめようとする。その結果は、相對的なものを絶對化し、自然な、單純な、民衆的なものを神のもの如くに認めることとなる。しかしそれは意識の欺罔である。トルストイ的意識が惡魔の如くに恐れる暴壓力は、凡ての自然な單純な民衆的なものの中に存在してゐるのである。

ある。自然の生活の一切は、暴壓力、相互蠶食乃至相互消費の上に立つてゐるのである。暴壓強制がいつても文明から来るものであり、自然の生活と接近することがいつても無抵抗や暴壓強制を拒否することになつてゐると考へるなら、それは大いなる迷妄である。……もし文明から去つて自然の生活に還るとすれば、暴壓強制は單に一層加はつて来るばかりである。野蠻人の生活に於いては、暴壓強制が最大の程度に在る。トルストイ教徒が、文明の生活と比較してはるかに幸福なりとする農民の生活は、暴壓強制と不眞實とに充ちてゐるのである。この天然の世界に於いて、全然暴壓強制から自由であり、現世の惡の領域から脱してゐるやうな何等かの場所なり生活状態なりが存在してゐると思ふのは、所詮自己欺罔であり自己慰撫であるに過ぎない。トルストイの主張する生活の單純化は暴壓強制の自然生活の環境から人を救ひ出すものではない。暴壓強制に關與することから救はれて全然自由になるためにはこの自然の秩序を脱出して絶對の神の生活へ往く外はないのである。……トルストイ教徒の徳上の判斷の誤謬は、この現世の歴史的過程の保證から脱し、自己の責任を解除し、暗黒の中に投ぜられて現世の暴壓強制の下に生きてゐる人々の間に在つて、ひとり純粹にして正しき者たらんと欲するところに在る。あたかも最も僅少な生理的肉體的生活さへ既に暴壓強制であり乃至それに關與するものであるかの如く、この肉身に止まり物質の世界に生きながら、自己を引き離して自己の清淨を保留しようとするのは彼等である。彼等は現世を變更し改造しようとは思はない、それを内部から生かしめようとは思はない、また自己の眞理に他の人々を轉ぜしめようとは思はない、ただこの現世から自己を引き離し、自己の清淨さを際立たせ、國民的乃至世界的運命に關與することを拒絶しようと思つてゐる。而してこの意識を以て最高のもものと認めるわけには行かない、そこには犠牲がない。その意識

は世界の救ひに向けられてゐない。……トルストイ思想は到底広く社會民衆的運動とはなり得ない。トルストイ教徒の徴がただ自己のために書かれたものであつたとして法廷がこれを是認したその同一の理由によつて、道徳的宗教的の法廷は、トルストイ教徒があまりに自分自からの清淨さを保つことにのみ苦心し過ぎて、現世の事に無爲無抵抗である點を難すべきである。……ロシヤ魂の病患は専ら人生の道徳的評價に在る。一直接線的な道徳的評價の絶對的抽象的權威が、複雑にして變化自在な明敏な評價をもつて現實生活の秘密な運りに臨むべき場合に於いて、殊更吾等の力を殺ぎ、新生活創造の自由を妨げるのである。トルストイ思想もまた、直線に沿うて一點をのみ見得る直線的道徳的思想の精神の發露に外ならない。この精神はロシヤのインテリゲンツィヤのさまざまの社會思想に表現せられてゐる。戦争の悲劇は、單純生活にのみ適應すべき一切の道徳思想を一掃し、直線的道徳思想に於ける道徳上の不眞實を暴露する、しかして最高の道徳上の啓示は、自己の魂を亡ぼすものこそ自己の魂を救ふであらうといふ福音書の眞理である。……

トルストイその人によつて説かれたトルストイの眞理と、トルストイ教徒によつて説かれるところのものとは、さまざまの意味で別である。この點についても批評があるべきであらう。上に述べたトルストイ教徒事件とその世評の一斑とは、たまたまトルストイの思想を中心として人にさまざまの問題を提出する。しかし、最初に斷つて置いた通り、それ等の考察研究はここには一切しないで、さしあたり材料の紹介にとどめて置く。

### トルストイと死の豫感

トルストイの秘書であつたゲーセフの「トルストイとの二箇年」といふ書物にはトルストイの生活、思想に關して興味ある、暗示にとめる断片的な事實が誌してある。この書物で所謂二箇年は千九百七年の秋から千九百九年の八月に互つてゐる。ゲーセフは毎日トルストイの側にゐて自ら聞いたところの談片を悉く自分の手帳にしるしておいた。或る時はその記録は非常に長い一條の物語であり、また、時にはほんの數語にすぎないやうなこともあつた。

この二年の間にトルストイの考へにしばしば浮かんだのは死といふことであつた。トルストイは度々病氣にもかかつた。意識が混亂して何だか一切のことを忘れてしまつたやうにみえることもあつた。もつともかういふことはいつでも極めて短かい間のことで、健康が恢復するとともに精神の力も再びもりかへしてきて、むしろ急激に充溢した力をもつて再びトルストイの内心は湧きたつやうにもみえた。しかしながらこれらの短かい衰弱の時期はトルストイの精神生活に痕跡をとどめずしては過ぎなかつた。彼は自分の肉體の生活が

すでにやうやく終りに近づきつつあることを益々明らかに感ずるやうになつた。時には最後の日がすでに己れを待つてゐることを固く信ずるやうにさへもなつた。

かやうにしてトルストイが近づきつつある死の豫感を感じたやうな時にはグーセフは殊に注意してトルストイの言行を記録した。その記録の中から時日の順序に従つて特色的なところを抄出してみよう。

千九百八年二月十三日

昨日朝食の時に(その時はトルストイと私——グーセフ——と二人だけであつた)レフ・ニコラエウィッチは私に「讀書の一周」(註、トルストイ自ら編纂した、一年の各日に古今の聖賢、文人たちの語録を振りあてたもの)の昨日の處を讀んだか、と言つてたづねた。そしてつけくはへて言つた。

「喜んで死ぬることが出来るやうな感じが殆どする。その可能であることを感じさへもする」

「讀書の一周」の昨日の分といふのはかういふ意味の文句であつた。——われわれの何人をも待つてゐるところのかの死よりも疑ふ餘地なきものはないけれども、やはりすべての人々はあたかも死といふものが存在しないかの如くに生活してゐる。

千九百八年四月十三日

夜分レフ・ニコラエウィッチはよく眠つた。朝いつものごとく散歩に行つた。散歩から歸つてきた時に私は家の表の扉のところまでトルストイに逢つた。そしてたづねた。

「御氣分は如何です」

「なあに、たいしたことはないが元氣がない。段々解體に近づけばかりだ。それはいい事だ。少しも悲し

むべきことではない。昨夜非常によく考へた。明るい氣持がする。」

食卓についてからトルストイは人々と朝の挨拶をして昨日のとほり客間の方に寄つて扉から左側の眩椅子にかけた。

「お父様、御氣分は如何です。」

と、アレキサンドラ・リヲヴナがたづねた。

「何ともない。頭はいいのだけれど、このやくざな體がいけない。この體がやくざなのは早く壞れてしまふためだ。」

千九百八年四月三十日

トルストイを訪ねてきた女教師にトルストイは自分のことをかう言つた。

「私は此の頃弱つたやうに思ひます。醫者が私を療治してくれます。私は妻の要求にしたがつて凡て醫者の命令を守つてゐます。それでお蔭で何もかも結構です——死期が近づいてゐるのです」

今朝レフ・ニコラエウィッチは意氣沮喪してみえた。朝食の時に、タチヤーナ・リヲヴナが「シュミットさんがたいへんお悪い」といふと、トルストイは、

「仕合せな人だ。やがて亡くなられるだらう。」と言つた。

千九百八年五月二十日

今日自分の勉強を終へてからトルストイは私を呼んで手紙の始末をさせた。

それがすむとトルストイは言った。

「私は今日死ぬるといふことは本當にいいことだといふことはつきり感じた。それは何かからのがれたいといふためではなく、ただその方がよいからである」さう言つて彼は優しい静かな微笑を浮べた。

千九百八年六月二日

トルストイはマコウイツキイ（トルストイ家の醫者で、トルストイの友人）に言った。

「いや、いくら君が心配をしてくれられても、やつぱり君は私を治療してしまふことはできません。有り難いことには段々私は弱つてゆく。旅立ちの用意をしなくてはならない」

千九百八年六月三日

晩方二三の人々と話してゐるうちにトルストイは言った。

「ほんとに、佛教徒が、老人は出家をしなければならぬといふのはそのとほりだ。少しエゴイスティックではあるがしかしその通りだ」

千九百八年六月十九日

夕方正餐の時にブルーイギンが自分の妹の死について話した。そして最後に「妹は丁度寝入るやうに死にました」と言つた。トルストイはそれを聞いて「私はこのことを考へれば考へるほどはつきりとわかるが、死は夢ではなくて目覚めることである、もしその比較を用ひるなら。人間は死んで目覚めるのである」

千九百八年七月二日

昨夜トルストイは言つた。「チュルトコフは私の近所に家をもつさうだ。（ヤースナヤ・ポリャーナから

三露里の村に移り住まうとしてゐたことを指す）しかし私の住居はまもなく大變遠くなるのだが」

私はチュルトコフが、トルストイの方がチュルトコフよりも長生をするにちがひないといふことを度々言つたといふ話をした。トルストイはちよつと黙つてゐて、やがて言つた。「さうだ死のことを思ひ浮べるのは非常に大切なことだ。世間では何のために思ひ浮べるかといふが、何のためかと言へば、それによつてすべてのもが全くかはつた光を帯びてくるのだから」

千九百八年八月十一日

今朝トルストイは私を呼んで次のことを口授した。

「重く、痛い。近頃は絶えず熱があり、気分が悪い。やつともちこたへてゐる。きつと死ぬるのだ。死に對する關係は決して恐怖ではない、緊張した好奇心だ（かう言つてトルストイは泣いた）このことについてはしかしあとで、もしまにあふなら、つまらぬことではあるけれども、私の欲するところを、私の死後にしてもらひたいことを言つておきたい。第一に、相續者が私の書いたものを悉く一般の利用に任せるならば結構である。（ここでいふトルストイの著述は千八百八十一年一月一日までに書かれたもの）ことを意味するので、千八百八十一年以後の著述は千八百九十一年トルストイが新聞紙上に公表した如く、一般の翻刻を無條件で許してあつたのである）もしそれができなくとも、せめて必ず民衆のためのものだけは、即ちABC讀本と「讀書のための書物」とだけは。第二にこれはつまらないことの中のつまらないことではあるが、私の遺骸を葬るとき何等の儀式らしいことをしないやうに。木造の棺、さうして誰でもさうしたい人が崖の向側のザカズへ、即ち「緑の杖」の場所へ運んでくれるであらう。（かう言つてトルストイ

は泣いた) 少くとも他の場所ではなくその場所を選ぶ理由がある。(註、トルストイの少年時代に、トルストイの最も愛した兄ニコライが、ヤースヤナ・ポリャーナの林園のある場所に「緑の杖」が埋めてあつて、その杖は世界の萬人を平和に幸福に生活せしめる力をもつてゐると、幼少のトルストイに話したことがある。)

「こんな贅澤な境遇で生活するのは苦しい。私はこの中で一生涯を送つてきた。そして、この境遇で死ぬのはなほさら苦しい、いろいろな心くばり、醫者、一時の氣やすめ、恢復、そんなものは何もなりはしない、また必要もない、ただ精神状態をわるくするばかりだ。」

口授を終へてトルストイは言つた「これがすぐのやうな氣がする。もし今でなくとも二三日の後に。」トルストイがこんなに早く自分の死を豫期してゐるといふこと(その死は私にとつて非常に恐ろしい不意の打撃である)を聞いた私は驚き且つ興奮したが、彼の口授する間はともかく心をひきしめて忍んでゐた。しかし、その最後の言葉を書き終へた時、私はもはや我慢がしきれなくなつた。胸はせきあげるやうになり、涙はひとりで止めどなく流れた。私は彼に身を投げかけてその兩手を接吻した。トルストイもまた泣いた。しかし、自ら自分の涙を恥かしくおもつたかのやうにいそいで私に言つた。「これは悲しいからではなくて、私が見たいへん弱つてゐるので、何ごとでもつい泣かれるのだ……もういいからいらつしやい……君の愛を有り難く思ひます……もうあちらへおいでなさい……。」

私は彼の側を去つて自分の部屋に行つた。一時間ばかりもたつてトルストイはまた私を呼んだ。トルストイは「讀書の一周」を續けたいと言つた。私は必要な材料をもつてきた。今日の分にわりあてられた部分が

態のごとく死に關するものであつた。私は、いつものごとくその部分にあてられてあつた大體の思想をトルストイに讀みかかせた。しかし、この思想の内容は私の心をかき亂したことから心を轉ぜしめなかつたばかりでなく、さらにそのことを考へしめた。讀み始めてから、私は長い間唇をかんでゐた。そして泣きだすまいと思つてトルストイを見上げることをし得なかつた。「ほんとに、君はいけないね」と私を非難するといふよりは、無理もないといふやうに見ながらトルストイは言つた。ともかくどうかかうか自分を制して私は力のない聲で讀み始めた。非常に骨を折つて、やつとそれを續けて行つた。トルストイは注意して聞いてゐた。しかし、いつもよりも訂正や補遺することが少かつた。五時にトルストイは私を再び呼んだ。私が側にゆくとトルストイは言つた。「私たちが泣いたりしたことを君は恥かしがらなくともいい。それが私たちを親しくする」

千九百八年八月二十一日

今(朝十時)トルストイは目がさめると直ぐ私を呼んだ。私が側へゆくと、トルストイは言つた。「イヤ・ワシリエウイチを呼んで下さい。私は今日は體の工合がよくない。併し私には大變よい。私は死ぬる」晝間はトルストイは短かい手紙を私に口授して、それから次の一節を日記に誌さしめた。

「十二日から書かなかつた。健康はもとのとほり。是は前よりよいが、一體に前よりわるい、即ち死に近い。今朝、何等外部の原因なくして殊に強い、——口には言へないが、心持のよいしかし嚴肅な、喜ばしい感じ——死の恐怖が全くなくなつたばかりでなく、死との不一致も全くなくなつた感じを覺えた。非常にこれを喜ぶ。何故かといふにこの感じは偶然な、一時的なものでない。妨げられることなく經驗するこ



とができるものではないので、その感じは魂の底深くとどまるであらう。これは非常によいことだ。この感じは人間が自分の家から離れてゐるところにかへつて自分の眞の住家があり、何だか異様で親しみのないものと思つてゐるものが自分の本當の家であるといふことを、思ひもよらず自ら知つた時に経験するやうなその感じに似てゐる」

千九百九年一月十九日

昨晚、晩の茶のあとで用事があつて私がトルストイの處へ行つた時に、私の訊ねたことについて、トルストイは答へて言つた。「私は今日——君のゐない時に——不意に死を感じた。(私のやうな年になるとこれは自然なことだ)さうして何等の抵抗を感じなかつた。人が生活の無意味を悟つて早くこの世から去りたいと思ふ時によくあるやうに、死を欲するといふではないが全く平靜でいつでも死ねるやうな氣持であつた。こんなことは私は初めて経験した……。」

## トルストイと自然生活者

夜の蛾の光りにひきつけられるやうに實際現實の生活に満足しない人々が心の地をもとめて放浪の生活をつづける。

かやうな場所はこの地上に僅かしかあり得ない。したがつてそこへは多くの遍歴者が集まつてくる。トルストイの晩年に於けるヤースナヤ・ポリャーナはこの数少ない場所の一つであつた。世界の各地から心の安住をもとめる人々がいはりたちはりこの中央ロシアの寒村をおとづれた。

そのトルストイ訪問者の中には随分風がはりな人もあつた。これらの人々に關する思ひ出を書いたものも甚だ少くない。およそトルストイに關しては日常生活のきわめて微細なことまでも書きとどめられたものが非常に多くある。それらの大部分は勿論トルストイの崇拜者、教徒達の誌したものであるから、さほどにトルストイ自身を知るうへに重大でないものもあるけれども、しかしながら普通の傳記、トルストイの著述などから容易に知ることのできないトルストイの生活の事實に對して光りを投ずるものもある。ここにはそれ

らの材料の内からトルストイの一人の訪問者のことを紹介してみよう。

千九百一年から二年にかけてロシアの饑饉の際にトルストイの社会的活動を助けたウエリーチキナ女史の書いたものに依ると、トルストイ達の饑饉救済のために行つてゐたベギーチエフカへ突然現はれてきた一人の不思議な遍歴者があつた。ここにはそのウエリーチキナ女史の書いたものと、今一人のトルストイの助手であつたスコロホードの思ひ出の記等から、その不思議な遍歴者のことを紹介しよう。

ウエリーチキナが或る日何處からか用事をすましてかへつてきてみると、食堂の食卓の上に古い裂けたフェルトの中折帽があるのを見た。見なれない帽子であつたので彼女はだれの帽子だらうと思ひながらはひつてゆくとトルストイの方からにこにこして、「今日はおもしろいお客さんがありますよ」と言葉をかけた。

「誰方ですの」と言つてたづねると、「今にわかりますよ」

と言つてトルストイは答へなかつた。それから彼女は雑誌だの色々の書類などの置いてある別の部屋へはひつてゆくと、その部屋の床の上に誰だか知らない人の素足がぬつと出てゐた。この足が即ちトルストイの所謂おもしろいお客さんのものであつた。ぼろぼろのジャケツを着てゐる跣足の瘦せた背の低い七十歳ばかりの老人がむくむくと床の上から起きあがつてきた。その目は何だか異常な光りを放つてゐた。彼女自身の言葉によれば「如何にも風変わりな一癖ありさうな人だとはおもつたけれども何となく好ましくないやうな感じがした」と言つてゐる。

しかしトルストイ及びその他のそこにおあはせたトルストイ教徒の人々は殆どみなこの自然生活の主張者に對して非常な興味を感じたらしかつた。第一この老人が初めてそこにやつてきた時の様子といふものが全

く普通のものでなかつたのである。はじめに、「何處からきたのか」と言つてたづねると、老人は答へた。「廣いところから」また、「何處へ行くつもりか」と言つてたづねると、「廣いところへ」と言つた、それから、「今どこに住んでゐるか」と言つてたづねると、「此處に」と言つた。

それで人々は此の問答で満足するより外に仕方がなかつたのである。併しそれからその老人は自分の身の上をいくらかは話した。兎に角彼はその當時の警察が要求する居住許可證を所持してゐた。何故かといふに警察は「廣い處」といふやうな漠然とした説明を認めよう筈はなかつたから。その不思議な客の國籍は瑞典であつた。彼は久しい以前瑞典の非常に富める商人であつた。しかしながら自分の富の全然不正、不合理であることを了解するにいたつて一錢ものこらず、ことごとくこれを貧しき人々に、わけ與へてしまつた。そして、それ以來すでに三十年こんな風にして世界中を遍歴漂泊してゐるのであつた。彼は印度にもゐたことがあり支那にもゐたことがあり、また日本にもゐたことがある。そしてその東洋から今トルストイがゐる處にやつてきたのである。

スコロホードフの言ふところによると、この珍客はトルストイの思想を書物によつて知るやうになつて、自分の精神生活との近似を見出して、晩年の餘生をこのトルストイと相たづさへて働くことにおくるために遙々來たのであつた。自らの手で自分のパンを得なければならぬ。一切の動物の力をさへも強ひることなく、自らの手でパンを得なければならぬといふ年來の信念を實現するために遙々來たのであつた。

この瑞典人はトルストイに非常な感銘をあたへた。トルストイにとつては、自ら考へるところをそのままに十分に實現、實行してゐないことに對して、あたかもこの老人が良心の呵責を加へるかどき感銘をあ

たへた。トルストイはものに惹きつけられやすい青年のやうな心をもつて、この精神上の兄弟が彼にすすめるところのことを、即ち自らの手で、動物のたすけをさへからないうでパンを得るといふことを、春が来れば（その時は丁度冬であつた）始めるために、いろいろの心くばりをしはじめたのであつた。

その瑞典人は僅かばかりの土地に、馬鈴薯を植ゑることをした。弱い、瘦せた老人のことであるからその仕事はなかなか捗らなかつた。彼は或る時鋤をとつて手早く上手に働くトルストイ教徒を見てうらやましさを言つた。

「あの人は三人の妻と十人の子供を養ふこともできる」

この老人の自然哲學によると、三人の妻をもち、十人の子供をもつ事も、もしそれを養つてさへやれるなら、差支へないことであるらしかつた。ウェリチュキナの言ふところによるとこの老人の哲學のこの方面が少しトルストイをして厭に思はせたやうであつた。けれども、この老人の富める人々に對する、また不正、不合理な經濟組織に關する機智にとめる假借なき批評はこの老人とともに語る人々をして眞面目に興味をいだかしめるに足るものがあつた。

この老人は單に一切の家具を認めなかつたばかりでなく、殆ど着物をもみとめなかつた。彼自身の着てゐるぼろぼろの着物は或る程度までは、單に警察の面倒のないためのものにすぎなかつた。彼はしばしば蒲團の上掛けばかりをひつかけて、それにくるまつて坐つてゐることなどもあつた。しかし幸ひにそんなふうで食堂や客間に出てくることはなかつた。靴といふものはいつても履いたことはなかつた。寒い日には實際見てゐてもこの老人が氣の毒であつた。枕の代りに、彼は壁を頭にあてて寝た。彼のいふ處によれば枕は聽覺

を損ずるからであつた。

彼の食物は果物や、野菜や、粉をねりかためた生の堅パンのやうなものばかりであつた。その粉もごく軽くひいたものばかりに限つてゐた。牛乳は飲まないで水ばかりを飲んでゐた。朝食のあとで大きなサモワールが出た時にその老人は立ちあがつて豫言者のやうな態度でそのサモワールを指しながら非難するとき調子でいつた。

「諸君もまたこの偶像を禮拜してをられるか！ 私は支那人からの一つの使命を帯びてゐます。支那人は彼等のよき土地が到る處茶の栽培に占領せられて必要な麥をまくべきところのないのに苦しんでゐます。これらは畢竟茶に對する需要からきてゐることです。もし諸君が茶を飲用することによつて我等の同胞なる支那人のパンを奪ふことに參與するものであることを知るならば諸君は須く茶の飲用をやめなければなりません。」

この老人はいつでも英語で話をした。トルストイは困つたやうな顔をしてこの意味を英語から翻譯して人々にきかせた。そしてこの老人の言葉にしたがふことをすすめた。トルストイ自らも茶を飲むことをやめた。茶の代りに麥からとつたコーヒーを用ひた。そしてサモワールはかたづけられてしまつた。トルストイがその瑞典人に、「これはこの地方の産物であるから」

と言つてそのコーヒーをすすめた時に、老人はよく吹きさましてから飲んでみた。そして言つた。

「こんなにして麥を無駄にすることは罪なことだ」  
そしてそれからはもう飲まなかつた。

トルストイは全し困つてしまつた。そして段々に自分の質素な菜食をその瑞典人の言ふままに極端に質素にしていつた。その老人は或る時自己流に焼かないパンを作らうとしてかう言つた。

「種をなまのままで食べることが勿論なによりもいいことだ。」

しかし人間の弱さに譲歩するといふやうな意味でパンを焼くことだけは許した。自らパン粉をひいて水をまぜて妙な餅のやうなものを作つてそれをあぶつた。しかし勿論前にも言つたやうに牛乳は一切そのなかに入れなかつた。彼は平常自分の生みの母はもう亡くなつてゐるから、乳は飲まない、と言つてゐたのである。

食事の時にその手製の妙なパンのやうな、ねり餅のやうなものを皆に配つた。トルストイは平常から腹が弱かつたので、よくできた黒パンでさへもあまり腹にあはなかつたからゐであるのに、この老人の作つたパンを——よく焼けてゐない粉のよくまざつてゐない、ねり餅のやうなものを興に乗つて食べたのである。するとその翌朝からトルストイは腹がわるくなつたのであつた。持病の膽石のある上に非常な痛みが始まつた。そこに一緒に來てゐたトルストイの娘のマリーヤ・リヲヅナは非常に心配してウエリーチュキナが、その日どこかへ用事で出掛けようとするのを強ひてとめてうちに居らせた。段々痛みは激しくなつてトルストイは非常に苦痛を訴へ、呻きだした。

いろいろの手當もききめがなかつた。數時間にわたつてトルストイは呻きつづけてゐた。やつと夕方になつて痛みが鎮まり呻き聲がとまつてトルストイは眠つた。マリーヤ・リヲヅナはヤースナヤ・ポリャーナにゐた母に、即ちトルストイ夫人に電報をうつた。ウエリーチュキナが、「何故電報をお打ちになつたの」と

たづねた時に、マリーヤ・リヲヅナは

「こんな急激な痛みのくるときは父は急に亡くなるかも知れないからだ」と言つた。

翌朝トルストイが食堂に出てきた時には見ちがへるばかりに衰へやつれて見えた。急に瘦せこけて死人のやうに蒼ざめた顔をしてゐた。人々は我れ知らず足音も靜かに歩き、ひそひそ小聲で話したりなどした。それでも晩方には段々元氣を恢復して賑やかな談話が始まつた。不意に入口の階段でベルの音が聞えて人のひつてきたやうなものがきこえて、バルコンから客間にトルストイ夫人がはひつてきた。一同は俄かに靜まつて思はず見上げた。トルストイ夫人は非常に興奮してゐた。また立腹してゐるやうであつた。

「一體何事が起つたのか」

としきりにたづね始めた。當の瑞典人は丁度その時、むきだしの足をたてて床の上ですやすやと眠つてゐた。トルストイ夫人は忽ちそれを認めた。「そしてまたこの跳足は何です」

そこで一部一什が話された。そしてその跳足の客が紹介された。勿論トルストイ夫人はこの「穢い老人」を嫌つた。夫人は數日間そこに逗留して主婦らしい様子で萬事を指圖した。食卓の上には再び眞白なテーブル掛がかけられるやうになつた。食事も御馳走が多くなつた。

その近所の百姓達に、トルストイ夫人は渡り者の外國人がトルストイに變なものを食べさせたので非常な苦痛を與へたといふことを話した。それでその外國人(瑞典人)は反キリスト教徒だといふ噂が擴がつた。百姓達はトルストイにその瑞典人が毒を食べさせたと思つてしまつた。そしてその哀れな、半ば狂信者の老人に對して非常に不平、憎惡の感じを抱くやうになつた。農民の間にはかういふ噂さへ傳はるやうになつた

ト―その瑞典人は彼にその魂を渡す者を非常に少しばかりのパンで養ふことを約束する。

それからこの異様な遠來の客を何處へ向けて出發させようかといふことが問題になつた。けれども本人は、今どこへもゆきたくない、と言つた。そこでトルストイ夫人はトルストイの健康のためにひとまづヤースナヤ・ポリャーナにひきあげることにした。そしてトルストイ夫人は厭で仕方がなかつたのであるが、止むを得ずその遠來の客をヤースナヤ・ポリャーナに伴ふことになつたのである。

### トルストイの宗教的的人生觀

トルストイの名を知らない人は、多少文字のある人の間に殆どないと言つてもよいであらうが、トルストイの説いた宗教的社會觀人生觀の本旨は、いろいろに曲解せられ、誤解せられてゐる。トルストイが一切の文化文明の否定者であるといふ説、また彼が原始時代の生活への復歸を主張するものであり、勞働の原始的状態への復歸を主張するものであるといふ説の如きがそれである。尤もこれにはいろいろの理由もある。トルストイの所説が秩序的でなく、時を前後して説かれ、その間に變化があり、矛盾もあるところから、その間の眞意を捕捉することの比較的困難なことも、たしかに曲解誤解を招くに至つた一つの原因である。トルストイの宗教觀人生觀社會觀を説いた論文は、既に世に公けにせられてゐるものだけを見ても、百篇どころではない。しかもそのなかには随分の長篇も少くない。随つてこれ等の諸論文を涉獵して一つの明確な眞意

をつかむことは、容易なことではない。殊にトルストイの思想がその最後にいたるまで常に變化し、飛躍して行つたことを思へば、たとへばメレジュコフスキーの如き、シエストフの如き、またミハイロフスキーの如き批評家の所説も、トルストイの全約を傳へ得ないことになつてゐるのも、またやむを得ないと謂はねばならぬ。

トルストイの人生觀を紹介的に説いたものには、クロスビーのものが一般に知られてゐる。エルツバツヘルの『アナルヒズム』の中にも彼の無政府主義的的人生觀が説いてある。しかし、後者は肝腎のトルストイの宗教觀から切り離して説いてゐるところに重大な不備がある。トルストイの思想家としての特色の中心は、あくまでもその宗教的などころにあるからである。ロシアで出たものでは、ストラホフの書いた論文の他に、ティムコフスキーの『トルストイの魂』（一九一三年、モスクワ版）ブルガコフの『キリスト教倫理』（一九一七年、モスクワ版）などが最もよい。ここではこの後の二書などを手引きにして、トルストイの宗教的的人生觀を紹介する。

人は生れて、先づ自己に近き周囲の人々の有する法則や人生觀に導かれる。たとひ無意識でも、自己の行動を一定の人生觀——少くとも自己の生活の意義ともいふべきものと一致せしめる。しかし成長するにつれて、人は漸くその人生の意義に就いて考へを異にして来る。小兒の人生觀と大人のとは違つて来る。〔新人生觀についての考察〕。自然に受け入れられ、外から與へられてゐた信仰は、知識と経験とで漸く薄らいで来る。そこで、自分では少年時代からの信仰がもとのままにあるとおもひながら、その實とくにそのあとかたもなくなくなつてゐるやうなことが少くないのである。かういふ時機には、わづかな、偶然の一語が、舊來の、

既に實力なき信仰を一掃してしまふ事になる。〔懺悔〕。かくの如くにして、人はその理性の力によつて虚偽の力なき教へを排し、現實の生活の直中に在つて、その意義を探求しようとするやうになる。〔人生論〕。眞の人生の意義は何であるか。人生とはそもそも何であるかと訊ねるやうになる。昔から、生命の起源に就いては二つの見かたが知られてゐる。靈的的人生觀と物的的人生觀とがそれである。この二つの立ち場の争ひは今も尙續いてゐる。それはこれ等の見解の目的が逸せられて論ぜられてゐるからである。人生そのもの、吾等が快苦喜樂を實感しつゝある人生そのものに就いてではなく、物質的法則によつて偶然發生したものとしたり、或は、それみづから不可思議な原因を蔵するものとしての人生に就いてのみ論じてゐるからである。人生を如實の、苦みと歡びとの意識として、幸福への努力として論じてゐないからである。或はこれをもつて、死に反する作用の集積だと言ひ、一定の期間に有機體のうちに變化するところの現象の總和であると言ひ、或は普遍にして間斷なき分解と結合との二重の経過であるといひ、或は一定の順序による種々の變化の一定の總合であるといひ、或は活動するところの有機體であるといひ、或はまた内面と外面との攝合であると言ひたりする。要するにこれをただ経過と見たり、現象と見たりして、吾々が常に人生といふみじかい言葉で實感的に經驗するところを端的にあらはしてゐない。吾等が人生といふときに、それは又でもなんでもない、凡ての人々が自分の全身で、分つべからざる全き己れの身を以て自分の内からのみ知つてゐるところのものである。悪から善への努力としてしか考へることの出来ない人生は、善も惡もないこの世界の中に生起してゐる。人生といふものの理解の中心はそこで人間の個々の生活の中にあつまつて来る。凡ての人々は自分の幸福のために生きてゐる。人が自分に善かれと願ふ心を感じなかつたら、その人は自から生きてゐるとは感

しない。自分に善かれと願ふ心持のない人生といふものは考へられない。生きるといふことは、凡ての人々にとつて、幸福を願ひこれを得るといふことと同じである。幸福を願ひこれを得るといふことは、即ち生きるといふことである。即ち人生とは、満足や苦痛の感じの伴ふところの、幸福への努力に他ならない。(「人生論」)

人は人生を自己の個人生活に於いてのみ感ずる。それだから、人は初め自分の願ふ幸福はただ自分一個の幸福であるかのやうに思ふ。初めは自分だけ本當に生きてゐるやうに思ふ。他のものの生活は、自分のと同じではなく、ただ自分の生活に似てゐるものとして考へられる。観察によつて他のものも亦生きてゐると知る。他の生存に就いて考へる氣になるときに、人は他人の生活に就いて知るやうになる。しかし自分のことは、一刹那も自分が生きてゐることを忘れたり出来ぬ。それだから本當の生活といふものを、人はただ自分自身の生活によつてのみ知つてゐる。周囲の人々の生活は、ただ自分の生存の「條件」としか考へられない。もし人が他人に對して悪を願はないとすれば、それはただ他人の苦みを見るのが自分の幸福を破るからである。もし人が他人に善を願ふとすれば、それは自分に善を願ふのと全く同じではない、その善を願ふ他人によからんがためではなくて、ただ他人の幸福が自分の幸福を増大してくれるためである。人にとつて、自分のものとして感ずる生活に於ける幸福、即ち自分の幸福だけが重要であり必要である。かやうにして自分自身の幸福を求めて、人はその幸福が他の生存に依存することを認めるやうになる。それは他の人々も、動物でも、自分と同じやうに生活を感じ考へてゐるといふことを知るに至るからである。凡てのものは、皆ただ自分の生活自分の幸福のみを感じ、皆ただ自分の生活をのみ大切とも思ひ本當のものとも思ひ、他の生

活はすべてただ自分の幸福のための手段だと考へてゐる。人はまた、生ける一切のものが、自分自身をも含めて、自己の小さな幸福のために、凡ての他人の大きな幸福や生命までも、また自分自身のそれをさへも、奪はなければならないことを知るに至る。自分個人の幸福の中にのみ生活といふものを理解してゐる人が、その個人的幸福を容易に得がたいばかりか、それを奪はれがちだといふことを知るに至る。人は長く生きてゐればゐる程、経験によつてこの事を確かめるやうになる。そればかりか、人はたとひ自分の生命に危険を感ずることなしに、他人と争つて打ち勝つことの出来る有利な事情の下に在つてさへ、理性と経験とは、やがて人にかういふことを教へるであらう。——即ち、個人の快樂といふ形で彼が人生から捕獲したそれ等の幸福は、眞の幸福ではなく、ほんの幸福の型のやうなものに過ぎず、それによつて彼が、快樂と常に關聯してゐるところの苦痛をば、一層まさまさと感ずることの出来るために與へられたものに過ぎなかつたといふことを。人が長く生きれば生きるほど、快樂は益々少くなり、退屈、飽滿、勤勞、苦痛は益々多くなるといふことを一層明らかに知るであらう。そればかりか、自分の力が弱り病み始めるとともに、他人の病や老衰や死を見るにつけ、その中に唯一の眞の生活を感じて來た自分の生存そのものが、刻々に、身動きをする毎に、弱り、衰へ、死に近づいて行くことを認めざるを得なくなる。また、自己の生命が、自分と争ふところの他の生命から受ける無数の偶然の破滅や、刻々にまさり行く苦痛の前に露出せられてゐるばかりでなく、その生命の本質上、單に死への、——即ち個人の生命とともに明らかにあらゆる個人的幸福の一切の可能を亡失するであらうところの状態への、間斷なき接近に他ならないことを認めざるを得なくなる。即ち人は、個人は、生活を感じるその本體は、到底争ふことの出来ないものと、——全世界と争ふことばかりをしてゐ

るのだといふことを知るに至る。また人は、わづかに幸福の形の如きものを得て、しかも常に苦痛に終局するところの快樂を求め、而して持続しがたき生命を持續しようとするものを知るに至る。人にとつて何よりも大切なものであり、唯ひとり本當に生きてゐると思はれてゐるところの個人生活、それは亡び、灰となり骨となる。而して、彼にとつて不要であり、大切でもなく、生きてゐることを感じもしない、相争ひ且つ交代するところの事象から成り立つてゐる外界は、或はあとにのこつて永久に生きるであらう。そこで人間の感じ得る唯一の生活は、何だか欺瞞的のものであり、彼の外部の、彼の感じない、知らない生活が、本當の生活であるらしく見えて来る。而してこれは人の到底思ひ感じずにはゐられないところの事實であつて、この考へかたは人の避け能はざるところである。(「人生論」)

## 二

トルストイの「人生論」は、かやうにその最初の部分に於いて、死の不可避と肉體的個的生活の幸福の不可能を説いてゐる。人間は理性を有する、それによつて人生の意味を説明しようとする。(「キリスト教の教へ」)。而し、人生は何のためであるかといふ疑問を問ひつめて行くと、人間の生活の内外の調和は破られてしまふ。尤もかういふ疑問はつまらないものであるとして、往々人はこれを打ちやつて置かうとする。そんな事は分り切つてゐる、それを知りたいと言ふなら、わけはない、そんな子供らしい知れきつた疑問は

ひとりで分つて来る——かういふ風に言つたりする。しかし、この疑問は、それにも拘らず、人生に於いてしきりに繰り返され、繰り返される毎にその答へを求める心が切になつて行く。人がひと度その疑問に觸れてこれを解決しようとするやうになると、その疑問の子供らしい馬鹿馬鹿しいものでなく、又到底考へて解決の出来るものでないことを知るやうになる。しかも、その疑問は人を待たない、答へることなしに生きることは出来ない。しかも答へは得がたく、人は生活の足場を失ひ、根據を失つた感じを懐く。その場合人は生活の休止を感じる。呼吸し、飲食することは出来る。眠ることは出来る。またせずにはゐられない。しかも欲望を満足させることを合理的だと思ひ得ないのであるから、生活はないと言つてよい。欲望の満足と不満足との如何は、何等自己の生活に増減するところがない。眞理を知ることとも人の欲するところではなくなる。何故かといふに、その眞理は、人生は所詮無意味だといふ眞理の他の何ものでもないであらうから。野原の直中で猛獸に追はれた旅人の話は、昔から東方に語り傳へられてゐる。そこで旅人は野中の水なき井戸に身を投じて免かれようとする。しかも井戸の底には大蛇が巨口をあけて、待つてゐる。井戸から出ることも、底まで身を投ずることも出来ない旅人は、井戸の中の隙間から生えてゐる小さな灌木の枝に縋りつく。両手はだんだんに疲れて来る。井戸の内と外とに待つてゐる敵のために、今に自分は命を失はなければならぬと思ふ。さう思ひながら尙枝に縋りついて、ふと見ると、白と黒との二匹の鼠が、その幹をくぐる廻りながら嚙んでゐる。今に、両手を離さずとも、その灌木自身が折れて、旅人は底にゐる大蛇の口に落ちるであらう。死は到底最早免かれ得るところではない、さう思ひながら、尙且つ自分のあたりを見まはして、その木の葉末に宿つてゐる露の數滴を見出すと、それを舌で嘗めてゐる。人間の生活が丁度それである。



死の大蛇が今に自分を呑むであらうことは知つてゐながら、何のためにこの運命を自から選んだか、何のために、この井戸にゐなければならぬかは明らかに分らない。かつて自分を喜ばした蜜の甘味を嘗めても、既にそれによつては慰められない。日夜に二匹の鼠は木の幹を嚼む、大蛇を下に見ては蜜も甘からず、二匹の鼠の刻々に死を早めるのを見ながら、どうすることも出来ない。昔の人生の歡喜も今はただ欺きに過ぎず、現前の事實は既に人を欺くことが出来ない。人生の意味は分るものでない。考へるな、たが生きよといくら言はれたところで、日夜死の不可避の手が通りつつある以上、考へないで生きることは出来ない。そしてただその死の不可避のみ考へる。何故かといふに、それだけが唯一の眞實であつて、その他の一切は虚偽に過ぎないからである。（「懺悔」）。

人生の意味如何といふ疑問は、一切の人間の心の底に横はつてゐる極めて簡単な疑問である。「今日わが爲すところから何が生ずるか、明日は何を爲すべきか、わが生涯は所詮何を生み出すか」、「何のために自分は生きねばならぬか、何のために何ごとかを願ひ何のために何ごとかを爲さねばならぬか」、「不可避の力を以て眼前に迫りつつある死が滅ぼすことの出来ない人生の意味は、そもそもあり得るか」、これ等の疑問の意は一つである。而して古來この疑問に對して、人間の知識が答へたところのものの中に、この疑問の答へはあり得ない。古來人間の知識は、この疑問に對して二様の態度をとつて答へた、一つは否定的であり、一つは肯定的である。否定的の態度からは、この疑問を認めない態度をとる。この疑問に無頓着に、それに拘泥する事なく人生を説明しようとする。經驗的の知識がそれであつて、その極端に立つものが數學である。肯定的の態度からは、この人生の意味如何といふ疑問を認める、けれどもそれに答へない。それは純理的知

識であつて、その極端に立つものが形而上學である。經驗的知識から、人は天體の化學的組織を知り、天體の運行の理を知り、人類の起原を知り、無限小の微細胞の形を知る。この方面の知識が、人生の意味如何といふ疑問に答へるところは唯一つである、即ち——人間生活と名づけてゐるところのものは、人間そのものは、所詮微細胞の一時的の偶然の集合に過ぎない、その微細胞の相互の影響や變化が、人間の生活と稱するところのものを作り出だす。この微細胞の集合は一時は持續せられるが、やがてその相互の關係がやむと共に、人生と稱せられるものも止み、それと共に人生の意味如何といふ疑問もなくなつてしまふ。經驗的知識がその本來の立ち場を嚴密に守つて説明する場合には、これ以上の事は言ひ得ない。これ等の知識はたしかに人の興味をひく。しかしながら、これ等の知識が明確であればあるほど、それに反比例して、これ等の知識は人生の意味如何といふ疑問にこれを適應せしめることが出来なくなる。これ等の知識が人生の疑問に解決を與へようとすればするだけ、これ等の知識は不明確なものとなつて来る。數學の如きは、全く人生の疑問に答へることをしない。更にまた人生の疑問に答へようとする如き經驗的知識の方面を見ると、即ち生理學、心理學、生物學、社會學などの方面を見ると、なまなかその疑問に答へられさうに見えるだけに、その不明確、その貧弱、その矛盾が明らかに目に見える。人生の疑問に答へようとしなかつたところの經驗的知識は、而して自己の純科學的な特殊の疑問にのみ答へようとしてゐる經驗的知識は、人をしてその明確さに驚かせしめるとともに、全く人生の疑問といふものを無視してゐるのである。人間が何であり、何のために生きるかといふやうな疑問に對しては、それ等の經驗的知識は答へを有たない、また答へようとしなかつた。光りに就いて、化學的結合に就いて、有機體の發達に就いて、數量に就いて、理性の作用に就いて、その特殊部分

的の法則を明確に説くことは、實にこの經驗的知識の能くするところである。もしこの經驗的知識が人生の疑問に答へ得るところがあるとすれば、それは恐らくかういふ形に於いてであらう。——問、人は何故に生れるか、答、無限大の廣がりの中に、無限大の長い間に、無限小の微細胞が無数の複雑さに於いて變化する、この變化の法則を了解するとき、人ははじめて、何故に地上に生きるかといふことを了解するであらう。「懺悔」。即ちこの答へは疑問に對して答へてはゐないのである。人にとつて必要なものは、自己の生活の意味であつて、人生が無限大の微分子に過ぎないことを知るのは、單に人生に意味を與へないばかりでなく、一切の意味を失はしめるものに他ならない。

次に純理的知識の方面に轉じてみると、その答へはかうである、——人類は精神的基礎、理想によつて進む、而してこの理想は宗教、科學、藝術、國家の形式といふやうなものとなつて現はれる。個人は人類の一部であるから、この全人類の理想の自覺及び實現のために共働努力するところに、個々の人間の生活の意味がある。

かくの如き知識が、人類の一部に就いて得た結論を一般的のものとするところから、いかに不正確なものとなるか、更にまたその理想の何であるかによつていかに多くの矛盾を生ずるか、それ等は勿論のことであるとしても、更に一つ最も奇異の感を與へる點は、「自分は何ものであり、何のために生き、何を爲すべきか」といふ最初の人生の疑問に答へる前に、この知識の説くところに従ふとすれば、人は先づ、「わづかの時期に於けるそのわづかの一部しか知り得てゐないところの、ひろい全人類の生活とは何であるか」といふ疑問に答へなければならぬことになる。自分と同じやうに己れ自身の生活を了解し得てゐないところの多

くの人々から成り立つてゐる、この不可思議な人類といふものを先づ了解した上でなくては、人は自分の何であるかを了解し得ない事になる。「無限の空間に於いて、無限の微細胞の無限の時間に互る無限の複雑さの變化を研究せよ、さすれば自己の生活を了解するであらう」といふ經驗的知識の答へが、何故に生くべきかの疑問を自から懐いてゐるものに満足を與へないと同じやうに「その始めも終りも知る事が出来ず、その一部分をも知る事の出来ない全人類の生活を研究せよ、さすれば人は自己の生活を了解するであらう」といふ答へが、眞に人生の疑問を懐けるものに満足を與へ得ないことは勿論である。經驗的知識はその研究のうち究極の原因を招来しないときにはじめて眞の知識であり、形而上學的知識は、原因結果の關係で現象を見ずに人間をその究極の原因との關係に於いて見るときにはじめて眞の知識である。哲學は自我と世界との何であるかを問ふ。而してその答へは一つである。それは觀念であり、或は實在であり、精神であり、意志である。それが哲學の自我及びその周囲の世界の本體に關する答へである。しかし、何故にその本體があるかに至つては、嚴密な哲學的考察は答へるところを知らない。その本體が何故にあり、それが何のためであるかは、哲學自からの尋ねんとするところであつて、それが眞の哲學であるかぎり、哲學の全任務は、この問を明らかに立てるところにある。その問の答へそのものに至つては、嚴密な哲學の「知らず」と答ふべきものに屬する。

世間の人々の人生の疑問に對する實際上の態度を観察すると、この疑問の惱みからともかくも脱するの道が凡そ四つある。第一は無知の道である。それは、人生が悪であり、無意味であることを知らず、了解せずにもゐるところに成り立つ。まだ井戸の底の大蛇をも見ず、木の幹を噛む黒白二匹の鼠にも氣づかずにもゐるのである。しかしこれは要するに時間の問題に過ぎない。一旦大蛇と鼠とに氣づくと同時に、無知の安心は忽ち失はれる。人生の無意味を知るに至つた人間にとつて、この無知の安心は何の足しにもならない、既に知つてゐることを知らなくなることは到底不可能だからである。

第二の道は快樂主義である。即ち人生の絶望的であることは知つてゐながら、ほんの目さきの一時だけ、手に入るだけの快樂幸福を享受しようとする。上流貴族は大抵この態度で生活をつづけて行く。彼等の生活の條件が、たまたま彼等の生活に害悪よりは幸福と快樂とを比較的多くしてくれる。その上彼等の道義心の鈍さが、「その一時的快樂の免かれも要するに偶然の事に過ぎず、病と老衰と死とが今日でなくば明日、必ず不可避の力で彼等の生活の満足を破壊し去る」といふ事を忘れさせてくれるのである。「懺悔」。この種の人間の獲得するところの學問藝術は、それ等の意義乃至價值に就いてどんな立派なことが説かれるにもせよ、要するに彼等にとつては、退屈をまぎらし、快適なときを過すためのものたるに過ぎない。彼等は結

婚する、家庭を作る、そして動物的生活の幸福を獲得しようとする貪慾心が、家庭の是認といふことで一層強められる。他人との争闘が一層激烈になり、自家の幸福のためにのみ生きる傾向が確定的になる。波のまにまにあてどもなく運ばれて行く人間が、その往かんと欲する方向へ泳いで行きつつあるかの如く見えるのと同じやうに、この種の人間もただ生きてゐるらしく見えるだけのものである。「人生論」。

第三の道は力と精力との道である。生活の悪と無意味とを知つて、生活そのものを絶つことである。この道は稀に見る力強い、首尾一貫してゐる人々の道である。この道に往く人は益々多くなりつつある。「懺悔」。しかしながら、この人々の考へるところに確信があり疑ひを容れないやうなところがありながら、しかも事實に於いてはその最後の決断に往々一步をふみ止まりがちである。それはその判断の眞實さに就いて何となく疑ひが残つてゐるからである。「もし生命がなければ、理性もないわけである。さすれば理性は生命の生んだ子である、しかもこの理性が生命を否定してゐる、人生が悪であり無意味であることは、疑ひのないところである。しかし自分は生きてゐる、まだ生きてゐる、全人類も生きて來たし、まだ生きてゐる。人生の無意味といふ判断は、多くの人々も夙に下した所である。また知つてゐたところである。しかも尙人は何等かの意味を人生に與へて生きて來た。何だかそこに變なところがある。どこかに考へ違ひがある。」かういふ風に自から疑ふ。しかしその誤謬が何處にあるかといふことは、どうしても見出すことが出來ない。そこで第四の道を選ぶことになる。人生の予盾から免かれる第四の道は、弱きものの道である。即ち人生の無意味は知りながら、人生が結局何ものをも生み出さないとは知りながら、ただ徒らに生活を引きのばして行くのである。死の生にまさる事は知つてゐるが、その理性に従つて行爲し、人生の欺きを去つて自殺

するだけの力がないために、何かを待つかの如くぐづぐづと生きて行く。一層よきもののあることを知りながら、そしてその一層よきものは自分でどうでもなるものでありながら、その一層よきものに身を投じないのであるから、つまり弱きものとする道に他ならない。論理的にはこの道は不可避の道であらうが、理性の確信は少い。理性はこの場合働いてゐる、しかしそれ以外のものがあるものが働いてゐる。それは生活の意識である。理性を導いて絶望から全く別の道に往かしめようとするところのある力が働いてゐる。その力は今まで明らかでなかつたものを明らかにする、即ち、もし人が生きんことを欲し、人生の意味を理解しようと欲するならば、その意味を失つて自殺しようとする人々に就いてではなく、生きて來、生きてゐる人々、自から勞役する多数の人々に就いて、その意味を探求することを要するといふ事である。これ等の人々は自から人生の疑問を立て自から明らかにこれに答へる。これ等の人々は苦痛と缺乏との生活を送る。而して自殺を最大の悪とする。然らば彼等は何に人生の意味を見るか。合理的知識は人生の意味を興へない、多数の人々、全人類によつて人生に與へられるところの意味は、一種のいやしめられてゐるやうな知識のうちに作り出される。合理的知識は學者や賢人を通じて人生の意味を否定する。しかし大多数の人々、全人類は、人生の意味を非合理的知識のうちに認める。而してこの非合理的知識こそは即ち謂はゆる信仰である。而してこの信仰こそ、自から考察する力に目ざめた人々の意識が排斥せずにはゐられなかつたところのものである。即ち、三位一體の神であり、六日間の創造である、悪魔と天使である。そこで、合理的だと思はれてゐるものがそれほど合理的でないのか、或は非合理的だと思はれてゐるものがそれほど非合理的でないのか、どちらかではなくてはならない。合理的知識の思考の道を通つて見ると、人生の無意味を結論することは避くべからざる

正しき順序であつた。ただ誤謬は、立てられた疑問に應ずるやうに考へをすすめて行かなかつたといふところにあつた。即ち疑問は、人は何のために生きるか、有限の生存がこの無限の世界に如何なる意味を有するかといふのであつた。この疑問の満足させられるやうな答への有り得なかつたのは、その疑問自身のうちに無限を以て有限を説明し、有限を以て無限を説明しようとする要求を藏してゐるからである。超時間的な、超空間的な超因果的な人生の意味は何であるかといふ問に對して、時間と空間とに制限せられ、因果律に支配せられてゐる人生の意味は何であるかと言つて答へてゐる。即ち答へは結局なかつた事になる。有限は有限に、無限は無限にひとしいことを断えず説いて來たのであるから、その結果、力は力、物は物、意志は意志、無限は無限、無は無といふことしか言へなくなつたのである。二つのものを等しいといふのであるが、それは初めから等しき二つのものであつたので、計算に誤謬はないが、要するにAはAであり、XはXであり、OはOである、といふのに過ぎない。知識は一見積極的に明かに答へてゐるやうで、結局人生を惡とするのは、OはOである、人生は無であるといふので、積極的ではないのである。疑問に答へてゐることはなつてゐないのである。即ち合理的知識は答へを興へず、ただそれは、問題を立て直すことによつてのみ答へを得られる。即ち有限の無限に對する關係の問題が考察せられるに至つてはじめて答へが得られるといふことを示すに過ぎない。また、ここに至つて、信仰の興へる答へがいかにか非合理的で、いびつなものであつても、とにかく有限の無限に對する關係をその答へのうちに導き入れるといふ取り柄を有してゐることを知るのである。合理的知識は、人生の無意味を認めしめる。そこで自殺の欲望が生ずる。しかも人々は生きて、人生の意味を知つてゐるといふ。それを知つてゐる間は皆生きてゐた。その人生の意味と生きることの可能

を人々に與へたものは信仰である。人類生存してこのかた、信仰は生きることの可能を與へてゐる。而してその特色はいつでもどこに於いても同一である。いかなる人にもいかなる答へを與へたいかなる信仰であらうとも、すべての信仰の答へは有限の人生に無限の意味を與へてゐる、苦痛や缺乏や死によつて滅す可からざる意味を與へてゐる。即ち、信仰のうちのみ人生の意味と可能とを發見し得る。「懺悔」。それ故に宗教は常に存在した、また宗教が合理的人間の生活にとつて必要缺く可からざる條件でなくなるといふことはあり得ない。「宗教とは何ぞや、その本質は何に在りや」。

#### 四

人生の問題は結局宗教に往く。

しかし、人間の社會には、宗教の眞の意義が失はれて、その實勢力の殆ど失はれるやうな時がある。かういふ時には、少數教養ある社會は、宗教の眞義を信ぜず、ただ多數民衆を在來の生活組織のうちに安定させるために必要なところから、信じてゐるやうなふりをするのが常である。民衆も亦情性で形式だけは守つてゐるが、ただ習慣や法律でさうしてゐるだけで、實生活の指導力としては宗教を認めてゐないのである。これはどの社會にもよくあつたことである。しかし、教養ある富有的社會が、單に宗教を信じないばかりでなく、現代では宗教はもはや無用であると言ひ、在來のものよりもすぐれた一層合理的な明らかかな宗教を説

くといふではなく、宗教などは時代おくれで、單に無用であるのみか、寧ろ社會に有害であること、あたかも人體に於ける盲腸の如くであると説くこと今日の如きは、未だ嘗てなかつたところである。随つてかくの如き人々によつて、宗教は内面的の經驗として研究せられるのではなく、一つの外面的現象として、恰も疾病の如きものとして、ただその外面の兆候によつて研究せらるべきものと考へられてゐる。宗教を、自然の一切の現象に精神を認めるアニミズムの教へと見る人もある。死せる祖先との交渉の可能を説くものと見る人もある。また自然の力に對する恐怖から發するものと説くものもある。「宗教とは何ぞや、その本質は何に在りや」。又従つて想像せられる事物への崇敬と見るデモクリスト乃至最近の宗教史家の如きもある。「宗教と道徳」。しかし今日の科學は、木や石に精神があるとせず、死せる祖先は生けるものの行爲を感ぜずとし、自然の現象は自然の原因によつて説明せられるとしてゐるので、もはや宗教の必要はなくなつたわけだと考へる。「宗教とは何ぞや」。

しかし超自然的存在を認めることが、自然の知れざる力に對する恐怖から來てゐるとばかり言へないことは明らかであるが、宗教が自然の不可思議力に對する人間の迷信的な恐怖から來てゐるといふ考へは、そもそも人間の見えざる超自然物に關する觀念が何處から發したかといふ重大な疑問には全く答へてゐないではないか。もし人が雷電を恐れるなら、單に雷電をこそ恐るべきである。然るに何のために人は見えざる超自然的存在を考へ出したのであるか、而してその超自然的存在が自分を支配すると考へたのであるか、何のために死せる人の生ける魂を考へ出したのであるか。これ單に恐怖からばかりでなく、何か他の原因によつてゐるのである。而してその原因のうちにこそ、宗教と呼ばれるものの本體が存するのである。また

殊に、いかなる人も、多少の宗教的感情を経験した人は、その感情が何か外界の恐ろしき現象によつてなく、自然の不可思議力に對する恐怖などは全く無關係な、内面的な自己のつまらなさ、さびしさ、罪深さの感じから、いつでも呼び起されたことを知つてゐるであらう。そこで人は、宗教が、自然の不可思議力に對する迷信的な恐怖によつて呼び起された神體への崇敬といふやうな、ある幼稚な時代の人間にのみあり得る如きものではなく、恐怖や人間の教育の程度とは全く無關係なものであり、教育のいかなる發達によつても減低されることの出来ないものであるといふことを知ることが出来るであらう。何故かといふに、無限の世界に於ける自己の有限を意識し、自己の罪深きこと——即ち人が爲し得たであらうし、また爲すべきでもあつて、しかも實際に爲さざりしところの凡ての怠慢を意識するといふことは、人間が人間であるかぎり、いつでもあつたことであり、またいつでもあるであらうとこのことであるから。「宗教と道徳」。

しかも尙學者の間には、人間社會の發達の歴史を説いて、最初にあつた無知蒙昧時代即ち宗教時代は、今は殆ど全く人類の經過した時代であるとし、次ぎには形而上學的時代があつて、それも經過し、今や人類は科學即ち實證科學の時代に生きてゐる。科學は宗教に代つて、迷信時代の人間が夢にも思ひ及ばなかつた發達の階段に導くものであると説いてゐる。オーギュスト・コントの一派の説がそれである。ここで科學といふのは、人類の知識のすべてが調和して攝取せられ、その價値の大小に従つて配列せられ、その得たところのすべての知識が疑ふべからざる眞實であるといふやうな方法を驅使するところの一大統一的科學を意味するものであらねばならぬ。しかし事實上かくの如き科學は存在してゐない。今日科學といはれるものは、ばらばらの偶然の往々にして全く無用な、單に疑ひなき眞實でないばかりか全くの迷妄でさへもあつて、今日

の眞實は忽ち明日の誤謬虚偽であるといふやうなものの集積に過ぎないのであるとすれば、即ち依つて以て宗教に代るべきもの——眞の科學と言はれるところは存在しないことになる。それ故に、科學が宗教に代るといふ説は、全くの獨斷であつて、神聖不可侵の科學といふものに對する何等の根據なき信仰に基いてゐる説であることは、恰も神聖不可侵の教會にたいするいはれなき信仰とその軌を一にするものである。しかも學者と稱する人々は、既にかくの如き科學が存在し、以て宗教に代るべきであり、代り得るものであり、既に代つたかの如くにさへ考へてゐるのである。宗教はすたれた、科學以外の何ものかを信するといふことは、無知蒙昧である、科學は一切の必要をなし遂げる、生活はただ科學によつてのみ指導せらるべし、——學者自からかく言ふばかりでなく、學者を信する群衆も亦宗教を迷信とし、科學を以て人生を導くべしといふのである。蓋し科學を以て人生を導くべしといふのは、その眞の意味では、何ものによつても人生を導かないといふことを意味する。何故かといふに、科學はその本來の目的に於いて、一切の存在の研究であつて、人生に何等の指導力を加へ得るものではないからである。「宗教とは何ぞや」。しかし宗教は、昔からさうであつた如く、人間社會の生活を動かすのであり、心臓である。それなくしては、心臓のないものと同じく、合理的生活はあり得ないのである。

しかし世に眞の宗教と稱すべきものがあらうか。凡ての宗教は相異してゐて、どれを以て眞の宗教と確定することは出来ない。統計の示すところによると、世界の宗教はその種類千に上るといふ。佛教、ブラマン教、孔子教、キリスト教その他、それぞれの信仰はその信仰を有する人々にとつて眞實である。宗教はその外面の形に於いては別々であるが、その根本に於いては凡て一である。而してこの根本義こそは一切の宗教

に通ずる眞の宗教であつて、それこそは現代の凡ての人々のものであり、それこそは人々を救ひ得るものである。「宗教とは何ぞや」。凡そ宗教といへば、不可見の世界の神祕的解釋でもあるかのやうに通常考へられがちである。或はまた人々を支持し、慰安し、覺醒せしめるところの儀式禮拜と考へられ、世界の起源を説明するものと考へられ、神意によつて許されたる道徳律として考へられたりする。「しかし眞の宗教は第一に萬人共通の最高のも、萬人に最も大なる幸福を與ふるもの啓示である。」「世紀の終」。眞の宗教は人間の理性と知識とに隨つて、人間によつて打ち立てられたところの、人間をとりまく無限の生活に對する關係である。その關係によつて人間はその生活をこの無限と結びつけ、またそれによつて人間はその行爲を導いて行く。それが眞の宗教である。「宗教とは何ぞや」。一切の宗教哲學、一切の神學、世界創造の説などは、ただ地理的人種的歴史的事情に伴つて生じた宗教上の外面的兆候に過ぎない。いかなる宗教と雖も、それが宗教であるかぎり、その根本に於いて、人間とその周囲の世界との關係乃至人間と根本原因との關係を含んでゐないものはあり得ない。いかなる宗教上の儀式禮拜といへども、また同じくそれ等をその根本に有してゐないものはない。一切の宗教上の教へは、その宗教の創始者が自己及び一切の他の人々を、この世界乃至その根源に對するいかなる關係に於いて、人間として認めるかといふことを表現したものに他ならぬ。「宗教と道徳」。今日のすべての人々に共通する宗教、一派の特殊の宗教ではなくして、世界の人類の九割以上が信仰するところのさまざまの宗教に於いてひとしく認めることの出来る根本的の宗教は、現に優存してゐるのである。僧侶や學者の力によつて、宗教虚偽の感じを吹きこむために、それを意識的に受け入れることを妨げてゐるけれども、すべての國民のうちの眞によき人々は、たとひ無意識的にもせよ、上の

意味に於ける宗教心を懐き、またそれを説き傳へてゐるのである。而してこの意味の宗教は、凡ての人々に本具的であつて、ひとたびそれを説かれると、人は疾く了解してゐたことであり、また自明の事であるかの如くに受け入れる。ヨーロッパ人にとつて（トルストイをも勿論含んで）この意味の宗教はキリスト教である。ただその外面的形式の點からでなく、その内面的根本的の點で、ブラマン教、孔子教、ユヂヤ教、佛教、回教などと共通するところのものとしてのキリスト教である。それと同じく、佛教や孔子教を信ずる人々にとつても、眞の宗教は、その根本に於いて凡ての他の宗教と一致共通するものとしての佛教であり、孔子教であらねばならぬ。而してその根本は極めて單純明白である。「宗教とは何ぞや」。かくの如くにして宗教の多種多様であることは、個々別々の宗教上の教へや、個々別々の教會が、本来それだけでは成り立たないものであることを強く示すことにはなつても、宗教の必要缺くべからざること及びその眞實を否定することには決してなり得ないのである。有限と無限との矛盾の解決、人生を可能ならしめるところの人生の疑問への解答、それは人間にとつてあくまでも必要であり貴きものである。「懺悔」。

人間の世界乃至その根本原因に對する關係態度の表現は、極めてさまざまであつて、その宗教の創始者やこれを受け入れる民衆の生活する人種上歴史上の事情によつておのおのその相を異にする。しかもまた、その關係態度の表現は、さまざまに解釋せられさまざまに誤り傳へられ、その結果、その態度關係は實に夥しき數に分れて行く。しかしながら人間の世界に對する關係の根本の様式は、凡そ三つに分つことが出来る。第一は原始的個人的關係であり、第二は異教的社會的關係であり、第三はキリスト教的乃至神的關係である。而して第二の關係は、要するに第一の關係をやや廣めたといふものに過ぎない。「宗教と道徳」。而して

この三つの關係乃至態度は、勝手にひとりきりで定めたものではなく、凡ての人々の態度がその根本では三つの人生觀のうちに歸着し、また實際この三つの態度以外の態度を以て人生を了解することは不可能であるのである。（「神の國は汝等のうちにあり」）。

第一の關係は、人間が自己の個人的幸福を出来るだけ多くこの世界に於いて獲得するためには、そのためにいかに他の人々の幸福が傷けられても意に介せず、自己を全く獨自絶對の存在として認めるところに成り立つ。小兒や原始的野蠻民の生活はこの態度によつて營まれてゐるといへるが、その態度からは異教的古代宗教や現代の幼稚な邪教風のもが生れる。佛教や回教の類廢的な形のものにはさういふのがある。物體の神化、犠牲、地上の幸福のための祈りなどは凡てこの態度から生れる。第二の異教的社會的態度は、人生の意味を單に個々の個人的幸福に認めずして、個々人の一定の集團の幸福のうちに認める、即ち家庭、種族、國民、時としては實證論者の如く全人類の幸福のうちに人生の意味を認める。その集團の幸福が存在の目的となる。即ち家長的社會的宗教の特質が生れる。支那及び日本の宗教、ローマ人の國家的宗教、實證論者の全人類の宗教などがその例である。支那及び日本に於ける祖先崇拜の儀式、ローマに於ける皇帝崇拜は、要するにこの態度から生れたものと見られる。第三の態度は、第二の態度が多く勇敢な民族の間に生れた態度であつたのに對し、多くは老人の態度であり、また今の人類の漸く取らうとする態度である。即ち人生の意味を個人的幸福乃至何等かの集團生活の幸福のうちに認めるのではなく、人間と全世界とを、それぞれの目的のためにでなく、絶大の意志の目的のために創造したところの、その意志そのものに奉仕することのうちに認めるのである。この態度の萌芽は、エジプト人にもベルシャ人にもプラマン教徒にも、佛教徒にも見ら

れるが、その眞の表現はキリスト教に於いて見ることが出来る。凡ての宗教は要するに以上の三つの態度に分たれる。（「宗教と道徳」）。

トルストイの宗教的人生觀が、どういふ思索の順序によつて成り立つてゐるかは、大要以上の梗概で會得せられるであらう。この宗教的人生觀が、或は無抵抗主義ともなり、教會、國家の否定ともなり、勞働の重視ともなり、またその藝術觀ともなつたのである。トルストイの宗教的人生觀の本旨は、さらにその愛の福音、禁慾論、その他の點に互つて細かく説かれることを要する。以上はわづかに人生に於ける宗教の意義を説いたのに過ぎない。しかしこれだけでも大分長くなつたから、今は以上の紹介にとどめて置く。讀者は、トルストイの所説のある意味での平凡さと、ひろさと、自由さと、また随つていろいろの意味で大膽な形式打破の精神に充ちてゐるところを、その遅ましい合理的精神の現はれを、以上の紹述の間から看取せられるであらう。



## トルストイの家庭論

トルストイが家庭の問題、即ち兩性の問題、結婚の問題、子女教育の問題、並びに婦人解放の問題などに就いて書いた論文は、思ひの外に少い。中には既刊の全集に收められてゐないものさへあるので、(たとへばボルノグラフィーに就いての一篇の如き)尙更數少いことになつてゐる。それ等の數少い論文に基いて、家庭の問題に就いてのトルストイの考へを解説してみよう。

### 1 兩性の關係

人間の犯す道德的の罪惡の中で、性慾に基く罪惡ほど人が互ひに用心深く隠さうとするものはない。またそのあらはれ方のさまざまに異なるに拘らず、これ程人間一般に共通な罪惡はない。また人々の見解のこれ

ほど異なる罪惡もない。ある人々はある場合を以て恐るべき罪惡とし、他の人々は同じ場合を以て普通の習慣もしくは満足の形と見る。またこの事に關してほど多くの偽善が説かれた罪惡もない。またこの罪惡ほど、それに對する態度如何によつて人間の道德的水準を正直に示し得るものもあるまい。またこの罪惡ほど、個人にとつても一般人類にとつても破滅的なものはあるまい。(「性の問題に就いて」参照)。

凡ての青年男女は甚だ危険な状態にあると言つてよい。その危険は次の點にある、——この年頃は、丁度紙の折目のやうに、永久に痕跡を留める習慣の養はれる時であるが、その年頃には人は、大抵何等の道德上宗教上の束縛なく生活してゐて、自分たちを守ることを強ひられ、自分たちはそれから何とかして免れようとするところの教訓の不愉快さや、自分たちを四方八方から誘惑もし、またそれを満足させることも出来るところの種々雑多な肉體的欲望などの外には、何一つ眼中にないのである。かういふ状態はその青年男女にとつては全く自然なものと思はれるのであるが、しかしそれが非常に危険であるのは、もし青年男女が、殊にかういふ肉體的欲望を初めて感じ、その勢ひの盛んな時に、その満足を以て一生の目的とするやうな事があつたら、極めて明白な理法によつて、必ず美食、遊戯、美衣、音楽などの如き肉體的欲望の満足から受けるところのものを、更に限りなく増し加へて行かねばならぬことになるからである。何故かといふに、肉體的欲望は、一度満足せしめられた後には最初の時ほどの満足を感ぜ得ないのであつて、次々にと一層新しい強烈な満足を追ひ求めることになるからである。而して肉體的欲望の中で最も強烈なものは性慾であるから、而してそれは愛慕、抱擁、オナニズム、若しくは交接の形で表現せられるが故に、結局いつでも極めて急速にそこまで進まずにはゐない。而してこれ等の快樂が更に一層強烈な清新なものによつて代られること

が不可能であるとすれば、そこには自己欺瞞の手段によるそれ等の快樂の人為的増大が始まることになる。即ち飲酒、喫煙、肉感的な音楽などがその手段である。これ等の手段は極めて普通のものであつて、貧富を問はず殆ど凡ての青年男女がとるところである。たとひ中途で止めることがあつても、多少とも既に毒せられて居り、或は全くそのために身を亡ぼす。(同上)。性慾の恐ろしきことは徹の如くであつて、人間の生氣を腐らしてしまふ。多くのよき事を人のためにもし、多くの事を爲し遂げたやうな人々が、ほんの少しばかり自分の心をゆるめると、忽ち性慾の支配に身を任せ、その満足のために婦人に近づき僅かの間に一切の勤勞と努力との集め得たところを、高く貴く生命あるものを蕩盡する例は少くない。(ボルノグラフィに就して)。

世間では、婦人との接近がどこか人を柔げる力を有つてゐるといふ。しかしそれは欲望の欺きである。婦人と近づくことは、凡ての人間と近づくことと同じやうに多くの喜ばしきを感じしめる、しかし特に喜ばしいといふことはないのである。もしありとすれば、それは非常に包み隠されてゐるにせよ、要するに肉感的の欺きである。(「性的問題に就いて」)。人間が自己一身のための快樂の他に何等の幸福を知らない時には、戀愛は最高の位地に置かれる。しかし、神への愛、隣人への愛を知つて後は、最も弱い程度にでもキリスト信者となつた後は、その信と愛との心が眞實なものである限り、普通の戀愛はそれから自由になることを欲すべき感情として見ずにはゐられない。性的關係から生ずる一切の不幸は、肉欲と精神的生計即ち眞の愛とを混淆するところから来る。吾々はこの肉慾を批判するために理智を用ひるのでなくて、それを精神的なものらしく粉飾するために理智を用ひたりする。(同上)。

今の社會には、一切の階級を通じて、偽科學の保證によつて強く固く信ぜられてゐる謬見が行はれてゐる。即ち性交は保健のために必要な事であり、しかも結婚はいつでも可能といふ譯に行かないので、結婚以外の、金錢を支拂ふといふことの他に男子を束縛しないところの性交は、全く自然の事であり、また獎勵せらるべきことであるといふ考へである。この考へは極めて一般的に強く行はれてゐて、両親は醫者の忠告に従つて、自分の子弟のためにその事を行はしめ、國民の道徳上の純良を唯一の念とするところの政府は、公然これを制定して、多くの婦女子を多くの男子の要求のために心身兩つながら滅亡せしめつつある。そこで獨身者は全く心を安んじて非行を行つてゐる。しかし、一部分の人々の保健のために他の人々の血液を飲むべしといふ事があり得ないと同じく、一部の人々の保健のために他の人々の肉體と魂とを滅ぼす必要があるといふことはあり得ない。人間も動物と同じく生存競争の理法に従ふとすれば、生殖の法則にもまた動物と同じく従はねばならぬ。しかし人間には別に争鬭の法則に反する愛の法則がある。生殖作用に反する純潔の法則がある。(同上)。

勿論嚴密には生きた人間で純潔なものはない、生きた人間はただ純潔に向つて努力し得るのみである。それは彼が純潔でなく、肉慾的であるが故にこそさうするのである。もし人間が肉慾的でなかつたら、純潔といふことは人間にとつてあり得ないし、また理解もされないであらう。人間は、妻帯してゐると否とに拘らず、キリスト及びポーロの説いたやうに、いつでも出来るかぎり純潔であるべきである。もし人間が一般に婦人を知らないほどに抑制することが出来れば、それが爲し得る最もよきことである。もし人間がそれ程に自制することが出来ないなら、出来るだけ少くその欲に従ひ、決して性交を一つの快樂と見るべきで

はない。人は純潔の理想に到達すれば絶滅する。それ故その理想は眞實でないといふ。動物的な人間が滅びるのはさほど惜しくもない。眞の愛の力、眞の生命の力が滅びさへしなければよい。愛のために、人が性交の快楽を斥けるといふ事によつて、人間の種が絶えるとしても、眞の愛は滅びないばかりか、その力を有するものは限りなく増すのである。而してこの眞の愛を経験したものは、既に人間の種の繼續の必要がない程のものとなるのである。既に人間の種の滅ぶといふことは、宗教上の信仰のドグマであり、科學上では太陽の冷却の觀察から来る自然の結論であるので、勿論今日の人々にとつては別に新しいことでもないが、以上の反駁には一般に廣く考へられてゐる誤解がある。人間の滅亡に就いて言ふ人々は、意識的にか無意識的にか法則と理想といふ二つのものを混淆してゐる。純潔は法則ではない。理想である、或は寧ろ理想に達するための一つの條件である。凡そ理想が理想であるのは、その理想の實現が觀念乃至思想のうちに於いてのみ可能である場合に限るのである。その理想が無限に於いてのみ到達せられるものと考へられる場合に限るのである。随つてその理想へ近づくとその可能が無限である場合に限るのである。實際人間の種の滅びることはあり得ない。もし地上の人間の數が増加して、住むべきところさへないほどになるといふのが正しい推測であるなら、さういふ状態から脱する道は唯一ある。即ちそのために悪疫や戦争の起ることを望む必要はなく、出来るだけ性的純潔に努むべきである。この事が人口の均衡を保つて行くべきである。

誘惑との闘ひに於ける弱みは、力以上のことを、自分の力ではどうともならないことを豫め考へる點にある。純潔といふことを外的に考へて修道僧のやうに自から拘束する。第一に豫めさうすることは不可能事である。何故かといふに吾々が誘惑に打ち克ち得ない條件といふものを考へることは出来ないからである。ま

たさういふ事は純潔に近づく妨げになつても助にはならない。外的純潔を守らうとして、或は俗世間を去り、婦人を避け、誘惑の俗世間の中にあつて内的に闘ふといふ最も重大なことをいやしめる。それのみかやうに外的に純潔を考へることは、あらゆる誘惑と失敗とが忽ち一切のものを滅ぼし、純潔の可能を疑はしめ、更に進んではその闘ひの正否をさへも疑はしめるやうな結果を生むのである。而してその結果は全く身を誘惑にまかせることになる。要するに人の性格により、氣質により、過去及び現在の純潔さの事情により、自分が何と闘はねばならぬかに就いて知らない他人の前にでなく、征服すべきものをひとりよく知つてゐる自分自身の前に、神の前に、出来るだけの純潔に達しようとするといふ事より外はないのである。この態度によれば、何ものもその方向を阻止せず、いかなる誘惑や失敗も、すべて動物的なものから距つて神に近づくといふ永遠の目的に導くであらう。(同上)

## 2 結 婚

キリスト教の教へは生活の形式を定めるのではなく、ただ一切の人間關係に於いて、理想乃至方向を示すに過ぎない。性の問題に於いても亦同様である。キリスト教の精神を解しないものは形式を定めたがる。たとへば教會の結婚の如きは何等その中にキリスト教的精神を含んでゐない形式である。性的關係に於いても他の場合と同じやうに、暴力や怒りが理想を無視しもしくは曲げる事はすべきでないのである。しかも教會

の人たちは結婚に關してさういふことを行つて來た。福音書には結婚に就いては説いてゐない。その否定はある。既に結婚せるものために姦淫もしくは離婚に反することが説いてある。しかし教會の説くやうな結婚の制度に就いては一言も言つてゐない。

性慾との闘ひは最も困難な闘ひであつて、幼少の時と最も老衰の時との他に、この惡から人間が自由であるときはないのである。随つてこの闘ひに悩み苦しんで、その闘ひの止むときの來ることを望み、心を弱めたりしてはならない。全力をあげて敵の力を弱めるためにつとむべきである。もし到底闘ひつづけて行けないとするなら、精神に於いて最も近いところの配偶者を選んで結婚し、闘ひに敗れるなら二人ともにして子女を教育し、ともに純潔に近づかう、早ければ早い程よいと考へて行くべきである。結婚すべきか否かを尋ねる人々には、もし純潔の理想を見ず、それに身を任せる要求を感じないなら、結婚といふ不純潔な方法によつてそれとは知らずに純潔に近づくことをするがよいと、——かう答へよう。自ら長身にしてその前に鐘樓を見るとき、その鐘樓を見ない短身な人にそれを指示することの出來ないやうに、即ちそれを目標にして道を教へることの出來ないやうに、この問題に就いても他の目標を示さねばならぬ、それは純潔の理想を見得ない人々に對する正しき結婚である。しかしこれは吾々の間のことであつて、キリストは純潔の他に何等の目標を示さなかつたし、また示すことが出來なかつたのである。キリストの理想は神と隣人とへの愛であり、神と隣人とに仕へるために自己を空しくすることである。肉身の愛即ち結婚は自己に仕へることである。随つていかなる場合にも神と隣人とに仕へることを妨げであり、随つてキリスト教の見地からは墮落であり、罪である。結婚することは、それが人間の種の繼續を目的とする場合でも、神と隣人とに仕へること

を助け得ない。子女の生命を生むために結婚するよりは、精神上物質上の糧の不足のために吾々の周囲で滅びつつある幾百萬の小兒の生命を維持し救済することが、かういふ人々にとつては、はるかに簡單なことである。

人生は奉仕の場で、それに際しては多くの苦しきことを忍びもするが、それよりも一層多く喜びにあふ。ただ眞の喜びは、人が自己の生活を奉仕として了解する時にのみあり得る。自己一身の幸福以外に一定の生活の目的を有するときのみあり得る。大抵結婚せる人々はこのことを全く忘れる。婚姻生活とか、子女の生誕とかいふ喜ばしいことは、多く、それが人生そのものを作り成してゐるやうにも思ふが、それは危険な欺きである。もし両親が生活の目的を持たないで生きて子女を産むとすれば、彼等はただ人生の目的の問題を、また何故かを知らずに生きる人々が受けた罰を、延ばして置くだけのことである。それを避ける事は出來ない。何故かと云ふに、必ず子女を教養し指導すべき時が來るからである、しかも何によつて導くべきかをも知らないからである。そのときこそ、両親は己れの人間らしさと幸福とを失ひ、孕み育てる動物となる。生命の充實せるが如く思つて結婚しようとする人々にとつて、その時こそ、殊に何のため各々の人が生きてゐるかを考へ始むべきである。而してこれを明かにするために、自分の過去の生活の條件を熟考し、人生に於いて何が重大と考へられ、何が重大でないと考へられてゐるかを評價し、何を信じてゐるか、即ち何を永久の疑ひなき眞理とし何によつて生活を導くべきかを考へなければならぬ。結婚は決してただ愛によつてすべきでなく、必ず冷靜な考慮によつてすべきである。ただかく言ふ場合その意味は普通に解するところとは全く反對であつて、肉感的の愛によつて結婚すべきでなく、未來の妻が自己の人間の生活を生きるために

どれ程助けてくれるであらうかといふことの考察をすべきであるといふ意味である。結婚に就いて、二十度も百度も考へよ。自分の生活と他人の生活とを性的關係によつて結びつけるといふことは、道徳的に鋭敏な人にとつては、ひとり人間のみの爲し得る最も意味深い、多くの結果を孕んでゐるところの行爲である。結婚はいつでも、吾々が死ぬるが如くになされなければならぬ。即ちさうせずにはゐられないときにのみなすべきである。(同上)

現存の結婚觀と上に述べた結婚觀との相違は大きい。娶り、嫁ぎ娶らしめ、嫁がしめることに變りはないが、一方では性慾の満足を許すべきもの、正當なもの、地上の最も大きな幸福と考へられてゐるのに、他方ではそれを罪と考へるところに、大きな相違がある。キリスト教の教へに従ふ人は、どうしてもその外にしかたのないと感ずるときのみ結婚する。結婚して後も性慾に耽らず、成るべくそれを抑へることを努める。兩親としては子女の精神的幸福を念じて、必ずしも誰も彼も結婚させねばならぬとは考へない。ただその純潔を保ち得ないものだけを、さうせずには生き得ない場合に、結婚させる。夫婦としては一般にするやうに子女の多きを願はず、純潔を欲して、子女の少きを喜び、すでにあるところのわが子女と、未來に於いて神に仕へるものを養ふことによつて神に仕へようと欲するなら、他人の子女をもあはせて教育することにその力を注ぎ得ることを喜ぶであらう。

### 3 家 庭

聖書には夫と妻とは二身でなく一體であると説いてある。これは正しい。それは、二人の性交は子女の出生によつて、他の一切の結合と異なる特殊の結合によつてその二人を結びつけるからである。かくしてその二人はある意味で二人ではなくなり、一體となるからである。それ故に純潔に向つてつとめ、かかる性交を止めることにつとめるのは、この一體たる夫妻が共になし得ることであり、なすべきことである。而してこの性交に於いて先んずるものは、あらゆる力を用ひて他の配偶者を感化すべきである。兩者がこの一つの願ひに一致しない間は、兩者はその結合生活の罪の重さを共に荷はねばならぬ。結婚は、二人の人間が打ち克ちがたき愛慕のために肉體的に結合する、子女が生まれる、そこで夫妻は、未來の母たるものために、子女の成長養育を妨げるところの一切のことを避け、一切の肉體的誘惑を避け、兄妹の如く生活する——かういふものであるを要する。さうでないと、既に亂淫な習慣を有する夫は、その態度を妻にうつし、肉感的に感染せしめ、妻をして情婦であると共に、苦しめられたる母であり、病める、苛立たしめられたる、ヒステリックな人間であることの堪へがたき重荷を負はしめることになる。夫は妻を情婦の如く愛し、母として無視し、夫自ら作り出した妻の苛立たしさやヒステリーののために、その妻を憎むことになる。大多數の家庭にひそめる凡ての苦しみの鍵は實にここに在る。(同上)

家庭の結合が堅固であつて、人々に幸福を與へるのは、それが單に家庭的でなく、宗教的である場合である。家庭の各の人が一つの神を信じ神の法則を信ずるときである。これなくして家庭は喜びの泉ではなく、苦しみの泉である。（「讀書の環」七月二十八日の分参照）

凡ての人々の、随つて男子の天職は、人々に仕へることである。この奉仕は家庭への奉仕と結びつかねばならぬ。それは機械的にいろいろのこのために時間を割くといふやうなことではなく、化學的に、家庭に就いての心づかひや、子女の教育に、理想的奉仕的の意義を帯びしめることである。子女の出産に現はるべき本當の結婚は、その眞の意義に於いては、間接に神への奉仕であり、子女を経て神に仕へることに外ならない。それ故にこそ、結婚は、夫婦の愛は、吾々によつて多少の慰藉として、心の安めとして經驗されるのである。これは自分のことを他のものへ渡すことである。つまり、もし自分がなし得べくなさざるべからざりしことをしなかつたとすれば、即ちその代りに、自分の子供たちがするであらうといふ意味である。そこに意味がある。自分の子供たちが爲し得るために、自分の子供たちが神のことを妨げず、神のための勞役者であり得るやうに教育するために、もし自分は自分の前にあるところの理想に奉仕することが出来なかつたとしても、自分の子供たちが自分に代つてそのために爲し得るやうに、自分は全力をあげて教育に盡したといふこと——そこに意味がある。而してこの事は、教育といふことに計畫を與へ、一定の性質を定める、教育に宗教的の意義を帯びしめる。而してこの事が、青年男女の自己犠牲の努力と家庭に就いての心づかひとを化學的に結合渾一せしめる。（「性的問題に就いて」）。

#### 4 子女の教育

あらゆる教育の基礎となるべきものは、何よりも現今の學校が棄てて顧みないところのものであらねばならぬ。それは人生の宗教的解釋である。尤もそれを教授の形の上で言ふのではなく、教育の一切に互る指導原理として言ふのである。人生の宗教的解釋の實際生活上の現はれは、愛によつて到達すべき一切の結合は、第一に人々の兄弟の如く親しむことである。これは人生の實際的な中心法則である。而してこれこそ教育の基礎として置かなければならぬものである。それ故に、結合に導くすべてのものを兒童のうちに發育せしめ、その反對のすべてのものを打ちくだくといふことは、よき事であり、爲さざるべからざる事である。

人はいつでも二重の方法によつて成されるところの影響によつて學び且つ教育せられる、即ち意識的なものと無意識的なものとの二つである。意識的の感化は教授教育であり、無意識的のものは、實例であり、狭い意味の教育であり、開發である。吾々の社會では、第一のものに全力が注がれてゐて、第二のものは、吾自身の生活がよくないために、心ならずも輕んぜられてゐる。而してその第二のもののあるところがありとすれば、それは貧しい勞働者の家庭だけである。而してこの二面から兒童の上に働きかける影響のうちでは、多く言ふまでもなく、個人にとつても社會一般にとつても、最も重大なのは第二のもの、即ち無意識に働きかける道德的の啓發教化力である。（トルストイのP・J・B・氏への手紙による）

吾々が自から教育せずして自分の子女なり誰なりを教育しようと思ふかぎり、教育は複雑にして困難な仕事である。もし自己を経てのみ人を教育し得るといふことを了解するならば、教育の問題はなくなつて、ただ、自分は如何に生きてべきかといふ人生の問題のみが残るであらう。「養育と教育」一般に教育者は自分の生活を、或はすべて大人の生活を兒童から匿し、兒童を特殊の條件の下に置く（即ち寄宿舎、その他の制度によつて）か、さうでなければ無意識に行はるべきものを意識的な範圍へ持つて來てしまふ。即ち道徳上の法則を立てる、そして必ずそれに附け加へて、

“Fais ce que je dis, mais ne fais pas ce que je fais.”（私の言ふ通りにしなさい、しかし私のするやうにはしてはならぬ）と言ふ。（上記の手紙及び「讀書の環」）ところで兒童は道徳的には大人よりも遙かに透徹力を有してゐるので、屢々無意識のうちに、いつの間にか兩親の缺點を——殊にその中でも最もよくない偽善を見ぬいてしまひ、兩親に對する尊敬やその教へに對する興味を失つてしまふ。眞實といふことが、精神的の感化を實現するための第一の最も主要な條件である。随つてそれが教育の第一の條件である。自分の生活の一切を子女に示して恐ろしくしないためには、自分の生活をよきものとせねばならぬ。少くとも、出來るだけ悪くないものにしなければならぬ。それ故にこそ、他人の教育は自己の教育の中に含まれる。凡ての教育は、自分の過ちを大いに自覺するところに、而してその過ちから自分を正すところに成り立つ。而してこの事は、凡ての人がいかなる生活の條件の下にも成し得ることである。而してこれこそは、人が他の人に、随つて自分の子女に、おのづから自分にとつて最も近い自分の子女に對して、感化影響を及ぼすために與へられたところの最も力強い武器ではある。（「養育と教育」）

## 5 婦人解放の問題

人類への奉仕は自づから二つに分たれる、一つは現存の人類の幸福を増進することであり、今一つは人類そのものを繼續して行くことである。第一の奉仕は主として男子の仕事である。男子は第二の仕事をし得ないからである。第二の奉仕は主として女子の仕事である。女子のみそれをよくするからである。この區別を忘れ、無視することは出来ないし、してはならないし、またさうすることは過ちである。この區別から、人の考へ出したものでなく、事物の本性に存するところの二者の義務が導き出される。この區別から、男女の美と惡との評價が導き出される。人間に理性のあるかぎり、その評價は昔からあり、今もあり、なくなることはないであらう。男子が、その生涯の大部分を、男子に特有な種々の肉體的智力的乃至社會的勤勞に送り、女子が、その生涯の大部分を、女子にのみ特有な兒童の生産、哺育、生育に送つて、ひとしく己れのみすべきことをしてゐると感じ、またその事をするによつて、兩者ともその本性によつて豫定せられたる凡てのことを果たしてゐるが故に、ひとしく人の尊敬と愛とを呼び起すであらうといふことは、いつでも事實であつたし、未來に於いてもまた事實であらう。男子の天職は比較的多様で廣く、女子のそれは比較的一様で狭いが、しかし深い。それだから、多くの種類の義務を有する男子が、そのうちの二三のものに反くことがあつても、必ずしも惡人でなく有害な人間でなく、ともかくその天職の一部を果たしたものと認めて

られることは、いつでもあつたし、將來にもあるであらう。女子は僅かの種類の義務を有するが故に、その中の一つに反いた場合には、數百の義務のうちの幾つかに反いた男子よりも忽ち道德的に墮落する。かくの如きは一般にいつでも考へられてゐたところであり、またいつでも考へられるであらう。それは事の本質に觸れてゐるからである。（「婦人たちに」）

普通に、子を産まないバリの婦人の如きは、文明のあらゆる手段を用ひて、己れを魅力的なものとし、それによつて男子を支配するに至つたと謂はれてゐる。これは正しくないばかりでなく、全く反對である。男子を支配したものは、子のない婦女子でなく、男子が自己の法則を果たさずとも、それに拘らず自己の法則を果たしたところの母なる婦人である。人工的に子を産まず、己れの肩や髪によつて男子を囚にするところの婦女子は、それは男子を支配した婦人ではなく、男子によつて姦淫せられ、男子にまで、亂淫の男子のところまで墮落して行つた婦女子である。男子の如くに彼女自から法則から遠ざかり、男子の如くに一切の合理的な人生の意義を失ひつつある婦女子である。この誤謬から、所謂婦人の權利と稱せられる驚くべき馬鹿げたことが引き出される。それはかうである。——男子は男子の勤勞の法則から反きながら女子のみが女子の勤勞の重荷を負ふことを求めてゐる。しかし女子も亦男子のする銀行、官省、大學、研究室などの仕事をすることが出来る、女子も勤勞の分配の形の下に、他人の勤勞を利用して、感覺的欲望の満足を得て生きてゐ、——そこで女子は實際男子のすることを男子よりもよくなし得るといふことを事實の上にも示すやうになつたのである。（「さらば吾等何を爲すべき」）

謂はゆる婦人問題の動機が、子女の養育の細かい勤勞、たとへば子供を寝かしつけるとか、湯に入れると

か、シャツを洗つてやるとか、食事の準備をしてやるとか、衣類を縫つてやるとかいふやうなことから生ずるところの一切の心づかひや骨折から、男子が全く免れてゐるといふ點に對する不滿にあるのなら、それは全く尤もである。婦人は子女の養育の大部分を自から引き受けてゐるのであるから、それ以外の心づかひは、自己の仕事（それもやはり家庭のために必要なものであるが）に妨げにならない限り、男子が引き受けるといふのが自然であるやうに思はれる。もし一切の骨折が、弱服従せしめられてゐる婦人の上に課せられるといふ野蠻の習慣が、今日の如く吾々の社會に深く根をおろしてゐなかつたら、實際その通りになつてゐたであらう。即ち婦人の解放の本來の意味はここにある。——いかなることをも女どもの事だとして考へずてしまはないで、女子は生理的に弱いものであるが故に、全力を以て女子を助けるといふこと、これである。（「性の問題について」）。しかるに女子がその自然の法則から離れ、ますます墮落するやうになつて來た。女子は華美な歡樂に耽るか、男子のするやうな仕事を眞似するか、この二つに自分の力を示すべきだと信ずるやうになつた。この二つのためには子女は邪魔ものである。そこで科學の助けによつて、富有階級の間には、産兒を減らすところのいろいろの手段方法が用ひられ、産兒を減らすための要具は、婦人の化粧品品の附きものとなつた。この悪事は已に日に日に擴がつてゐて、やがて富有階級の凡ての婦人に及ぶであらう。而してその時こそ遂にその婦人たちが男子と同等になり、男子とともに人生の合理的意義を失ふであらう。しかしまだ遅くはない。さすがに男子よりは女子の方が自分の自然の法則を果たしてゐる。隨つて女子の中には道理を解する分子がある。而してそれ等の人々の手によつて救ひは可能である。もしこれ等の婦人が自己の意義を了解し、自己の力を用ひて夫や兄弟や子供たちの、凡ての人間の救ひに向つたなら、決してま



だ時は失はれてゐない。眞の人生の意義、神の掟による幸福の意義を知るものはこれ等の婦人のみである。またそれを人に知らしめ得るものはこれ等の婦人のみである。女子が最も恐ろしき苦しみの近づくを喜びを以て待ち、その苦しみの後に女子にのみ知られる幸福の來るのを待つときにこそ、女子のみひとり眞の勤勞の意味を知るのである。産後直ちに引きつづいての育児のためのあらゆる苦心と勤勞とは、何の恩賞や讃辭を期するのでもなく、ただ眞のなすべき事をなしたといふ満足によつて報いられる。神の意志を満たす事の喜びによつて報いられる。而してそれはひとり婦人のみ心を知るところである。かくしてもう産むのは澤山だといふ心持の起らないことは、丈夫な勤勞者ももう働くのは澤山だと思はないと同じことである。またその育児の面倒も決して人手に渡したくないことは、自分の始めた仕事を人の手で仕上げて貰ふことを好まぬ勤勞者の心と同じである。何故かといふに、その中には自分の生命がこめられてゐるのだからである。かくの如き母は、子女をして勤勞を避ける誘惑に陥らしめず、勤勞に堪へるの道に行かしめる。何を教ふべきかは尋ねる必要もなく、人間の天職の何にあるかを知つてゐるが故に、何を教ふべきか、何の用意をなさしむべきかを知つてゐる。かくの如き婦人は、妻としても夫に他人の勤勞を利用することをのみ目的とするやうな偽りの勤勞を厭はしめる。またそれによつて子女のためには二重の誘惑である虚偽の勤勞を排斥せしめる。かかる母は、女兒の夫をその手の白さや行儀のよさによつて選ぶことをせず、眞の勤勞の何であるかを知ることが故に、自分の夫を始め凡ての男子に對して眞に男らしき勤勞を求め、その故に彼等を尊敬するであらう。婦人がその天職に従つて神の意志を果たすことは、人間の達し得る最高の高さ立つことである。凡ての人々に對して、凡ての人々が常に進まうとしてつとめてやまない神意の充實の軌範を示すことである。(一)

らば吾等何をなすべきか)

以上の解説によつて、讀者はトルストイの性、結婚、教育、婦人解放に關する考へを通じて、愛を中心とする純潔の理想と、母性の尊重と、自己完成の理想と、天分による自然の勤勞の理想とを見られるであらう。産兒制限論に對する批評とも見るべきものをも、隨處に明らかに見出されるであらう。

## トルストイとその夫人

トルストイの事は大抵皆さんがお読みになつたもので大體はお分りになつて居らうと思ひます。殊に家庭の方の問題は、この社に關係のある徳富健次郎さんが書かれた物も色々あります。私がモスクワにゐる時分に、或るロシア人が之を翻譯してくれと云つて、持つて來た。それはどこから搜したか知らないが、「みみずのたはごと」と云ふ本であつたか何であつたか、本の名前は覚えませんが、その中に徳富さんが書かれたトルストイ夫人に宛てた長い手紙があつたのを記憶して居ります。その時に私は初めてそんな物のある事を知つた位であつたが、皆さんの中でお読みになつた方もありませう。それは全體がトルストイ夫人に關する非難の意味で充ち満ちてゐるやうであつた。要は夫人に對して、「貴女は妻として良人の心持に對する理解が足りない」と云ふ意味の非難であつたと思ひます。色々の例を擧げて具體的の事實を指摘してありました。たとへばトルストイ夫人が収入を得るためにモスクワ邊の活動寫眞會社の注文に應じて、トルストイの日常

生活を活動寫眞に寫すことを承諾して、トルストイが好きなかつたに拘らず、遂にそれをとらした。さうしてそれをいろいろの名前を付けてフィルムを作つて各地で見せて居つた——かう云ふことも書いてありました。尤もこれは有名な事實で、トルストイの生前から、トルストイに親しんでゐた人々は、大抵夫人に對しては不満足で、多くの人が夫人がいけないのだと云ふ風なことを言ひ勝ちでありました。この活動寫眞の問題なども、前から世間に噂の高かつたことであります。そんな風でトルストイの家庭に於いて、どう云ふ風な事實があつたか、細かい事は別としても、少くともトルストイと夫人との間が、殊に晩年に於いて面白くなかつたといふことは、大抵皆さんがお聴きになり、若くはお読みになつて御存じだらうと思ひます。私のお話したいと思ふ事もそれに關聯した事で、別に斬新な事實をお話するわけでもないし、非常に特別な解釋をそれに施すと云ふわけでもない。ただその問題に關する今までの見方が、多くはトルストイ夫人の方に同情しての立場でなくて、寧ろトルストイその人を好いた人々、トルストイの教を受けつつあつたといふ風な人の側から見た批評であつて、従つてトルストイの多くの傳記を書いた人々、評論を書いた人々の、家庭問題に關する見方が、餘りに夫人に對して同情が足りないといひませうか、或は少くとも氣の毒だと云ふ感じ位は起させるやうな點があつたかと思はれる。勿論結論を非常に簡單に言つてしまへば、結局やはり夫人が理解が足りないといふことになるかも知れませぬが、しかしながら夫人ばかりが悪いのであつて、トルストイは少しも悪くなかつたかと云ふ風な問題も考へるべきであらうと思ひます。さういふ風に考へることは、トルストイを本當に理解するためにも必要ではないかと思ひます。それで結論は私自身にも附かないけれども、トルストイの生活をも有ゆる方面から、全體として觀察しなければならぬし、夫人の生活

もトルストイと衝突した方面だけを見て非難を加へないで、妻として、母として、或は澤山孫がありますがそれ等の祖母として、或は地主として、大家族を控へた家の主婦として、いろいろな方面から見て行かなければ不十分であるといふことになりませう。それで結論がどういふ風につくか、それは無論この話だけではお聞き下さるかたの方でも附けて下さるわけにいかないかも知れないが、少くともこの問題に對する見方はどういふ風でなくてはならぬか、どういふ考へであつた方がよいかといふ位な點で、多少御参考になるかと思つてお話をする次第であります。

二

この問題はトルストイ一個の問題ではなく、またトルストイ夫人だけの問題でもなく、いろいろ形を異にして、あらゆる夫婦の間に、少くとも婦人が、妻となり、母となり、祖母となり、家庭の主婦となつてゐる間に起つて来る問題であらうと思ひます。もつと廣くこれを擴めて考へるならば、單に婦人の問題であるとか、家庭の問題であるとかいふばかりでなく、もう一層廣く人間と人間との關係、——只今の場合に於いては夫婦といふ關係であるけれども、この問題を押し詰めて行つたならば、夫婦といふ關係でなく人間と人間との關係、或は友情といふことにも廣められて行くだらうと思ひます。大抵の場合に於いて世に優れた偉大な人は崇拜者が非常に多いから、その崇拜者がその人の言行を記録する。日常の生活に就いてもいろいろの

事を傳へる。その場合にいろいろ解釋して、積極的の方面、それから優れた方面、その人のなし遂げた事蹟、功蹟といふ方面を特に力説して、その方面に就いての解釋をするといふ譯になりがちであります。その方が確に一般世間のためにも有益である。誰にしても人の缺點ばかり指摘してゐるといふわけにはいかないし、またさういふことでは無意味でもありませうから、普通の傳記者、評論家が、積極的の方面、良き方面を傳ふことに専らであるといふのは、決して不自然でない。しかしながらその結果、その人は唯良い方面ばかり、積極的の方面ばかり、勝れた方面ばかりを持つてゐて、それ以外の、普通の人間の持つてゐるやうな、缺點とか弱點とかいふやうな消極的の方面は、少しも持つてゐないのであつたかと思はれるやうな風になつたならば、——恰も持つてゐなかつた如くに傳へられたならば、その結果は、その折角の偉人といはれるやうな人々の、人間としての全體の面目は傳はらないことになつて、唯價値、功蹟、その人の成し遂げた事蹟、事業といふやうな方面だけに持つてゐる偉大さ、他人に優れた、群を抜いたといふ方面だけが、著しく高められて來て、普通の人間として、毎日朝から晩まで暮してゐる——御飯を食べたり、挨拶をしたりするやうな日常の生活、普通の人間並の生活をしてゐる方面の消息がかくされてしまつて、結局一つの型に嵌つてゐるやうな、生きた人間でないといふ感じを與へられるやうになりはしないか。普通の場合に於いて、消極的の方面のみを傳へられるといふことは、寧ろよくないことでありませうけれども、さういふ意味でなくして、その如何に優れた人であつたかと云ふ、優れた點を本當に理解し、その人を人間として理解することに興味を持つて、どういふ人であつたかといふ事を全體として知らうためには、あらゆる方面から觀察を下すべきだと思はれる。全體を観るといふことが最も必要だと思ふ。總ての場合に於いて物の全體を観る、あらゆる方

面から、裏も表も、横も縦も見方をするといふ事が、萬事に必要であるのは申すまでもないことであるが、殊に人目を蔽ふやうな、人目を眩惑させるやうな、優れた、耀かしい、偉大な人々の生活に就いては、尙更その用意がなく、片面だけを観るといふやうなことになるがちであります。殊に家庭生活の如きは、一般観察者の目に觸れにくい、理解しにくい、細やかな、デリケートな、口に言へないやうな複雑な感情が、相寄り相集つて出来てゐる集團的な生活であるのだから、理窟ばかりで見たり、一面から見ただけでは、到底解釋が出来ないといふ點があるのであります。だから家庭生活の問題に就いては尙更さういふ風な全面的の見方が必要であるといふことになると思ひます。例へば夫婦喧嘩を見たとして、唯簡單な理窟からばかり夫婦喧嘩のどちらが悪いと云ふやうなことは言へないだらうと思ふ。その理由には本人同志でなければ分らないやうな處があるでせう。第三者が本當に長い間に互つて、あらゆる方面から二人の生活を觀察してゐるならば、その意味が現はれて来るかも知れない。が、ちよつと見た位では分らないやうな複雑な關係がある譯であります。普通の夫婦喧嘩でさへさうでありますから、況んやトルストイのやうな肉體的にも、精神的にも逞ましい力を持つて居つて、八十餘年の間に非常に變化のある生活、——外面的にも内面的にも非常な變化をして、殆どあらゆる人間の罪惡も、又殆どあらゆる善き事も爲したやうに見える人の生活では、尙更のことだと思ひます。お弟子達の見方は、とかく最良の引倒しと云ふことも有りがちであるし、又弟子の人達には丁度自分の先生が、自分だけの先生であるやうに思はれるやうに、又お弟子達は、自分と師との間に、師の家族が邪魔に入る、と云ふ風な感じもあつたらうと思ひます。それ等の方面は割引して見なくてはならぬと思ひます。トルストイの生活にはいろいろ變化があつたけれども、就中家庭の中に龜裂があつて、ど

うも面白くなつたといふことは、丁度トルストイが千八百七十九年から千八百八十一年にかけて書きました「懺悔」を書いた頃からであるやうです。その「懺悔」を書いたのが、家庭の生活から全く新しい方面に出ようとした轉期であつて、この頃から家庭の分裂といふ感じが著しく現はれて来た譯であります。それでトルストイは絶えず前から日記を書いてゐたが、その頃も日記を書いてゐる。また夫人の方も自分の日記を書いて居られたやうで、それ等の物が、全部は發表されてないが、段々發表されて来た。夫人が亡くなられたと云ふやうな電報がありましたけれども、矢張りさうでなくして存命であるとも傳へられてゐます。勿論もう高齡で、七十あまりでありませうが、私がモスクワで見かけた時は、元氣な、肥えた、身體の大きな、丈夫さうな人であつた。その夫人の書かれたものもいろいろありますけれども、夫人自ら秘密にして發表されたいといふものが多いので、世間に傳はつてゐるのは僅かなものです。トルストイの書いたものも、夫人の書いたものも、全部は發表されてゐない。トルストイの書いた物も夫人が發表をする事を許さない。トルストイの原稿一切を委託したのは、末の娘さんのアリェクサンドラと云ふ人で、その娘さんに委託してゐるのに、奥さんが發表を許されたいといふことから、いろいろな問題が起つて、これも夫人がお弟子達から悪口を言はれる材料の一つになつてゐます。奥さんから云へば、何事も自分が一番先に關係する權利を持つてゐるといふ風に思つてゐられるのでせう。また夫人から見れば赤の他人、中途からトルストイの近づきになつた人が、間に入つていろいろな文句を言ふといふ譯ですから、随分情けないやうな、物足りないやうな、非常に譯の分らない、不都合な、理窟に合はないことを言はれるといふ感じをされた點もあつたてでありませう。そんな事でゴタゴタして居つて、僅かに發表されてゐるいろいろな材料から見ても、丁度「懺悔」を書

いた頃から、何だか雙方の反が合はないで、トルストイの方ではもう段々に家庭生活などから離れて、もつと廣い、人間全體の問題、——自分の私財も、何も棄てて、もつと大きな廣い人間全體の問題といふやうな方面に向つて、幕地に進んで行かうといふ傾向を持つて來た。夫人はそれに同意しない譯ではない。けれどもそれだからと云つて、全然家庭の問題を閉却されて——子供の教育の事も、子供の教育に必要な財産や資金の事も、毎日の生活に必要な収入の事も全く打捨ててしまつて、全體の財産を農民に分けてやるやうな事になればどうするか、子供が路頭に迷ふやうなことになる。かう云ふ風な事から段々その間に家庭生活の龜裂を生じて來た譯であります。

### 三

御承知の通りトルストイの結婚は、唯僅かに見合ひをして、親が選んだ細君を貰つたといふのではなく、トルストイ自らが懸念にして居つて、出入をして居つたベルスと云ふモスクワの侍醫の娘さんで、ソフイヤ・アンドリエーヴナと云ふ、大變年の遠ふ娘さんであつたが、この人を戀して、花嫁の親御の反對があつたけれどもトルストイの方で非常に熱心であつたため、遂に承諾を得て結婚をしたわけであります。尤も決してトルストイだけがその娘さんを戀したのでなく、ソフイヤ・アレドリエーヴナの方でもトルストイを戀してゐた。唯一層熱烈であつたのはトルストイであつた。これに應ずるだけの感じは勿論ソフイヤ

ヤ・アンドリエーヴナの方でもあつたのであるから、全く自然の結婚であつたといはなければならぬ。その結婚以前のトルストイの日記にかういふことが書いてある。——是はまだ發表されていない部分だらうと思ふ。日記が書物となつて出てゐるのは二冊で、日本でも一冊出て居ります、がこの頃の日記はまだ出てゐないと思ふ。その日記にかういふ事が書いてある。自分は實際結婚することになつた。けれどもこの結婚は本當の愛の結婚でなくして、自分が唯愛を欲してゐるからではないか、眞の愛ではないのではないか、といふことが書いてある。戀を戀してゐるのではないかといふ疑ひであります。トルストイは、自分の容貌の醜いことを知つて居つて、それを非常に苦にして頻りに苦心慘憤しておやつしをするけれども、自分の醜い事は變らないので、非常に煩悶した。それはトルストイの書いた懺悔録の中にも書いてあります。その醜いトルストイが可なり年をとる迄結婚しないでゐて、初めてさういふ風に戀愛が成り立つて結婚する事になつた時、自ら顧みて、これは本當の戀愛でなしに、戀を戀してゐるから、それで熱心になつてゐるのではないか、といふことが書いてある。これは或はトルストイの自己解剖辭から自分の生活を無暗に内省し、無暗に解剖し、分析して見るといふ弊に陥り過ぎた考へ方であつて、實際はやはり純粹の戀であつたといふべきでありませう。けれどもかういふ風な不安が、既に結婚をするといふ前の、悦びに充ち満ちてゐる時にあつたといふことは、この戀愛が不自然であつて、戀を戀するものであつて、本當の戀愛でなかつたといふことの證據にはならないとしても、又さうではなかつたでありませうけれども——自分が結婚するといふ悦びに、夢中に浸つてゐるやうな時でさへも、自分の未來の家庭生活、自分の愛する人に對する感情を、それ程に分析しそれ程に内省して見なければならぬやうな性質を、トルストイが持つて居つたといふ證據には少くともなると思

ひます。即ちトルストイが分析解剖的な内省自責の傾向を持つて居つたといふことが、明らかに分ると思ひます。さうして又殆どそれと同じ頃の、餘り日の経たない頃の日記に、自分は實際友人がない、全く友人と云ふものはない、孤獨である。本當に自分が眞理に仕へて、眞理の生活をしようとする程孤獨である。眞理に於いては友人といふものはない、といふ絶望的な、普通の場合とは反對に考へられる事が書いてある。表面の利害關係で嘘を吐き合つて、誤魔化し合つてゐても、眞理といふものの中には、その眞理に依つて結び附いて、眞の友人になつて握手すべきであらうといふ風に考へられるわけであるけれども、トルストイの書いたものは、眞理に仕へれば仕へる程孤獨になるといふことが書いてある。是も家庭の生活を中心として考へればかういふ風な感じを懐くやうな人が、トルストイのみならず、一般の男子にも或はあるかも知れないと思はれます。かういふ風な點から考へて、結婚以前に既にかういふ感じがトルストイの心の中に在つて、自分の妻との間に不和、或は理解のしつくり合はないといふ風な點が出来はしないか、さういふ風になつていきはしないかといふ點を豫想され、また今日から見るとさう見られさうな材料があるのです。しかしながらトルストイ自身さういふ風なことを常に思ひ續けてゐたわけでは勿論なく、家庭の幸福に醉つてゐた頃の日記の中には、いろいろ自分の内面の生活を反省してみても、絶望的な時があるけれども、しかしながら本當の救ひは矢張り自分の家庭だ、家庭の生活がなかつたならば自分は駄目だ、非常に精神的に意氣沮喪してしまふだけでなく、肉體的にも弱つてしまふであらうといふやうなことが書いてある。家庭生活の幸福を重大視して書いてあるやうな日記が、永く續いてゐます。

## 四

トルストイは結婚後非常に創作熱が盛んになつて、「戦争と平和」といふ、トルストイの作中で最も長い、又近代の世界文學の中で最も浩瀚なものでもあるし、同時に又力の入つた立派な作品であると謂はれるこの大作を書いたのは、結婚して間もなく手を着けて、ソーフィヤ・アンドリェーヴナ夫人の援助に依つて出来たものであります。今迄落着かない、何となく不安な生活から、結婚生活に入つて初めて落着いた、幸福な空氣の中で、落着いて仕事が出来るといふ氣分になつたわけでありませう。本來トルストイ自身が家庭生活の悦び樂しみを享受し得なかつたといふわけではない。けれどもそれが長く續かなかつた。十五年位は割合に平靜で、割合に落着いてゐたのですけれども、段々それが續かなくなつて、結婚以前から持つてゐた社會的——殊に農民勞働者、ロシアの農民は殊に悲惨な生活をしてゐる、その無知な貧しい農民の生活を高めなくてはならぬといふ方面に、専ら興味を向けに行くやうな風になつて、そこで非常に著しい、これといふことはなかつたけれども、細かい、デリケートな點で、家庭の中で何だか調子が合はないやうなことが出来た。例へばソーフィヤ・アンドリェーヴナ夫人の書いた物を見ますと、折角今日は、夏の非常に靜かな、草や木の葉の香などが、何處からとなく野原の方から來るやうな、非常に良い空氣の、靜かな晩であるから、今日の晩餐はバルコニーの上へ出してそこで食卓を拵へて、皆一緒に食べようと、いろいろ御馳走を拵へて準備

をして居つた。そこへトルストイが出て参りましたが、非常に不機嫌さうな顔をしてゐるから、夫人が「あなたは一體どうしたのです。皆貴方を愛してゐるのに、どうしてそんなに不満足なやうな、浮かないやうな顔をしてゐるのですか」と尋ねた處が、トルストイは非常に不機嫌さうな顔をして、「御馳走が澤山あるから、御馳走さへあれば私が悦んでゐなくちやならぬとでもいふのですか」と、さういふ風な意味の事を言つた。夫人の方ではトルストイが出て来れば、如何にも好い晩で、楽しい愉快な晩餐だと云つて、悦んでくれるだらうと思つてゐた。平生見なれた景色よりも——トルストイの家では、夏は何時も庭の櫺（かざり）の大きな木の下で御飯を食べてゐたのですが、その晩に限つて餘り靜かな晩であるから、二階のバルコニーに食卓を拵へて、同じ庭先の景色でも見る處が違へば別な景色に見えて、悦んでくれるだらうと思つてゐたのに、さういふやうな、トゲトゲしいやうな言葉をかけられて、自分の好意を容れられなかつたといふやうなことが書いてある。斯様な事が段々多くなつて来た。その背景には詰り、トルストイが夫人のさういふ苦心を理解する程の餘裕がなかつたのかも知れない。他の問題に専念没頭してゐて、或は晩餐に呼ばれると食慾がないけれども出て来る、どういふ御馳走もどういふ家庭のことに興味を惹かれないで、機械的に物を食べてゐる。食慾がないけれども、勤められるから心配をかけない爲に、いくらかでも食べるといふやうな結果になつた。家庭のちよつとした、十分か二十分で消えてしまふやうな事であるのでせうけれども、さう云ふことが段々重なつて来て、夫人に取つては、今迄翼に自分を包んでくれてゐたやうな感じから、突き放されたやうな感じになつて来たといふやうなところが出来て来たのです。ところでトルストイ自身は家庭の問題をどういふ風に考へてゐたかといふと、日記に書いてある處を見るに、要するに家庭と云ふものは肉の生活である。家

庭は丁度自分の身體に譬へて言ふならば、自分の肉體である。吾々が自殺をしたいと思ふ事が屢々ある。その自殺をしたいと思ふその事は、第一の誘惑である、トルストイの言葉に依れば第一の誘惑である。それから家庭は丁度人の身體に譬へれば肉體なのだから、その肉體から離れて、即ち家庭から離れて、自由に自分の思ふ事を、十分に徹底的に思ひ、したいと思ふことを徹底的になし遂げて行かうといふためには、家庭から離れなければならぬ。家庭から離れるといふことは、肉體を殺す、第二の自殺である。さういふ風なことが言つてある。第一の誘惑即ち自殺するといふ氣が屢々あつても、やはり實行し得ないと同じやうに、家庭から離れるといふ第二の自殺も實行しては行けないといふ事も書いてある。これを解釋してみれば、トルストイは自分の行くべき道について不明確で、何となく家庭から離れて行きたいといふ心持もあり、自殺したいといふ心持もあるけれども、之を決定するだけのつきりした明確な、自分の進むべき道を、見極めてゐなかつたからであらうといふやうな見かたも、トルストイを論ずる人の中にあるのです。又さうに違ひないかも知れない。けれども段々家庭の問題に關聯して煩悶が烈しくなつて来て、農民の問題とか、一般世間全體の社會生活、國家生活をどうするといふやうな問題の中に、徒らに家庭の問題、全體の世界から見れば非常に狭い、小人数の、せいぜい九人か十人位の家族、——一體トルストイの家は大家族だと言はれてゐた、ソフイヤ・アンドリエーヴナ夫人は御承知の通り十六人の子供が生まれました、その中亡くなつた人があつて、今何人生きてゐるかといふことは今たしかに覺えて居りませぬが、多分十人位生きてゐるかと思ひます。兎に角十六人といふものは多産の方である、身體も立派な人で長壽をして居られたから十六人も生れた、普通の家なら大家族の方であるが、世界全體から云へば極く僅かな人間である、——さういふ風な家庭の事が

段々チラ附いて、前に述べました晩餐の時のことか、或は十分か二十分で消えてしまふやうなちよつとした家庭の事が、自分の肝腎な問題、トルストイ自身の精神生活から考へずにはゐられない大きな問題の中へ、目障りにチラチラ入つて来る。トルストイのやうな、精神的にも非常に深く、細やかに、分析的、解剖的に考へる人であると同時に、肉體的にも非常に感性的に鋭敏な人に取つては、一層目障りになつて来る。その點は可なり深い細かい點までいろいろの刺激を感じるやうになつただらうと思ふ。また實際トルストイがさういふ感性的な刺激を周囲から受け易く、感じ易く、ちよつとした事にも非常に鋭敏に煩悶して、不愉快に思ひ、鋭く感ずる鋭敏な感ずるを持つてゐなかつたならば、立派な藝術は出来なかつたに違ひない。理窟ばかり言つて、社會救済的思想家でのみあつたなら、あの立派な藝術は出来なかつたに違ひない。トルストイ全體の業績としては、少くとも私はさう云ふ思想家としての方面よりも、藝術家としての方面のトルストイの方が、立派な仕事をしてゐると思ふのであります。勿論思想家としてのトルストイの仕事は詰らないと云ふ譯ではないが、その點には随分缺點もある。又物足りない點もある。しかし藝術家としての方面のトルストイには、殆ど、世界にいろいろの文學者があつても、之を凌駕するやうな人は先づないといふやうな、立派な作品が澤山出てゐる。思想家としてのトルストイには反對する人があるけれども、藝術家としてのトルストイに向つて、こんな詰らない物ばかり書いたと言ふやうな人は恐らくないだらうと思ふ。さう云ふ點から考へても藝術家としてのトルストイの方が、遙かに興味が深いと思ふ。それでその點はやはりトルストイが唯の道德家、人道主義者でなくして、表面の、細かな、いろいろな日常生活の事にも刺激され、影響を受け易く、感じ易いやうな性質、もつとつき詰めて申すならば或る意味で女性的な性質をも持つてゐたといふ

ことを認めなければならぬ。日常のつまらない出来事をも無視してしまへないやうな、口には言へない、表面には煩悶しないでも、心に苦痛を感じ、悦びを感じるといふ感じ易い性質を持つてゐた事は事實でありませぬ。目の前の一般世間の多數の農民、——アメリカに行つてゐるロシアの移民とか、或は世界全體の人であるとかいふ風な人の事よりも、差當り眼の前で十人か五人の家族の者が、いろいろな文句を言つてゐる事が、可なりトルストイに強い刺激を與へ、強い苦痛を與へただらうと思はれる。トルストイが普通の人間以上鋭敏に外部の細かな刺激をも感ずるやうな人であつたと見ることが、本當のトルストイに對する理解ではないかと思ふ。トルストイといふ人は詰らないことで、例へば晩餐の事とか、机の上の事とかいふやうなことで、不機嫌になつたり、感情を損つたりしなかつたと思ふのは、トルストイを良く思ひ過ぎて、結局理解しないことになつて来る。とにかくそれが善いか悪いかは別問題として、それがトルストイの本性である。どうかしてこの苦痛を解説しよう。そんなことを苦痛と思ふのは自分が非常に苦しい。けれども自分に對言ふ事の出来ない人であつたから、従つて自分がつまらないことで不愉快であればある程さういふ自分に對して鋭敏に不愉快になつて来ると云ふことが、常にあつただらうと思ふ。だからそこにはそれを解説し超越して行かうといふ非常な努力があつた。トルストイの名前のレフと云ふのは、ロシア語の獅子と云ふ意味で、獅子のやうな努力、獅子らしい非常な努力で自分の弱點に打ち克たうとした。その努力したといふことはその底に弱點を持つて居つたといふ事に依つて、一層意味があり、又吾々に理解されるし、興味がある。さぞ苦しかつただらう、超越するために大なる努力を要しただらうといふことが、一層深く、細やかに理解出来るわけでありませぬ。つまり家庭の非常に細かい、デリケートな日常生活が、トルストイには可なり重大な意



味を持つてゐたといふことを理解すべきだと思ひます。殊に夫人が決して初めから仲の悪い妻でなく、前申したやうな關係で夫婦になつて、さうして、トルストイの多數の作物の上にも力を貸し、家庭生活の上にも經濟上にも、主婦として母としてこれ程に授けた人は實際少いでありませう。さういふ點も亦トルストイは認めてゐたのでありますから、自分に取つてはさういふ大切な、親しい妻を中心として起る家庭の不和、不満足ないろいろの問題が、尙更彼を苦しめたといふことは、十分想像されることでもあります。

## 五

トルストイとソフィヤ・アンドリエーヴナとの關係で、殊にソフィヤ・アンドリエーヴナがトルストイに對して、不満足といひますか、或は初めて驚きを感じるといふやうなことになつたのは、トルストイが書いて居つた日記を、偶然夫人が見るやうなことになつた頃からであります。トルストイは今までは、決して自分の机の抽斗ひらの錠をおろしたり、錠をおろしても鍵を隠してゐたりはしなかつた。鍵を直ぐ机の傍に置いてあると云ふやうな風であつたのに、或時トルストイがゐない時に夫人が夫の書齋に入つて、何か本を捜してゐたが、その時偶然机の何處から落ちたか知らないが、抽斗の横の方へバタリと何か落ちた。何だらうかと思つて見るとそれは小さな鍵であつた。變な處から鍵が落ちたと思つて、何だかそれが隠されてあつたやうに思はれたので、それで抽斗を開けて見ると日記があつた。その日記を開いて見ると、ちよいちよい

自分の名前が出て来るから、遂に興味を持つて讀んで行くと、自分の非難が非常に書いてある。今迄日記などを隠したり何かしなかつたのに、それが隠してあつて非常に悪口が書いてある。どんな悪口であつたかそれは世間には分つてゐませんが、兎に角悪口が書いてあつた。それで夫人も非常に心外に思つて、こんな風に子供はあるけれども、一時は家出をしようと思つたといふ、その事は夫人自ら人に話した事なので、さういふやうなことがある。それからまたかういふこともある。これもよく一般に知られてゐる事實でありませう。「クロイツェル・ソナータ」といふ小説、この小説は多分お讀みになつておいでせう。家庭問題、結婚問題、結婚の幸福に関する疑問を、非常に極端に、鋭く表白したトルストイの作品であつて、有名な作家です。その「クロイツェル・ソナータ」に就いての話です。——トルストイの家はモスクワから少し離れたカールガ縣の方で、中部ロシヤの田舎村なのです。地主の家ですから立派な家ですが、周圍には百姓の堀建小屋があるきりで、非常に寂しい處で、何にもない處なんですから全く楽しみはないし、芝居や音楽會といふやうなものは冬を中心としてモスクワにあるところから、冬の間は一家がモスクワに出て来る。モスクワの街端れのハモウニカといふところに来てゐます。或る冬夫人がモスクワに来てゐた時、やはりトルストイ崇拜者の一人の或るドクトルが訪ねて來た。丁度トルストイはそこにゐなかつたので、夫人といろいろな話をした。その時に「クロイツェル・ソナータ」の話が出て來たわけですが、その醫者がソフィヤ・アンドリエーヴナ夫人に向つて、「貴女はあの小説をどういふ風にお考へになるか」と尋ねると、夫人は「あればかりはどうも我慢がならない。あんな厭な小説はない」と顔色を變へて、唇を震はして言つた。さうして、「私は、あの小説に書いてあるやうなことは、餘りひどいと思つたから、自分もあれに對抗する小説を書い

た」といふやうな答をしたのです。「クロイツェル・ソナータ」の内容は、或はお讀みになつてゐるかも知れませぬが、極く簡単に言へば、詰り結婚は結局不幸に終るといふ風な意味で、或る家庭に起つた姦通事件を中心としてその夫が妻を殺すといふ事實を、その殺した夫の口から、汽車に乗り合せた人に話をするといふ風に書いてある。結局結婚は不幸で、本當に男女が理解するといふやうなことは、豫期し難い事であるといふやうな、結婚に對する否定的の意見が、その妻を殺した男の口から猛烈に出てゐる。これは同時にトルストイのその頃の考へであつたらしい。トルストイも後には、結婚否定の考へが餘りに猛烈で、極端であると思つたか、幾らかこれに辯解を加へて、緩和したやうなことを書き加へてゐます。けれども大體に於いて結婚に對してさういふ否定的の考へを持つて居つたといふ事になつてゐる。さういふわけですからソーフイヤ・アンドリエーヴナ夫人が、とてもあの小説だけは我慢がならないと云つて、それと反對の意見の小説を書いた。けれどもそれを出版すれば、自分の良人の作品に就いて非難を加へる事になるから、出版はしないと話した。ドクトルは、あの小説は立派な文學上の作品だと頻りに辯駁した上に、「貴女は幸福な結婚があり得ると思つていらつしやるか。」「それは無論ある。第一の證據は自分達である。自分は非常に幸福な結婚をした。子供は澤山産むし、長い間夫婦になつてゐて、幸福な結婚である。これが證據である。」醫者は「それはさうでない、さうは思へない。貴女が本當に自分達夫婦の生活が幸福だと思つていらつしやるならば、何故自分の良人の書かれた物に同意をなされぬか、貴女の良人が本當だと信じてゐる信念を發表された作品に對して、あれだけは我慢がならないと言つて極端に反對して居られるではないか。その點に於いて貴女御夫婦の意見の一致がない。しかもそれが他の問題ではない。結婚が幸福であり得るや否やといふ、貴

女御夫婦の生活をも含むところの問題である。その結婚の問題について良人の書かれたものに反對してゐながら、自分達が幸福な結婚だと云ふのはその意を得ない。」と、かう言つて詰つた。さうしたらソーフイヤ・アンドリエーヴナ夫人が「しかしそんなことを言つても、それだけでは判斷は出来ない。私たちは長い間一緒に住んでゐる——その頃は丁度十五年ばかり経つた時です——十五年も一緒に住んでゐて私はトルストイの言ふことは信じてゐた。トルストイの言ふ通りになつて柔順にして來た。例へばトルストイは非常に氣分の變り易い人で、長男に向つて、ギリシャ語を習はなければならぬと頻りに熱心に勤める。さうして自分自ら教へてやるかと思ふと、何時の間にか、古代語なんて詰らない、ギリシャ、ラティン語なんかはくだらないと言つて、全然反對して止さしてしまふ。さういふ風な事をやつてゐる。その邊の事も一向自分には分らない。けれども自分の信する良人のする事であるから、反對もしないで、子供の教育に就いても自分の意見を主張したりなんかはしない。すべてのその他の點に就いてもトルストイの意見を尊重して來たのである。けれども近頃になつてはトルストイは私を捨ててしまつた、今まで私はすつかりトルストイに同化して、共鳴し一致して來たのですけれども、最近になつて自分の良人は自分を捨ててしまつた。今まではそんな事はなかつたのだ」と、涙を浮べて醫者に話した。さうして言ふことには、「トルストイは私に對して丁度五十ブード——ブードは日本の重さにして四十三斤に當りますから、五十ブードといふと何十貫目と云ふ大變に重いものです——その重い物を自分で持ち上げよといふやうなものです。何故かといふに、財産を全く捨てて貧民に分ち與へるといふことを主張する。けれども今の財産を全く貧乏人に與へてしまつたならば、吾々は路頭に迷はなければならぬ。五十六十になつた吾々が何をして食つて行くか、勞働するといふわけに

はともいかない。さうして子供は九人もある。その子供をどうして養つて行くか、さういふ不可能なことを、トルストイは私に對してはならないと云ふやうになつて來た。つまり私の立場、家庭に於けるいろいろな苦心といふものをトルストイは認めないで、見捨ててしまつたことになつて來た。それ迄はそんなことはなかつたのだ。」と、涙を浮べて自分の衷情を話された。さうするとその醫者がなかなか負けてゐない——かういふと殊に無遠慮に聞えますが、それはこの話し方が悪いからさういふ感じをお起しになるかも知れませぬが、原文に依ると決してさう不自然には見えない。——お醫者さんはまだそれに従はないで、「それでは貴女はかういふ風な考へですね、自分の幸福のために必要な財産さへ保管して置けば、自分の良人はなくともいいのですか。良人は自分を捨てた、良人の意見は自分と合はない、良人に一致して行く事は堪へられないと言つて、良人を貴女の方から家庭的に捨てた譯だ。良人を捨てても自分及自分の子供達を維持して行くだけの財産があれば、幸福は全くされると思つていらつしやるのですか。」と皮肉な調子で訊ねた。夫人は「しかし私だつてそんなつもりで言ふわけではない。今は殆どすべての事が自分の手で行はれてゐる。例へば出版者と印税の交渉であるとか、或は地主としての上り高の問題、小作人との交渉、子供の教育の問題、或は家庭の召使や、お客に對する心遣ひや、或はトルストイ自身の書齋とか、寢臺、食物、衣服、これ等の身の廻りの心配とか、皆それ等は自分の手でやつてゐるのです。尤も勿論私に九人の子供がなければ、私は疾くにトルストイの言ふ通りになつて、若しトルストイが自分の家を捨てて他處に姿を晦まさうといふことになれば、私もついて行つたかも知れない。けれども九人の子供があるからそれが出来ないのだ」と云ふことを言つた。かういふ風な事が書いてあります。

此の極く簡単な問答から考へても、お醫者さんが言ふところの、貴女は幸福と思つていらつしやるが、さう幸福ではない、良人に一致し得ないではないかと云ふのはたしかに理窟でありませう。それに依ると、ソーフィヤ・アンドリェーヴナ夫人は、全く自分の家庭生活の幸福は空虚な内容のないものであつて、初めから自分だけで幸福であると思つてゐたのに過ぎないといふことになる。理窟から言へば確かにさういふ結論になるべき筈のやうであるけれども、それはさう簡單には言へないと思ふ。この問答だけ聞いてみますと、お醫者さんの言ふ事は理窟に叶つてゐるかも知れないが、理窟だけで問題が解決されて、すつかり後に残らないやうになつたとは思へない。また、良人の意見に合致し得ない、自分の意見が合はなくなつたからといふので、良人の言ふことには従はないで、財産を保留して置いて、財産さへあれば良人はなくとも幸福だと思ふか、といふやうなことは、餘り理窟に過ぎてゐると思ひます。理窟だけではトルストイと夫人との二人の生活を、——細やかな、デリケートな關係で出來てゐる夫婦の生活を十分に見る事は出來ない。しかしながら確かにその理窟も一理である。ただそれだけで、二人の夫婦生活を解決し得ないといふ點に、實際の問題として、簡單にはソーフィヤ・アンドリェーヴナ夫人を責めるわけにもいかないし、またトルストイだけの責任にするわけにもいかない、いろいろの問題が含まれてゐると思ふのであります。

トルストイ自身は細君に對する一般的問題として、こんな風なことを人に言つてゐる。——自分の妻が自分の言ふことを聴かなかつたり、詰らないことを聞いたり、我儘を言つたり、わけの分らないことを言つたりした時にはどうしたら宜いかといふと、その時に夫の方でそれに對抗して行けば——妻の言ふこと、妻の不道理が七であれば、之に對して行く夫の不道理が七とすると、その七と七と加へて十四になると云ふのでなくて、その場合には七に七をかけることになる。即ち七七四十九になつて、騒ぎが大變大きくなるのだ。さういふ場合にはこちらは零で行けば宜い。こちらが零ならば幾ら先方が七をかけても零になる、——かう答へた。そこでその人が、それはどんな風な事をやれば宜いのですかと聞くと、何でもないと言つて非常に機嫌の好い顔をして、如何にも自分が面白い事を言つてゐると言ふことを、自分で感じてゐるかのやうな顔をして、「それは詰りかういふことをすれば宜いのだ、妻が夫に向つて、何か面倒な事を言ひかけて來たら、夫の方ではそれに返事をしないで、お前の着物にシミがあるよと言へば、問題はわけなくなる。」「けれどもさうばかりはいかないでせう。」と客が突き詰めて言つたら、トルストイも再び眞面目な顔をして「それはその通りには行かない。行かないところに困難があるよ、私もその事で困つてゐる。」と言つたといふことが書いてあります。さうしてトルストイは「要するにかう思へばよい。遠方から來たお客さんで、今晚泊

つて明日は立つのだと思つてゐればよい。むづかしく言ふ必要はない。丁寧に、大切にしなければ宜いぢやないか、さう思へばよいのだ。」とかう言つた時に、トルストイの顔は、面白い事を言つてゐると云ふやうな元氣な機嫌の好い顔色は無くなつて、曇つて來たといふことが書いてあります。是等の断片的な事實でも、トルストイの家庭生活と云ふものが、決してお弟子達が言ふ如く、夫人が悪いのだと一概には言はれない。複雑な關係があつたといふことの材料になる。トルストイと雖も初めから、ソフィーヤ・アンドリエーヴナ夫人が自分の思想に合はないとか、一致しないとかいつて、常に冷淡に、常に不機嫌であつたわけではない。非常にソフィーヤ・アンドリエーヴナを深く思つてゐた。千九百十年に先程申した如く、トルストイはアリエクサンドラと云ふ自分の一番末の娘に、自分の手紙、或は断片的な書きかけの原稿のやうな物、その他一切自分の書いた物を委託して家を出たのですが、その時は無論ソフィーヤ・アンドリエーヴナ夫人はこれを知らない。唯アリエクサンドラだけがその事情を知つてゐた。朝非常に早く、暗い中に馬車を仕立てて、ザセッカといふ停車場から汽車に乗つて、西の方へ旅に上つたのであります。その家出をした後、後で嗚自分の妻が驚くだらうといふ事を心配して、それ程決心して家出をしたのであるが、その事だけは非常に心配したと見えて、末の娘のアリエクサンドラに「自分が家出をした後に最初に行き着く場所は、妹の尼さんになつてゐる人のゐる修道院であるから、そこへ家出を知つた後の妻の様子を知らして貰ひたい。」と言つて、そこへアリエクサンドラの手紙を持たしてよこさせたといふやうなことがある。弟子たちが見てゐるほどには、決してトルストイが夫人に對して冷淡であつたと云ふやうなことはなかつた。日記に夫人の悪口を書いてゐたかは知らないが、そればかりで判断するわけにはいかない。それでトルストイが家出を

した後に、ソフィヤ・アンドリエーヴナ夫人がそれを知つて、邸内に二つ池がある、その小さい方の池に身投をした。それをトルストイの秘書であつたブルガーコフといふ人とアリェクサンドラの二人で引き揚げて助けた。この事は何にも書いてはありませぬが、私が直接ブルガーコフ君から聞いた話であるので、そのやうな事があつた。さうしてトルストイは遂にアスターボフと云ふ小さな田舎の停車場で病氣になつた。それは三等の箱に乗つてゐたのですが、坐つてゐるところがなくて、汽車の箱の外に立つてゐた、そのためか風を引いて、アスターボフで病氣になつて動けなくなつたといふわけであります。その時にトルストイは自分が病氣になつたといふことを、ソフィヤ・アンドリエーヴナに知らして貰ひたいと云つて、電報を自分で書いた。それは私は病氣で今ここにゐるけれども、来てはいけない。心配する事はないから来ないでゐてくれ、愈々の事があれば呼ぶからといふ電報を書いて出すまでになつてゐた。その中にソフィヤ・アンドリエーヴナの方ではその事を知つて既に來てしまつた。そこで仕方がないから、その汽車がアスターボフの驛に着いて、汽車から降りない中に、トルストイの子供の中の一人がその出す管になつてゐた電報を示して、「これを今貴女に打たうといふところであつたのです。そこへ貴女がおいでになつてしまつたので、今お會ひになつては、お父さんの方でも興奮されるだらうし、貴女も興奮されるだらうし、病狀を心配してゐるところだから會はれない方が宜い。」といふので、ソフィヤ・アンドリエーヴナの方でも、醫者からも今會つては却つていけないと言ふので逢はないでゐました。けれども堪らなくなつて、驛長の一室を充ててあつたその病室の外へ行つた——その病室は、粗末な模型が、その時の儘になつてモスクワのトルストイ博物館の一室になつて居ります。その時の儘のランプ、外套だの、藥瓶だの、霧を吹くゴムのやうな物、トル

ストイの毛布とか云ふやうな物、ベッドは壁の處にあつたのですが、そのベッドの上に寝てゐたトルストイの壁に映つた影を隈取つてあつたりして、その時の様子をつくりその儘の模型があります。——その病室の外へ出かけて行つて、透見でもしようかと思つて行つて見ると、何だか硝子越しに人の物腰などが聞える、何か着物の端などがちらちら見えるが、何も内の様子は分らない。けれども堪らなくなつて寒い日に毎日のやうに立つて見てゐたといふやうなことがある。要するにトルストイは自分に會ひたいと思つてゐるのに他の人が會はせないのだ。本人はソフィヤ・アンドリエーヴナが、アスターボフに來てゐるかゝるか知らない。ソフィヤ・アンドリエーヴナは家に待つてゐると思つてゐる。だから今直ぐそこにソフィヤ・アンドリエーヴナが來てゐると云へば、きつとそれや會つてやらうと言ふに違ひない。それなのに周囲の者がそれを知らさないから、トルストイの方では會つてやらうと思ふ筈がないぢやないか、といふ風に思つて、會はしてくれない周囲の人々に對して、非常に不満足不愉快で、自分をトルストイの最後迄會はさなかつたと云ふことを、呪ふやうに周囲の人々に對して考へてゐた。今でもさう考へてゐるやうに思はれます。といふのはソフィヤ・アンドリエーヴナ夫人を訪問した初対面の日本人に向つて、涙を流して、私達の夫婦の間を抑へたのはチュルトコフである。是は親類にもなるけれども、元はお弟子のトルストイの崇拜者で、トルストイの出版物に對して最も骨を折つた人だ。そのチュルトコフが私たちの間を割いた悪魔だと言つた。これを聞いたのは大阪毎日新聞の黒田乙吉君と山本鼎君との二人です。

トルストイ夫妻の關係は、今迄極く簡單に断片的にお話しただけであります。これだけの事をお話しても——徳富さんの事をここで彼是申すのも變なものです。——徳富健次郎さんの夫人に對する非難の手紙も、餘りひどいやうに思ふ。あれをトルストイが讀んだならば、「さう言つてくれるな」と言つただらうと思ふ。吾々もさう云ふ風な心持で、トルストイ夫婦の關係を、もう少し材料を集めて、例へばトルストイの作品や、生活や、夫人の書かれた物など澤山發表されて見た上でなければ、非常に微妙な夫婦關係、殊に大きな、勝れた、普通の人でない人の夫婦關係といふものは、さう簡單には分らない。問題の事實がはつきり分つて来る事が何時か分らないけれども、今までにあるだけの材料から考へても、やはり、トルストイが「クロイツェル・ソナータ」で書いてゐるやうな結婚問題、結婚の幸福とはどういふ點に在るか、男性と女性、現在のやうな社會組織で現在のやうな教育の状態で、本當の理解とか、本當の提携とかいふ上に、何處迄行き得るものであるかといふ事も疑問であると思ふ。私自身もさう思つてゐる。本當の理解とか、何處迄も一緒になつて行くといふやうなことは、出来るか出来ないか。或る程度で止まつてゐるならば、無論提携も理解もあるけれども、トルストイのやうに、自分の行く道を何處迄も追求して行くといふことになれば、果してそれまで提携して行くと云ふことは現在一般の婦人の教育、社會組織から言つて出来ることであるか

どうか。財産の問題、婦人の社會上の位置、婦人の取扱といふ問題から考へても、實際それを婦人に向つて、お前たちは附いて來なくてはいけないと云ふことを責める前に、先づ社會全體の問題として考へざるを得ないやうな理由が、いろいろな方面に潜んでゐるのではないでせうか。吾々平凡な人間の生活に在つても、同じ種類の衝突、不満足、不一致と云ふことが、確かにあり得るだらうと思ひます。徹底的の結婚の幸福と云ふことは、現在に於ては豫期し難いやうな感じもする。全部しつくり合致して、水も漏さないといふ風なところまでは、なかなか行きにくいやうな感じもする。いろいろな我慢をして、辛抱するといふやうな點で行はれてゐるのが、普通の家庭生活ではないかといふことを感じます。トルストイの家庭の事實を見れば、その事實の原因は何處にあるか、それは夫人が悪いのだ、夫人の理解が足りないのだとかう簡單に言つて、非難をする事は出来ないやうに思ふ。ソフィヤ・アンドリエーヴナはベルスと云ふ宮廷の侍醫の家に生れて、小さい時からお嬢さんで育てられて來た人である。とにかくロシアの貴族から伯爵の家へ結婚して來た人であるから、そのソフィヤ・アンドリエーヴナに、トルストイの主張を實行する事に賛成して、あらゆる故障に打ち克つて、實行しなくてはいけない、子供の教育が心配ならその子供も財産がなくても生活し得るやうに訓練し、教育すべきであつたといふやうな事を要求し非難するのは、少し無理ではないか。そこにはいろいろな社會組織や制度の問題があつて——無論トルストイとソフィヤ・アンドリエーヴナとは一般の夫婦關係に比べると優れた夫婦であつて、いろいろな問題は自ら解決し易かつたでありませうが、さういふこととでなくして社會の組織、經濟問題、財産處分問題、子供の教育問題、——若し子供がゐれば世間で誰が子供の教育を引き受けてくれるか、子供の教育は社會全部が共同の責任とすべきものであるといふやうな問

題にも觸れて来なくてはならぬと思ひますから、このトルストイ夫妻の問題は、決して二人の間の理解の有無だけで解釋のつくほど簡單なものではない。現在吾々がぶつかりつつあるやうないろいろの社會問題に、おのづから觸れざるを得ないことになるのです。さうしなければソフィーヤ・アンドリエーヴナに對する理解も足りない、同情も足りないことになるかと私は考へるのであります。問題はすつとひろい意義を含んでゐると考へるのであります。

## トルストイ著作解題

### 一

幼年の頃 少年の頃 青年時代 千八百五十一年の夏、トルストイは兄ニコライ・ニコラーエキッチに從つてカフカズ地方に赴いた。或はスタログラードフスカヤのカザツクの村で、或はストールイ・ユルトで、或はまた温泉地のビヤチゴルスクで、彼は義勇兵として山地の住民の方へ侵略を試みたり、軍務に身を投ずるための試験を受けたりする隙々に、その處女作「幼年の頃」を書き續けた。千八百五十二年の舊ロシア曆七月二日（七月十五日）に、ビヤチゴルスクで、書き終へ、數日してベティエールブルグの雑誌「現代人」へ送つた。最初の標題は「吾が幼年の頃の物語」としてあつて、署名はただレフ・ニコラーエキッチの頭文字のLNの二文字だけであつた。

舊ロシア曆八月二十八日（九月十日）に、待ち兼ねた「現代人」の主筆ニクラーソフからの返書が來た。「その手紙は自分を馬鹿になつたやうに喜ばせた」とトルストイ自からその日記に書いてゐる。

足下、貴稿（幼年の頃）は一讀致し候。物語は頗る興味あるものなれば紙上に掲げ申べく候。續稿を拜見せざれば確かなることは申し上げ兼ね候へども、この作者には天分ありと考へられ申候。何れにしても、作者の傾向、即ち素材と内容の眞實とは、この作品の奪ふべからざる價値を成し居り申候。もし續稿に於いて（當然期待すべきが如く）更に生氣と動きとの一層加へらるるあらば、この作は小説の佳品たるべく候。何卒續稿小生宛て御送附被下度、貴下の作品も天分もともに小生の心を牽き申候。尙頭文字にて匿名になされず、最初より直ちに本姓を誌上に出だされ候方、もし貴下にして文壇一時の客にあらずば、然るべしと御すすめ申上げ度候。御返事待入候。敬具。

エヌ・ニエクラソフ

それから一と月して、舊ロシヤ曆九月五日附の第二の手紙が届いた。

足下、前便御作に就いて申上置候處、尙更に數言を呈する事を自己の義務と存じ申候。御作は「現代人」第九號のため印刷へ渡し、手寫の原稿にあらずして校正刷にて精讀いたし候處、御作は最初小生の思ひしにもまして遙かにすぐれたるものなるを發見いたし候。作者に天分あることは明確に申上げて差支なし。この點の確信は、初歩の人としての貴下にとりて目下何よりも重要事と存申候。御作を掲げたる雜誌「現代人」は明日ベティエルブルグにて市に出づ可く、御手許へは（足下の宛名にて御送り申候故）多分約三週日後ならでは届くまじ候。御作の中少々削除したる箇所（尤もほんの少々）有之候。但し何等添加したるところは無之候。何れ近々詳細申上ぐべく候へども、只今はそのひまなく候。何卒御返事賜はりたく、尙御手許に續稿有之候はば、小生あて御送り被下度願上候。

エヌ・ニエクラソフ

追白、大方推測は致し候へども、尙あの物語の作者の氏名明白に小生まで御きかせ被下度願候。これは檢閱局の規定上よりも小生にとり須知のことに有之候。

この手紙を受け取つたトルストイは、その日記の中でかう書いてゐる。「九月三十日、ニエクラソフから手紙を受け取る。賞讀、但し金なし。」この當時トルストイは大いに金に窮してゐて、その處女作の原稿料を待つてゐた。そして恐らくはこのことに就いてニエクラソフへ書き送つたものと見え、ニエクラソフからの第三の手紙にはかうある。

サント・ベティエルブルグ、千八百五十二年十月三十日、足下、最後の御手紙に對し御返事のおくれ候事御許し願はしく候——小生頗る繁忙なりしたために候、さて金錢の問題に關しては次の理由により前々書面にては沈黙を守り候次第に候、即ち、一流の吾國諸雜誌に於いては、その雜誌が世間へ初めて推薦するところの新進作家には、その處女作品に對して稿料を支拂はざる習慣古くより有之候。「現代人」によりて初めて文壇に出でし人々は、皆これまでこの習慣に従ひ申候、即ちゴンチャロフ、ドゥルジニン、アブディエフその他然り。かつては小生のも、またバナエフのも、その最初の作品はまたこの習慣に従ひ申候。

足下にもまたこの點を御含み願はしく、ただ將來の御作に對しては、吾國の最も有名なる（まことに少數なる）作者の受くるが如き最善の報酬を御約束申すべく、即ち誌面十六ページに對して銀五十ルーブリと致すべく候。小生この點を申上ぐるを躊躇しむたるは尙別に理由あり、即ち小生の印象を讀者の判斷によ



りて確かむることなくしては、先づ足下にこの提議をなすを得ざりし次第に候。然るに讀者の判断はこの上もなく足下に有利なるものなりき。小生もまた足下の處女作に對する自己の見解の露らざりしことを大いに欣び、ここに満足を以て上記の條件を提出いたし候。

右の件に就き御手紙下されたく、いづれにもせよこの點に於いては雙方の意相通じ申すべきことを確言するを得べく候。御作は成功に候へば、なるべく早く第二の御作を請ひ受け候こと吾等の頗る欣幸とするところに候。この意御含み被下、御手許にあるもの御送り下されなば幸ひと存候。「現代人」九號御送りすべきのところ、残念ながら餘分に印刷するやう手配りするを失念し、今年分は既に全部品切れに相成申候。尤も御入用に候はば、破損本のうちより御作の部分だけ一二部抜き取り御送り申すべく候。尙繰返し申上候、物語もしくは何か物語風のものか、小説もしくは短篇風のものにても御送り下されたく伏して願上候。御返事待入申候。敬具。

エ・ニ・ユ・ク・ラ・ソフ

追白、誌上に掲載せる作品の筆者の氏名は凡て承知せざる可からざる次第に有之、何卒この點に就いて明確の御報知願はしく候。もし御希望とあらば、社内のももの外何人にも知らずまじく候。

「幼年の頃」の出た翌千八百五十三年には、同じく「現代人」に「侵入」が出で、千八百五十四年には同じ誌上に、「少年の頃」が出た。「青年時代」が公けにせられたのは、だいふ後の千八百五十七年で、やはり、「現代人」の誌上に出た。

この三部作は、普通に作者の自傳的作品であると見られてゐる。しかしこの三部作に現はれた箇々の事實

は、勿論これを悉く作者の生ひ立ちの記述であるとは見られない。たとへばトルストイの母は、彼が僅かに一歳半の時に歿したといふ事なども、この作に記されたところとは違つてゐる。又この作中のコリーヤ・イルティエーニエフの父なる人は、トルストイの父とはまつたく別人で、作者は、父の友人であつた隣人イスレーニエフ（後にトルストイ夫人となつたソフフィヤ・アンドリュエヅナの祖父）をモデルにしたのであるといふ。而して作者の父母の面影は、寧ろ後の作「戦争と平和」の中に見られると傳へられる。しかしながら、その表面箇々の事實の如何に拘らず、作中主人公イルティエーニエフの内面の生活は、疑ふところなく作者トルストイの心の自傳である。自我の感の強く鋭い、随つて自己解剖の傾向の著しいコリーヤ、いぢらしいほど自愛の念の強く、想像力が鋭敏で、むらの多い、矛盾の多い、豊富な複雑な性質のコリーヤ、懐疑的で批評的で、觀察力が細かく鋭くて、そのくせ愛情を求める心の強い、外來の印象を受けやすいコリーヤ、そこにはありふれた少年の型を見ずして、特異な著明な性格を有する一個の複雑豊富な少年の個性を見る。かやうな個性の描寫として、少年心理の表現として、これほど印象の直接で、素朴で、豊かな潤ひと同時に複雑な深みを有つたものは、世界の文學の中で類を見ない。この三部作を貫いて中心の興味を形づくるものはいふまでもなくこのニコラーイ・イルティエーニエフの心の歴史で、この少年の生ひ立ちの周圍が、その頃のロシアでなくては見られぬ、即ち農奴制度時代の富める地主の家庭といふ特殊の色あひを帯びてゐることをも忘れてはならぬ。情と知との矛盾、二重心境の葛藤、その統一の努力、自己完成の理想、主人公ニコラーイ・イルティエーニエフのこの方面の生活を主として取り扱つてゐる「青年時代」に於いて、イルティエーニエフが貴族的な社會に特有な俗習俗見に囚はれてゐるところの少くないのなども、すべて生ひ

立ちの環境のさせたところである。「青年時代」は、當時のドルジニンの如き寧ろ「幼年の頃」及び「少年の頃」よりも優れてゐるとしてゐるが、イルティエーニエフは別として、その友人ニエフリュードフ初めその他の人物の描出に於いては、やや鮮活を缺くといつてよい。しかしながらその主人公イルティエーニエフの心理解剖に至つては、この作もまた敢て劣るところを見ない。この三部作で作者は人生の三時期を描き、最後に成年時代を加へて、「四つの時代の物語」と題して大成する意圖であつたと傳へられるが、それは遂に書かれなかつた。智力のやや目ざめ、周囲の複雑な關係に心を向けるやうになつた少年期から、性格の輪郭があらかた出來て、ひろい人生の理想意義に心をひそめ、生活の方途を立てようとする青年期を経て、その理想を實際に行ふに至る成年期の消息の一端は、千八百五十六年雑誌「祖國雜纂」に掲げた

地主の朝 にも見られる。この作は本來作者の最初の計畫の一部を書いたものに過ぎない。この作もまた明らかに自傳的要素を有する。主人公ニエフリュードフが三年級時代に大學を退いて、農民の幸福のために力を盡さうとする理想的行動は、トルストイが千八百四十七年の春カザンの大學を半途退學して、「愛と善とは眞理と幸福」であると信じ、ヤースナヤ・ポリャーナの領地に歸つて、農民生活の改善に努力したのと一つである。前の三部作のうちには現はれるイルティエーニエフの友人ニエフリュードフも、またトルストイの一面であるといはれる。而してこの理想的行動の失敗は、一つはニエフリュードフの性格とその思想の傾向とからも來てゐるが、——即ち彼が自己の理想を愛することに専らであつて、その理想を行ふための意力精力の不足からも來てゐるのであらうが、また彼がその種の理想家に特有な癖として、ロシアの農民生活の實際に通ぜず、徒らに外國の書物や雜誌の記事などによつて農事改良を行はうとしたところからも來てゐる。

しかし結局その主なる原因は、地主たる彼に對する農民の不信に在るといつてよい。而してこの地主に對する農民の不信は、農奴制度から生ずる自然の結果である。ピョートル大帝の改革は地主たる貴族を地方村落の生活から引き抜いて政府の官吏とした。而して外形的な西歐文明の模倣はそれ等地主と農民との生活に更に溝を深めた。地主は殆ど直接農民に接する事がなくなつて、差配人の横暴が行はれるやうになつた。以前の、父子の如き地主と農民との關係は失はれて、一切の地主からの施設は、執拗な疑ひの目で農民から見られるやうになつた。農奴制度そのものに手を着けずして農民生活の改善を行ふことは不可能であつた。ニエフリュードフの失敗は實にその當時の多くの新教育ある地主たちの失敗であつた。この意味でこの作のニエフリュードフは、當時の新理想に驅られた青年地主の型である。而してこのニエフリュードフの理想の趨くところは、結局農民の全解放であらねばならなかつた。千八百五十八年トルストイは、トローラ縣農民狀態改善委員會の代表者選舉に際して、土地の分配とともに農民の解放の必要の決議を署名した。千八百六十一年二月十九日にはアリェクサンデル二世によつて農奴制度が廢せられた。

この作には、農民の描寫に於いてトルストイの容赦なき寫實主義が明らかに見られる。殊にこの作をトルゲーニエフの「狩獵家の手記」と比べると、トルゲーニエフが専ら農民の積極的方面を描いたのに對して、トルストイはその無知、怠惰、無氣力、粗野、猜疑心などの否定的方面をも敢て蔽ひかくしてゐない。しかしながら、その理想化のない描寫の間に、作者の農民に對するひろい是認と同感とは勿論流れてゐる。而してニエフリュードフの素朴な農民に對する同感、羨望の心には、後のトルストイの心境を豫め語るものがある。

カザツク トルストイのカフカズ生活から生れた物語のうちで、最もおもなものはこの一篇である。この作は千八百五十二年に書き始めたものであるが、「ロシアの報知者」誌上に出たのは、やうやく千八百六十二年である。

カフカズ地方の生活から生れた物語を解するために、ここでカフカズ地方のことを手短かに説明するのは無用であるまい。十五世紀の頃モスクワを中心にしたモスクワ王国が漸く勢力を得來つて、年來の侵入者種族の諸民族と十分相拮抗するの實力を有するに及び、それ等の諸民族は漸く東南にせばめられ、カザン王国及びアーストラハン王国は既にモスクワ王国に従へられて、カフカズ山脈の北方の斜地に住める山地の住民のみ、僅かに抵抗を持續した。降つて十九世紀の初めには、これ等山地の蠻族と闘ふために、テレクの河の左岸、クバンの河の右岸に、屯田兵の村々が設けられた。多くの特權と島とを與へられた邊境守備の屯田兵、これがカザツクである。丁度その頃、カフカズ山脈の南側に住んで、その時まで獨立を持續して來たグルージャ王国は、ロシア帝國に併合せられた。グルージャの國グルージャとロシアとの間に介在する山地の諸民族の服従は、ロシアにとつて必要であつた。テレク、クバンの兩河に沿うて、屯田軍は徐々に山地に迫つて行つた。しかし大抵は時々、侵入掠略位に止まつた。山地の勇猛な住民も、またしばしば不意に屯田軍の所在を襲うて、人を屠り、男女の俘囚を得て引き上げた。この戦ひは時に鎮定したかの如く見えつつ、またしばしば力を新たにしたる慍悍な狂熱的な山地の諸民族によつて盛りかへされた。彼等のうちでも最も慍悍な一族は、テレク河の右岸の森林地方に住むチエチンツイであつた。千八百五十六年バリアティンスキー公がカフカズ地方の總督となるに及んで、二十萬の大兵を率ゐて、チエチンツイの國チエチニヤを初め、

當時勢力を張つたイチケケリヤ、ダゲスタンなどの山地の諸族を攻め、千八百五十九年遂にこの地方を征定することを得た。トルストイがカフカズ地方に兄ニコライに従つて赴いたのは、丁度この征討前のことである。彼の作中「カザツク」、「侵入」、「伐林」、「分隊での選返」などは、すべてこのカフカズ地方の物語である。

この作も作者の自傳的要素を少からず含んでゐる。テレクの河岸、スタログラードフスカヤの屯田村に住んでゐた頃のトルストイの生活は、ほぼこの作によつてうかがふことが出来る。作中の主人公オリエニンは、前の作にあらはれたイルティエーニエフやニエフリユードフとさまざまの點で相似てゐる。その内心の二重性、冥想、はにかみ、自己不満、道德的敏感、乃至自己完成の欲求、これ等は皆イルティエーニエフやニエフリユードフの特質であつた。またこの作には、後年のトルストイの人生に對する見かたの萌芽を初めて見る。

オリエニンが都會の無爲な生活から——騒がしい安逸放埒と遊惰耽溺との生活から脱して、清澄森嚴なカフカズの自然の中へ行く途中の心持ち、山々を「感ずる心」の變化、何故とも知れぬ澄み渡つた幸福の感じ、これ等の心持ちの描出はこの作中最も作者の力を見るべきところの一つである。カザツクの人々の生活、殊に強い、纏まつた、確かな、分裂のない人間の生活に牽引を感じ、それを羨み望む心持ちは、イルティエーニエフにもニエフリユードフにもあつた。自然の生きるが如く生き、平靜に安らかに強く確かに生きてゐるエロシユカ小父、マリヤナ、ルカーシユカ、これ等の人々の間に在つて一生を終らうとさへ思ふ生活の單純化の極端な要求も、ひとりオリエニンの要求ではなくして、作者の心の聲であつたらう。眞に自由な

自然兒であるエロシユカ小父、マリヤーナ、ルカーシユカなどの描寫は、この作者の優れた技巧を示す。殊にエロシユカ小父は就中鮮やかな印象を與へる。

この作に見られる思想の特色は、現代の文明生活に對するトルストイの否定的態度である。單純化の要求である。而してこの思想の根柢を成すものは自己の幸福の欲求である。この自己一身の幸福の欲求から一層ひろい幸福の欲求への轉化に、またトルストイの思想の轉化が見られる。

優入 千八百五十三年『現代人』に掲載せられた、所謂カフカズ物語中の一つである。若い士官の功名の空想と不意の死と、生活の歎きと死の謎と、生死の問題はこの作にも暗示せられてゐる。また戦争の半面、その散文化的な現實の描寫に特色を見る。

## 二

セワストーポリ クリミヤ戦争は人の知る通りニコライ一世が、トルコ征服のために起した戦争であつた。イギリス、フランスなど共通の利害を有する國がトルコの味方をするに及んで、千八百五十六年三月、ロシアは遂にその野心を抛擲して和を講じた。セワストーポリの要塞は、有名な堅壘で、この戦争に於いてロシアが最後まで死守したところである。この防守戦は遂に不利に終つたとはいへ、ロシアの征戰史上に光榮をとどむる力戦であつた。

トルコへの宣戰布告は千八百五十三年の舊ロシア曆十一月四日(十一月十七日)で、トルストイがクリミヤを指してルムィニヤの任地を立つて行つたのはその翌年(千八百五十四年)の舊ロシア曆七月二十日(八月二日)であつた。途中病を得て、新任地セワストーポリへ着いたのはその舊ロシア曆十一月七日(十一月二十日)であつた。トルストイはかやうにして翌年の九月公務を帯びてベティエルブルグへ上るまで親しく要塞防守の實戦に参加して砲火の間に月日を送つた。この間の見聞を記したものが、即ち三篇から成るこの『セワストーポリ』である。

セワストーポリの要塞では、トルストイを中心に、士官たちの間に文筆の嗜みある少數の集りがあつて、そこからトルストイの手を経て戦地の通信をベティエルブルグへ送つた。『千八百五十四年十二月のセワストーポリ』は六月の雑誌『現代人』に出た。『千八百五十五年五月のセワストーポリ』は八月のに、『千八百五十五年八月のセワストーポリ』は、千八百五十六年一月のに、いづれも相ついで掲げられた。

最初の『十二月のセワストーポリ』には、これといふ特殊の物語はない。この戦争の勇者は、一二の將軍や士官などではなくして、全體のロシア國民であること、ロシア兵の勇武は、素朴單純であつて、何等の目を驚かさやうなげばいいところのないこと——しかしてそこに本當のロシア國民の道徳があり、愛國心があること、これがこの一篇を通じて受け取られる心持である。沈黙と無意識との徳とか、自己の功績の前にすらはにかみがちな程の素朴なロシア國民——ロシア兵、その特殊の精神がこの一篇を通じて感ぜられる。しかも、そこには不自然な理想化がない。すべて描き語られるところは戦場での眞實である。この一篇は校正刷のまま、ニコライ一世の歿後、位に即いたばかりのアリェクサーンドル二世に依つて讀まれた。

しかして「この青年の命をいたはるやうに」との皇帝の特旨に依つて、作者は危険の少い方面へ廻されることになつた。皇帝はまたこの一篇を直ちにフランス語に翻譯せしめた。この作がトルストイの作品の中で最も早く西ヨーロッパの讀者に知られたのは、題材そのものの興味からでもあらうが、またこのアリェクサー・ンドル二世の特別の好意に負ふところがある。尙また皇太后（ニコライ一世の皇后）アリェクサー・ンドラ・フョードロヴナもこの作を讀んで落涙したと傳へられる。トゥルゲーニェフは、「この作を讀んでウラア！と唱へた、この作は眞に奇蹟である」とも言つてゐる。

『五月のセワストーポリ』には、さまざまな軍人の性格が描かれてゐる。ここにも勿論理想化はない。さまざまな軍人の性格の祕密、その大小の缺點弱點、名譽心、虚榮心、自慢自傲の心、功名慾、さういふものが、極めて眞實に、直截に、朴茂に描かれてゐる。勇敢で義勇を重んずる念が厚くて、しかも虚榮心の強いミハイロフなどに、特に作者の伎倆を見る。作者がこの一篇の最後で、

……私のここに言つた事は、何人の心裡にも無意識的に潛んでゐる悪い眞理の一つであつたかも知れない。丁度酒の味は損はない爲には、酒樽を動かしてはならぬやうに、害毒をひき起さないためには言うてはならぬ一種の有害な眞理であつたかも知れない。……此の物語の主人公は何人であるか？ それは——眞實である。（春秋社版、全集第二巻の譯による）

と言つてゐるのは、明らかにその直截な寫實主義の眞意を語るものである。

『八月のセワストーポリ』では、コゼリツォーフ兄弟が物語の中心となつてゐる。兄のミハイールは「幼年の頃」に出るワローヂャに似てゐる。平靜な、おちついた性質で、内心の分裂がなく、他人の言葉や外界

の影響に動かされることがなく、統一のある朴茂な人間で、トルストイがいつでも同感と愛とを以て見てゐる性質である。

凡そこの作は戦争を描いた文學として、單に眞實の敘寫に於いてすぐれてゐるばかりでない。そこには戰場に於ける人生を正視する、人間味の豊富な作者のひろい心境がある。すべての戦争生活の記述は、やがて直ちに人間生活の記述となつて、戦争といふ刺激的な背景乃至事件が與へる以外の、ひろい深い味ひを味はしめずしては措かない。人は往々にしてこの一篇をロシアの戦争畫家ウエリェシュチャギンの作と比較するが、ウエリェシュチャギンの表面的寫實は到底この作に比すべくもない。

作者の戦争觀は、また夙くこの作によつて覗ふことが出来る。『五月のセワストーポリ』の末尾に近いところで、

……然り而してこれ等の人々——即ち愛と犠牲の一大法則を信奉する基督教徒等は、自分達の所業を眼のあたりに眺めながら、少しも悔恨の念に打たれないのである。彼等に生命を與へ、その心に死を怖るるの念と、善きもの美しきものに對する愛とを植ゑつけてくれた者の前に跪づいて、お詫を願はないのである。彼等は歡喜と幸福との涙に暮れつつ、兄弟として互に相抱かないのである。……（同上）

と言つてゐるのは、即ち明らかに戦争の否定である。この『五月のセワストーポリ』が初め『セワストーポリの夜』と言ふ標題で、『現代人』に掲げられようとしたとき、檢閲官の手で無慚に改訂せられたことのあるのも、専らその邊が忌まれたものと察せられる。しかして檢閲改訂の如何に拘らず、死を面前に控へた人間の心の姿の描寫の眞實は、到底消すことが出来なかつたのである。

森林俊雄 は千八百五十五年九月、「現代人」に掲載せられた。トタルゲーニェフに献呈した作である。

この作もさまざまな検閲の手で大分改削せられた。

モスクワの知人と陣中の邂逅 は千八百五十六年の十二月、「讀書文庫」といふ雑誌に出た。これ等はいづれもトルストイが軍隊生活の物語である。

二人の騎騎兵 は千八百五十六年五月「現代人」に出た。トルストイの作中で珍らしいユーモアの勝つたものである。ここにもトルストイの好む素朴な調和のある性格と、自意識のある内心の調和のない性格とが相對立して描かれてゐる。

ゲーム取の手記 千八百五十五年一月「現代人」に出た。作者がビヤチゴルスクにゐた頃の作で、賭博の誘惑に就いては、自傳的要素を多分に含んでゐると見てよい。千八百五十二年三月の頃、彼がスタログラードフスカヤにゐた頃の日記には、自己の性質の中にある三つの悪癖をあげてあるが、その第一は賭け遊びで、それが私慾的であり、たんだん募つて行つて、遂に強烈な刺激を求めるやうになるものであるといふ意味を記してゐる。他の二つの悪癖は情慾と虚榮心とである。その以前、軍隊へ入る前、ベティエブルグでカルタに耽つて大分負債を作つたことも傳記に記してある。

アリベルト リュツェルン 何れも千八百五十七年作者が外遊中の作である。「アリベルト」は先年トルストイがベティエブルグで知りあひになつて、ヤースナヤ・ポリャーナへ連れて來たルドフといふ酒のみの音楽家をモデルにしたものである。「リュツェルン」の出來事は、トルストイがその地で實際に遭遇した事件である。傳記中の記事参照。

ホリクシーユカ トルストイは千八百六十一年二月十九日、ロシアの農奴解放令發布を耳にして蒼惶ロンドンを立ち、ブリュッセルを経て歸國の途に就いた。この作はそのブリュッセルで稿を起したものである。農奴制度に關するトルストイの小説は、「地主の朝」を除いては、これが唯一である。この作は、農民の心が、その粗硬な外容に拘らず、如何に道徳的に鋭敏でデリケートであるかを語つてゐる。

三つの死 千八百五十九年の初めに出た。この三つの——二人の人間と樹木との死の、簡潔素朴な描寫から感ずることの出来るのは、作者の生死に對する萬有神教的な思想である。

およそ「戦争と平和」以前のトルストイの作品には、多くの場合に、自分の生れた社會の不自然な人工的な境界から脱して、正しい眞實な生活に行かうとするロシア貴族の焦燥煩悶が描かれてゐる。ただ、何が正しい眞實な生活であるかといふこと、いかにしてその生活に達すべきかといふこと、それ等に就いてはまだ確かな思想を築き上げてゐない。そこに人間として、また作者としてのトルストイの不安動搖が見られる。しかも、精しく正しく見、強く感じ、深く考へることの出来る彼の天稟は、これ等の初期の作品にも明らかに現はれてゐる。

家庭の幸福 千八百五十九年に出た作である。この作もまた大分自傳的要素を含んでゐる。トルストイは千八百五十六年の初夏の頃、初めて眞面目な戀をした。彼とA.V.A.との婚約は親戚や友人の間にも發表せられた。V.V.A.はヤースナヤ・ポリャーナの近くの地主の令嬢であつた。八月に彼女はアリェクササンドル二世の戴冠式に列するためモスクワへ出た。そしてそこでフランス人のある音楽家と親しくなつた。トルストイはその邊の消息を耳にして、度々きびしい詰問の手紙を出したり、また直ぐ折れて詫びてやつたりし

た。そして彼の手紙はいつも教訓的であつた。二人はさういふことからだんだん心持ちがそぐはなくなつて行つた。そしてパリの客舎で彼は最後の手紙を *И. П. Т.* から受け取つた。

千八百五十六年の初夏、ペティエールブルグからの歸途、トルストイはモスクワに寄つて、郊外にある醫者のベルスの別荘を訪問した。その三人の年行かない快活な娘達のうちの、第二番目のソフィヤ・アンドレーエヴナであつた。しかし、その頃はまだやつと十二歳で、この人が後にトルストイ夫人にならうなどとは、何人も思ひもよらなかつたことである。

この時のトルストイは、ジブシイの女などとの放縱な生活から、漸く醒めた眞面目な結婚の生活へ移らうとしてゐた。軍隊生活にも飽き、ペティエールブルグの生活も厭はしくなつて、靜かな田園で、眞面目な教育方面の事業を始めかけてゐた。過去の放縱からの倦怠と、靜かな未來の幸福の豫望とが、トルストイの心を和め鎮め、柔らかにしたのであつたらう。この作は數多いトルストイの作中にあつて、殆ど類の無い甘美な、やさしい魅力に富んだものである。ベルス家の二番娘のソフィヤが、まだこの頃のトルストイの心を強く動かしてゐなかつたにしても、純な快活な若々しいソフィヤたちの面影が、丁度この作でのやうに、比較的年のいつた、さういふ世間を知つて來たトルストイの心に、明るい慰めと喜びとの光りを投じなかつたとはどうして言へよう。この作に充ちてゐる明るい柔らかな抒情的な味ひは、自づからその當時の作者の心境であると思つてよいであらう。

新讀本から 子供のための物語 少年科學物語 寓話 トルストイの教育事業は、千八百五十九年の冬、ヤースナヤ・ポリャーナに學校を創設したときから始まる。しかしその第一期は彼の結婚の年、即ち千八百六

十二年の秋に至つて終り、更に千八百六十九年「戦争と平和」の大作を完成するに及んで、再び教育事業の第二期が始まる。而してこの第二期に於いて、トルストイが先づ着手したのは「讀本」の編纂であつた。この讀本は既に彼が千八百六十八年の頃から計畫してゐたものであつたが、いよいよ本氣に着手したのは、千八百七十年の秋からである。彼は異常の熱心と努力とを以てこの讀本の編纂に従事した。彼はこの讀本のために多くの東西の傳説寓話を調べた。ここに「子供のための物語」及び「寓話」として收めてあるものはその結果に成つた。彼はまたその讀本に收められた童幼のための科學談（「少年科學物語」）を書くために、自からさまざまの、科學上の實驗を試み、それぞれの専門家に就いて疑ひを質し、天文学の知識を得るためには自から夜を更かして天空の祕密を學んだ。かくの如き異常の苦心を以て書かれ且つ編まれた讀本は、漸く千八百七十二年の三月を以て完成した。トルストイはこの讀本を、その年の五月三十日モスクワで開かれる教育展覽會へ出さうと思つて、頻りにモスクワでの印刷を急がせた。けれどもさまざまな新體の活字を特別に組む必要があつたり、その中に收められた算術の部の數字の組み方に面倒が多かつたりした上に、トルストイ自ら増補し訂正し變更すること二十回に及ぶことさへあつて、尙更印刷は手間取つた。トルストイ自身もこの印刷校正の緩漫と繁雜とに堪へかねて、彼の親しい友人ストラホーフに懇請して、その監督の下にペティエールブルグの大きな印刷所で刷つて貰ふことにした。實にこの讀本の編纂は、トルストイ自から言つてゐる如く、「魂を打ち込んだ」仕事であつたのである。

彼はこの讀本の廣告文をも自から書いた。彼自から告白してゐる通り、この書物がだんだん子供の殖えて來る彼の家庭に、收入を持ち來すであらうことは彼の期待してゐたところであつた。「子供のための物語」

のうちに收められた『カフカズの捕虜』は、トルストイの讀本編纂の噂を聞いてその一部分の掲載を懇請して來た雑誌『黎明』（千八百七十二年二月號）に、また同じく『神は眞を見給ふ』は雑誌『談話』（千八百七十二年三月號）に、いづれも讀本の出版に先だつて掲げられたが、どちらの雑誌も全く作者に報酬は出さなかつた。それに就いてもトルストイは明らかに不平を洩らしてゐる。

千八百七十二年十一月、その讀本即ち『アーズブカ』は遂に出版せられた。讀本は全部四冊から成つて、百八十ページばかりのものであつた。今ではこの第一版は稀觀書のうちに算へられる。その内容は、初歩の讀みかた、さまざまの物語、文法、物語歌、ストラキヤン語の讀みかた、同じく文法及び物語（何れもロシア譯を附けて）、算術、而して最後に教師の教授上の心得が添へてあつた。この算術にはトルストイ獨得の計算法が用ひられてあつた。最初の世評は寧ろ専ら非難に傾いてゐた。しかし、結局トルストイがストラホーフに言つたやうに、この讀本は、千八百七十五年に出た『新讀本』に於いて訂正を経て後、ひとりロシアに於いてばかりでなく、トルストイ傳の著者モードによれば、世界の如何なる國語にも比類のない、すぐれたものとして認められるやうになつた。しかしトルゲニエフはバリでこの讀本を手にして、ある人への手紙で、「この讀本には、あの美しい物語『カフカズの捕虜』を除いては何一つおもしろいものはない。それに値段もかういふ本にしては馬鹿に高い」と言つた。初版は三千部刷つたが、紙表紙四冊全部で二ルーブリであつた。印刷に手数のかかつたために比較的値段も張つたらうと思はれる。

トルゲニエフが賞讀した『カフカズの捕虜』は、この讀本に收められた物語の中でも最もよく一般に讀まれ、農民の間にも知られてゐるものである。ロシアの詩人中最もよく讀まれてゐるプーシキンにも、

有名な『カフカズの捕虜』といふ同題の詩があるに拘らず『カフカズの捕虜』といへば、今では寧ろトルストイの物語として通ずるほどであるといふことを、作者は可なり満足に感じてゐたらしい。『子供のための物語』には、作者の自傳的要素が大分入つてゐる。ミルトンとブルカといふ犬のことや、乗馬の話などがそれである。簡潔と明晰と素材と眞實とが、これ等の物語に通ずる特色である。

この讀本の縮刷第二版は、千八百七十四年に出版せられた。トルストイは更にこれに著しく訂正を加へ、算術の部を全く省き、更に讀みものを多く加へ、初歩の讀みかたに難易の順序を立て、『新初歩讀本』一冊、『讀本』四冊、別に『ストラキヤン語讀本』四冊として、千八百七十五年の初めに出版した。トルストイ傳の著者ビリョーフによると、千九百八年頃までに二十五版約百五十萬冊の『新初歩讀本』が賣られたといふ。而して二十世紀の初め頃までのロシアでは、文部省認定教科書以外の書物を學校で用ひることを禁じてあつたといふ事情を考へ、またトルストイの『新初歩讀本』が認定せられてゐなかつたことを思ひ合して見ると、この書の賣行は全くこの書の眞實の價値に基くといはねばならぬ。『讀本』四冊もまた、ともにひろく行はれた。今日でもこれ等はロシアで最もすぐれた讀本であることは失はない。即ち簡潔で、明晰で、文學的で、分りやすくおもしろいといふ點で、他のいかなる讀本もこれに及ばない。



國民傳説 この中に含まれる五篇は、何れも千八百八十六年に書かれたもので、物質上の欲望が如何に人間の生活にとつて恐ろしい害を持ち來たすかの意を含めた「人はどれだけの土地を要するや」、惡を以て惡に打ち克つべからずとの意を含めた「教子」、形式的教會的な宗教を否定した「三人の隱者」など、いづれもトルストイのこの種の物語の中でひろく世間に讀まれてゐるものに屬する。この中の

皇の太鼓の騒 は千八百八十七年の作。ユルガ地方の傳説によつたもの。千八百九十二年になつてこの物語の中の「皇帝」を「酋長」といふ風に訂正して、漸く檢閲を通過した。それはその當時の國內の饑饉救済の費用に充てるためであつた。軍務といふものに對する農民の心を描いたもの、またやがてトルストイの心を描いたもので、ロシア農民の本心はこの作に巧みに表現せられてゐる。

民話 この中に收められてゐる五篇のうち、「人は何によつて生くるや」が千八百八十一年に書かれたものである外、殘餘の四篇はすべて千八百八十五年の作である。トルストイの書いた小兒または農民のための物語は少くない。而してそれ等は何れも單に小兒や農民の間に讀まれるばかりではなく、ひろく一般の讀書界に行はれてゐる。而して「人は何によつて生くるや」がこれ等の最初のものである。これはトルストイ夫人の兄弟ベルスが發行してゐた少年雜誌のために書かれたもので、仁と愛とを説いた多くの彼の物語の

中でも、最もひろく愛讀せられる佳品である。先年亡くなつたルームィニヤの皇后カルメン・シルヅは、トルストイのこれ等の物語を、ダンテ、シェークスピア、及び聖書と併せて、永遠の眞理を含む不朽の作品と激賞し、もしトルストイがこれ等の物語の外何一つ書かなかつたとしても、彼は世界の文豪中に數へられるとまで言つてゐる。これ等の作は、トルストイが千八百七十七年の夏、カールガに近いオーブチン修道院に在つて、そこで民話をよく知つてゐる巡禮の客から、かざりのない農民の言葉でさまざまの貴い物語を聞いたによつたものである。純潔、單純、誠實といふ彼の藝術上の三標準にかなへるものと見てよい。

繪本のために書かれた話 この中に含まれる四篇は、いづれも千八百八十五年に書かれたもので、物質上の富の力の否定、努力の貴さ、純真な人間の本性の力、などのこころを含めた小さな物語として、中でも「イリヤス」の如きはひろく知られてゐる。

イワンの馬鹿 これも千八百八十五年の作で、トルストイの人生觀を具象したものと見て、最も興味あり意味あるもの一つに屬する。この一篇にはトルストイの宗教觀、道德觀、國家觀、社會觀など、すべて明らかに攝り入れられてゐる。イワンの馬鹿の話は、ロシアに於いて古くからある民間の傳説で、その傳説の細部に於いてさまざまの異つた物語りをなしてゐるが、イワンが結局その底知れぬ善良さによつて幸福を得るといふ點に於いては一致してゐるといつてよい。イワンの馬鹿はその意味でロシアの國民的代表的主人公であると思はれる。

暫くその教師をしてゐたことのあるファイナーマンの手記によると、ヤースナヤ・ポリャーナの學校では、時々夜分に、教師が子供たちや農民たちを集めて本を讀みかかせた。トルストイもいつもそこへ來て、

おしまひのベンチの端に腰をかけてゐた。讀み了へると、聴手の間に盛んに議論が始まる。トルストイも亦屢々その仲間入りをした。彼はかうして農民たちに親しく接觸することを喜んだ。そして、いつでもそこから何か新しいよいものを得ることを忘れなかつた。「ほんたうにこれはよい！ 私たちはほんたうの幸福がどこに在るかまるで知つてゐない。あの人たちと一時間話しをするのは、社交界の幾晩や大饗宴などよりもはるかに貴い。」かうトルストイはファイナーマンに言つたことがある。ある時、ファイナーマンが短い物語を讀み了へたあとで、トルストイはポケットから原稿を取り出して、はつきりしたよく通る聲で、興奮して、彼のいはゆる「お伽噺」を讀みかかせた。それがこの「イワンの馬鹿」であつた。

皆は喜んだ。年取つたもの等はこれを褒めた。若いものたちは、その中のいろいろの出来事について議論を始め、いろいろ自分たちの考へを述べたりした。その中で殊にその物語に感動した一人の百姓を見かけて、トルストイが言つた、「さア、コンスタンチン・ニコラエキッチ、お前さんは今の話をすつかりも一度私たちに話して聞かせられるでせう。さアやつてみて下さい。」「出来ますとも、ひと言も違へずに」と言つて、その百姓は直ぐ立つてすらすらと話し出した。しかしそれはトルストイのもとの話とは大分違つたものであつた。文句も大分違ふし、ところによると、出来事の結末が全く違つたものになつたりした。聞き手は「ちがふよちがふよ！」などと言ひ出した。けれどもトルストイはその騒ぎ立つ聞き手たちを制して、「まアその儘に話さしてごらん、大變おもしろいから」と言つた。その話し手の百姓は、ヤースナヤ・ポリャーナでも最も貧しい方の農夫であつたが、言葉に豊かな天分を持つてゐて、讀むことを大層好んでゐた。トルストイはそこで聴きながら、手帳へ書きとめて行つた。力のある文句、適切な例、おもしろい言葉

などが出て来ると、嬉しさうにして書きとめて行つた。今世に行はれてゐるトルストイの「イワンの馬鹿」は、その折のコンスタンチンの話のままになつてゐるのである。「私はいつでもかういふ風にします。私はものを書くことをあの人たちから學び、あの人たちによつて試してみます。それが民衆のための物語を書く唯一の方法です。「神は眞を見たまふ」といふ私の物語も、やはりさうして出来たのです。それは私の生徒に話し返させて見たものです。」とトルストイはファイナーマンに言つた。

**最初の醜態者 小さな悪魔がパン屑の醜ひをした話** いづれも千八百八十六年の作である。此の短い戯曲と物語とは、いづれも同一の筋を取り扱ひ同一の意味を含めたもので、身を以て實例を示すことによつて、はじめて人を感奮せしめることが出来るといふ意味も、飲酒の害悪を非難する意味も、明らかに讀み取られる。物語の方は此の種のトルストイの作中すぐれたものの一つと言つてよい。

トルストイのモスクワの住居の直ぐ近くに、ノワ・デーキチュエ・ポールといふ、今は公園になつてゐる廣場があつて、以前は毎年春の頃、謝肉祭の祝節には、「庶民の遊歩」と稱して、そこに見世物小屋がかかつたりなどして、市民は勿論近在からも人出があつて、なかなか陽氣に賑はつたものであつた。その見世物小屋の芝居の出しものがおもしろくないといふところから、その爲に書いたのが、この「最初の醜態者」である。而してこの作はまた實際その小屋で上演せられたものである。

**主人と雇人** 千八百九十五年の作。死に對する自我を忘れた喜びの勝利を描いたものとして、トルストイの筆力の強さ確かさを見せてゐるものである。

**光ある中に光の中を歩め** 千八百八十七年の作。古代キリスト教徒の生活を是認した意味の最も明らかに描

かれてゐるもので、一切のものの共有といふことが力説してある。善いキリスト教徒と、悪い異教徒との區別を、あまりに明確にしたところは、作品としてもまた不自然であることを免れない。いつでもこの作のことを言はれると恥かしいと、トルストイ自からもモードに語つたといふことである。

開ある人々の話 千八百八十九年作。善をなすこと、眞の生活をするもののいかに困難であるか、人々がその事に對していかに迷ひ、いかに妥協しつゝ生きてゐるかの意を含めたもの。

三つの噂話 三人の兄弟 時計師 「三つの噂話」は千八百九十五年、「三人の見弟」は千八百八十七年、「時計師」は千八百九十一年の作。これ等の作もまた簡潔、單純、誠實なトルストイの民衆藝術の三標準にかなへるものといふことが出来るであらう。

十二月黨員 千八百六十三年から千八百七十八年へかけての作。十二月黨とは、千八百二十五年の十二月、ニコライ一世の即位を機として起つた、主として貴族出身の士官の間に企てられた憲法政治を要求する運動である。しかし、それ等の士官に從つた兵士たちは、まだ憲法の何であるかを全く解し得なかつた。ロシア語で憲法のことをコンスタト・イチヤといふが、そのコンスタト・イチヤの萬歳を唱した兵士たちは、ニコライ一世の兄コンスタンチーンのために萬歳を唱へて、ニコライ一世に反くものと思つてゐたほどである。コンスタンチーンは長で、ニコライは次であるから、本來はコンスタンチーンが即位すべきであつたのだが、彼がポーランドの貴婦人と相愛の仲になつて結婚し天主教に改宗したので、皇位繼承權を失ひ、ニコライが即位することになつたやうなわけであつたので、兵士たちがさう思つたのも無理はなかつた。トルストイはこの十二月黨のことを書かうとして、トルストイの母の従弟ウロンスキー公爵が十二月黨の一人であつたり

したところから、ウロンスキー家に傳はつてゐる文書などを調べたりしたこともあつたが、一つは十二月黨の起つた源を究めてナポレオン戦争に至つて、十二月黨のことよりも寧ろナポレオン戦争を主題とした「戦争と平和」に専心することとなつたため、また一つには、十二月黨がフランス思想の影響に發したもので、ロシアの純國民的運動でなかつたといふトルストイの見解も生じ、またその上檢閲の方がやかましいといふ事情なども手傳つて、かたがた幾度か書き出してはやめて、三つの断片が未完のままに残されるやうな事になつたのである。それでも、彼の宗教上の諸論文に對する檢閲がやかましくて、何一つ自由に公けにすることの出来なかつた千八百八十四年の間に、公けにすることを許された唯一のものは、この「十二月黨員」の三断片であつたのである。

教育上の諸論文 春秋社版の全集第三卷には、千八百六十一、二年トルストイが最も教育に熱中した頃を書いたものが中心となつて、「國民教育に就いて」以下「ヤースナヤ・ポリャーナ學校」までのもの、千九百九年頃までに書いたものもまとめてその後附け加へてある。就中彼の教育上の考へを最もよく説明してゐるものは「國民教育に就いて」、「讀み書きを教へる方法に就いて」、「訓育と教育」、「教育の進歩とその定義」の四篇である。彼の教育上の意見の主要な點は、強制を非とする自由教育の主張で、少數または一人の人が、自己の好むやうに他人を作らうとするのは教育の弊であるとして、専ら被教育者の心力の自由な活動を唱へ、隨つて試験制度の如きも全廢を主張した。トルストイの布教的宣傳的事業乃至言説の他の凡ての方面と同じく、教育の方面でも彼は不自然な「文明」を否定し、自由な自然な心の活動を唱へた。教育上の諸論文は、十六年の後、その「わが懺悔」の中で自ら非難してゐるところであるが、それは、トルスト

イのやうな常に未到の新境地を志して進む人にとつては、またトルストイのやうな、興奮してはわれ知らず己れを誇張する傾きのある人にとつては、自然なことであつて、トルストイの一生の事業の上で、教育上の事業や言説は、やはり可なり重大な地位を占めてゐる。彼の主張を實現することはもとより難事であつたが、しかし彼自身の持つてゐた成就の確信が、やはりその方向へ何程か前進せしめたことは、彼に就いて人の學ぶべき點である。「ヤースナヤ・ポリャーナ學校」は、教育上の意見を普及し、實際教育事業の結果を報告するために出された雑誌で、千八百六十一年の間、一年間十二冊だけ出して、賣れないために廢刊した。上記の全集に收めたものにも、千八百六十二年の十一月、十二月となつてゐるが、それは現存のロシア文の全集中最も完全なものとなつてゐる未亡人編纂の版によつたので、實は千八百六十一年でなければならぬのだが、本國で未亡人の手に成つた全集にすら、この種の粗漏を免れない。トルストイの眞に完全な全集は、千九百十七年の革命後モスクワのトルストイ協會で出版準備中であつた。

#### 四

イワン・イリイッチの死 千八百八十四年の頃から筆をつけて、千八百八十六年三月二十二日に完成した。一般民衆のために書いた小話を除いては、「アンナ・カレニナ」を出して後の最初の創作であるといつてよい。最もありふれた、世間並みな、それと同時に最も恐るべき虚偽の生活を送つて來た裁判官のイワン・

イリイッチの死——その恐ろしい苦しい惨ましい死は、初めて暗い偽りの生活の恐ろしさを痛感せしめる。彼の過去の生涯の空であつたこと、眞の生活のよろこびが、我慾我執をすて得たところから生れるといふことを、死の床に臨んで初めて知るやうになる。トルストイの晩年の作品は多く「心理的實驗」の形をとつてゐると謂はれる。これもその一つであらう。

クロイツェル・ソナータ トルストイの晩年の作品は、多く社會上道德上の問題に關聯して、深刻な「心理的實驗」を提示するといはれてゐる。この作もまたその種のもので、恐らく最も強烈な濃厚な色調を帯びたものである。千八百八十九年の作である。この作は教會を初め社會の各方面から激しい非難攻撃を受けた。作者はこの作で肉の結婚を否定し、キリスト教的見地から見れば世間一般の結婚制度は墮落であるとした。彼は永遠の愛を高唱する藝術と相並んで、永遠の愛のための恐るべき障礙を極力排撃するこの破邪の藝術、憎惡の藝術を出だした。深刻で奮進的な恐ろしい程のトルストイの現實批評と精神上の苦悶と力闘とが遺憾なくこの作に見られる。性の問題を取り扱つたものとして、また家庭の問題を取り扱つたものとして、この作がひとりロシア本國に於いてばかりでなく、ひろく世界のキリスト教國に著しい激動を與へたのはその筈である。

この作は出版後、久しくロシアでも公刊を禁ぜられてゐた。風教上有害の著作と見られたからである。しかもこの作が、トルストイの未亡人の編纂した全集の第十三巻に收められるに至つたのは、アリェクサンデル三世の特別の許しによつたと傳へられる。皇帝はソフィヤ・アンドリエーエヴナ夫人に謁を賜うて、家庭及び結婚を否定するこの作品を何故それ程熱心に全集に收めようとするのであるか、作者の妻としてこ